

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefecture
Cultural Assets Research Center

第 24 号 2010

講演録「環境史からみた古代の秋田」 辻誠一郎 1

武藤鉄城『石器打法研究』をめぐって 小林 克 22

縄文時代の珪質頁岩採掘址群
-三種町上岩川遺跡群の構成と採掘・石器製作・搬出- 吉川耕太郎 38

横手盆地における払田柵成立以前の古代集落
-大仙市諸又遺跡の事例を端緒として- 高橋 学 59

中国における文化遺産保護管理体系の紹介 楊 芳 77
(訳: 高村知恵子・王義軍)

秋田県埋蔵文化財センター
Akita Prefecture Cultural Assets Research Center

シンボルマークは、秋田県北秋田市白坂(しろざか)遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefecture
Cultural Assets Research Center

第 24 号

2010

秋田県埋蔵文化財センター
Akita Prefecture Cultural Assets Research Center

序

当埋蔵文化財センターは、秋田県の埋蔵文化財の公的調査研究機関であり、主要な業務の一つとして開発事業等に伴う緊急発掘調査を実施し、調査の記録である報告書を刊行しております。こうした業務を遂行するにあたっては、担当する職員の日常的な研究が必要であり、発掘調査から報告書作成までの業務はそうした基礎の上に成り立つものと考えます。

本誌は、このような職員の研究成果や業務に有益と思われる資料を紹介し、職員及び業務の質的向上をはかる目的で設けられました。

本号では、平成19年度秋田県埋蔵文化財報告会での講演録「環境史からみた古代の秋田」、秋田県において大正末から昭和の戦後しばらくまで、民俗学、郷土史、そして考古学で活躍した武藤鉄城の石器研究をとり上げた「武藤鉄城『石器打法研究』をめぐって」、縄文時代の石器石材採掘跡である上岩川遺跡群6遺跡の関係と採掘活動の実態について論じた「縄文時代の珪質頁岩採掘址群」、大仙市諸又遺跡の出土遺物を通して横手盆地における古代集落の成立と展開を払田柵との関連から考察を加えた「横手盆地における払田柵成立以前の古代集落－大仙市諸又遺跡の事例を端緒として－」、秋田県甘肃省文化交流事業平成21年度甘肃省文化交流員による「中国における文化遺産保護管理体系の紹介」を掲載しております。

御一読の上、当埋蔵文化財センターの業務と担当職員の研究活動に、なお一層の御指導と御鞭撻をいただけますようお願いいたします。

平成22年3月

秋田県埋蔵文化財センター

所長 佐 藤 了

秋田県埋蔵文化財センター
研究紀要 第24号

目 次

序

講演録「環境史からみた古代の秋田」 辻誠一郎 1

武藤鉄城『石器打法研究』をめぐって 小林 克 22

縄文時代の珪質頁岩採掘址群

- 三種町上岩川遺跡群の構成と採掘・石器製作・搬出 - 吉川耕太郎 38

横手盆地における払田柵成立以前の古代集落

- 大仙市諸又遺跡の事例を端緒として - 高橋 学 59

中国における文化遺産保護管理体系の紹介 楊 芳 77

(訳: 高村知恵子・王義軍)

演題 「環境史からみた古代の秋田」

辻 誠一郎*

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました東京大学の辻です。限られた時間ですが、これまで考古学で対象になってきた旧石器時代から現代までの人と環境とのかかわりについて、秋田を中心にお話をしたいと思います。人と環境のかかわりについては、実はまだわかっていないことが多いくて、少し見通しが立ってきたというのが実情です。発掘調査あるいは歴史の文献調査の折りに、人と環境とのかかわりを考えていただき、また、これからどんなことを考えなければならぬのかをお話してみたいと思います。

さて、昨今では毎日のようにゴミ処理など地域的な環境問題やグローバルな地球環境問題が取り沙汰されております。今日も福田首相が京都議定書に代わる提案をということで話題になっておりました。今おこっている地球温暖化を中心にした地球環境問題は、あと10年あるいは20年すると、南極や北極の氷が融け、その分だけ海面が1mから2mも上がるといったものです。すると海に近い平野や都市に住んでいる人達の居住域あるいは南洋の珊瑚礁など、標高が低い所は海面下に沈んでしまうという危機にさらされるわけです。それだけでなく大変な問題が同時に起こってくるわけです。例えば、気温や降水量によって支えられている植物達の生活のスタイルが変わり、植生も変わってくる。それに依存している動物の生活にも影響が出てくる。生態系は人社会も含んでいますから、当然、人社会に大きな影響を与えてくるはずです。

身近な例として醸造つまり酒造りを考えてみましょう。今、秋田ではたくさん日本酒が造られていて、食文化を支えているといつてもいいと思います。この日本酒と蒸留酒である焼酎の日本での境は、だいたい年平均気温が16°Cのラインにあたります。九州の熊本県では、球磨川あたりがその境界にあたります。本州では紀伊半島や伊豆半島の突端、それから房総半島の突端が境界より南にあたります。これが年平均気温2°Cくらい上がる、その境界は日本列島のど真ん中くらいまで北上してしまいます。秋田はまだ辛うじて日本酒圏内ですが、やがて焼酎圏に入ってしまう可能性があるのです。これ、大変なことだと思います。

旧石器時代から現在までの歴史において、縄文人はとんでもない規模の地球温暖化を経験しました。まず、そこから話を始めたいと思います。最初にお話したいことは、その地球温暖化のすごさです。それは海面がおよそ1~2m上がるような現在生じている地球温暖化ではなくて、海面が100mも上がってしまうという大規模なものでした。急激な地球の温暖化によって大量の氷河が融け、その分海面が上がったのです。陸上の生態系も海洋の生態系も大きな変貌を遂げ、世界に類まれな多岐に渡って生活を支えている多様な文化の集まりである縄文文化を作り上げました。それがいかに特異なもので、なぜ特異だったのかを考えてみましょう。

今、日本列島の地図を2枚見ていただいている（スライド1）。左側の図は、海面が現在よりおよそ100m低かった時代です。後期旧石器時代です。右下の図が、縄文時代の前期、最も温暖であったとされる時代です。約2万5千年前と書いてあります後期旧石器時代は、全般に寒冷な気候が卓越していて、氷河が両極中心に大規模に拡大していた頃です。この寒冷な時代は約1万1千年前に終わります。研究者によつては、もう少し遡らせることができるという人もいますけれど、これからお話しする環境変動から見ると、新ドリアス期と呼ばれる最後の短期間の寒冷化のあと、おおむね1万1千年前から温暖な気候に見舞われる本格的な縄文時代に入るという風にお考えいただきたいと

* 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻 教授 理学博士

思います。この1万1千年前は、海面が現在よりも100m低かった時代から、右の図に示されるような縄文時代前期に向かって、海面が急激に上がっていく変換点にあたるのです。左の図をよくご覧になつてください。瀬戸内海はありません。東京湾もほとんどありません。佐渡島が本州とほとんどくっつくような状態で、島根・島取沖の隱岐島が本州とくっついています。北海道の北に位置する大陸はサハリンと地続きになり、サハリンは北海道とも地続きになって、大陸から北海道までが地続きだったのです。そして日本海は湖のような状態で、日本湖と呼ばれたりします。現在、秋田沖にまで流れていて北海道まで達している対馬暖流という暖かい暖流がありますが、当時は日本海にまったく注いでいなかったのです。つまり、日本湖のような状態ですから、暖流は入ってこない状態です。

これは日本列島の植生を植生図という地図にしたもので（スライド1）カラー6色で表してあります。気温や降水量に深くかかわって植物達が作っていた景観です。二つの図を比較してみると、大きく違っていることがわかります。左の図には縄文時代前期の図に共通するものが乏しいのです。つまり現在と類似する植生が乏しいのです。かろうじて、縄文時代と比較していただくと、濃い緑が中部地方から北海道の左半分をおおっており、縄文時代では北海道の東半分に残っているように見えますが、厳密に言えば内容は同じものではありません。樹種の多くが入れ替わっていて、組成は一致しないのです。薄い緑で表したところは西日本に広がっていますが、縄文時代では同じく北海道の西半分に残っています。これも組成が大きく違っていて、旧石器時代から縄文時代にかけて大きな変化があったことがわかります。

海面が100mも低かった時代の森林は、現在のサハリンからシベリアにかけて見られるような針葉樹の多い森林でした。とくに大陸側の大興安嶺一帯に分布していた森林にそっくりだったのです。例えば、秋田の所を見ていたらと濃い緑に色塗りされていますが、ここにはアカエゾマツやグイマツ、ハイマツといった針葉樹に、ダケカンバなど限られた落葉広葉樹が混生する森林が成立していたのです。男鹿半島の箱井や大館市の池内遺跡では当時の森林が泥炭層や火山灰に埋没したいわゆる埋没林が確認できています、それぞれ樹種同定や花粉分析によって当時の森林が復元されています。

東日本の関東地方から西の方に広がっている薄い緑で塗られた地域では、チョウセンゴヨウやカラマツといった針葉樹とコナラ属を中心とした落葉広葉樹が混生していて、針広混交林を作っていました。現在、チョウセンゴヨウが見られるのは、朝鮮半島の付け根から中国、旧満州といったところ、あるいは先ほど申し上げました大興安嶺に大きな森林を作っています。日本にも無いわけではありませんが、辛うじて尾瀬ヶ原の周辺の山に点的に残っています。チョウセンゴヨウといえば、デパートなどの木の実売り場で売っている松の実がその種子になります。非常に大きな木になります。それがごく普通に鬱蒼とした森林を作っていて、ダケカンバなどと一緒に森林を作っていました。汎針広混交林と呼んだりしています。汎はありふれて、針は針葉樹の針、広は広葉樹の広で、針葉樹と広葉樹が入り交じって林を作っています。そういう特異な林が広大な面積を占めていたのです。まあ言うなればこのチョウセンゴヨウやカラマツというのは、当時の日本列島のどこにでもあったわけです。こういう森林の中では限られた動物しかおりません。下草が非常に貧弱ですから、どうしても生態系の中身というのは多様ではなくて、現在の日本列島に比べましてもはるかに貧弱です。生物生産量といいますけれども、生き物たちが作る有機物量がものすごく少なかったわけです。

なぜ海面が最大で100mも下がっていたか、何度も地図を見ていただいているのでお分かりになると思います。100m分、海水が水蒸気として大気中に吸い上げられ、それが偏西風の風下に氷河として固定されていたのです。海水100m分ですよ。ものすごく大きな量であったことが予測できます。現在の北極や南極、そしてシベリア、あるいはヨーロッパ北部のスカンジナビヤやアラスカ、カナダ、カナダとアメリカのちょうど境目あたりの五大湖周辺まではどっぷりと厚い氷が載っていたのです。その氷が先ほど申し上げましたように地球の温暖化によって急速に融けていったのです。氷河が融けるとその分の氷が海に戻りますから、海面が上昇する。その結果、100mも上がるという現象をまねいたのです。私はすごく簡単に言っていますけれども、この大規模な温暖化と生態系変化が旧石器時代の人達から縄文時代の人達に受け継がれていくわけです。

縄文時代では、結果的にこの右図（スライド1）のような森林植生に変化しました。皆さんができる秋田はどうなっていたかというとピンク色で塗ってあります。これは温帯落葉広葉樹林です。その代表的な森林がブナ林です。ブナ林やミズナラ林、あるいは両者が混生するようになるのです。こういう落葉広葉樹林の時代においても、秋田ではたいへん興味深い変化を遂げることになるのです。すなわち、秋田を中心とする日本海側ではスギという針葉樹が縄文時代の後半期を通じて分布を拡大し、平野から河川流域を通じて盆地内部にまで広がっていくのです。山地帯にはブナ林を主にした落葉広葉樹林が、平野や盆地にはスギ林が成立し、独特的の森林植生を形成していったのです。スギ林の拡大が始まったのはおよそ4千年前と見積もっています。これは縄文時代中期後半から末期に相当します。さらに縄文時代後期になると、スギの拡大は本格的となり、山地帯にまで拡大していった可能性があります。そして、弥生時代を経て古代になると、平野や盆地に拡大していたことと、針葉樹を容易に伐採できる鉄器の普及によって、主として建築材や土木用材として大いに利用されるようになります。弥生時代から古代は、スギ林拡大のピークに達したのではないかと思います。

ところで、針葉樹林に住んでいる生き物達はあまり多様ではありません。生産される有機物量も意外と少ないのですが、スギ林も例外ではありません。秋田にはスギ林というのはいくらでもありますから、スギ林の林床をご覧になるとよく分かると思います。スギ林の中は、ブナ林と比べると、そんなにたくさん動物はいないのです。林床も結構スカスカです。スギの葉っぱや木材には固有の化学成分が含まれていて、それが虫や菌を寄せ付けない。ブナ林の中にはアルコール発酵に関与する麹菌が住んでいるのですが、スギ林の中には乏しいといわれています。スギ林の拡大は、青森県でも岩手県でも起らなかったことで、おそらく縄文時代中期後半での気候の寒冷化、および多雪化をもたらした湿潤化によるものと考えています。

さて、そのスギはどこからやってきたのでしょうか。もともと秋田に居続けていたのでしょうか。そしてどのようにした拡大していったのでしょうか。これらは謎に包まれていて、解明が待たれています。最後にもう一度この秋田の風土を特徴付けるスギ林のことをエピローグとして取り上げておきたいと思います。

旧石器時代から縄文時代にかけて、環境の大きな変動とともに成立した温帯落葉広葉樹林は、縄文文化を育んだ豊かな生態系と言ってもいいかと思います。旧石器時代の日本列島に描かれた森林植生というのは、大陸に現在でも分布している森林植生と類似性の高いものでした。私はそれをもって、当時の日本というのは、大陸から突き出た日本半島の時代であって、縄文時代から今日までは日本列島の時代であると捉えたことがあります。日本半島の時代から日本列島の時代へと大きく環境が変わったというように、環境史の立場から時代を捉えなおしたのです。岩波書店から出した『いくつかの日本II　あらたな歴史』においてです。旧石器時代の日本半島というのは、大陸と類似性が高くて、大陸の極東部の景觀とあまり変わらなかった。ところが縄文時代になりますと、全然違ったものになるのです。縄文時代になると、世界を探しても類似したものがごく限られた所しか見つからない、そんな特異な森林植生になったのです。どうしてそんなことになったのかといいますと、旧石器時代では日本海（湖）に対馬暖流が流入してなくて、黒潮暖流も沿岸から遠く離れて勢力が小さかったのですが、これが縄文時代になりますと、海が開けて日本海ができ、日本海に対馬暖流が入るようになって、暖流の勢力が大きくなります。黒潮暖流の勢力は大きくなって、日本列島太平洋岸を洗うように流れれるようになります。そして、中緯度温帶域とよく言われるよう日本列島がほぼっぽり温帶域となり、温かく季節変化がはっきりと現れてくるようになります。そして、もっと大きく変わったことは、雨がものすごく降るようになったということです。これは日本海側に対馬暖流が流れるようになったということもありますけれど、起源をたどれば大陸内部でのモンスーンに原因する水分に富んだ前線が西側から東側へ、日本列島をうまいこと洗うように移動するという気象条件に恵まれるようになっていきます。降水量が多くなり、そして、気候も温暖化し、温かくなつた。その結果、日本列島の生態系というものは、大陸のそれとは大きく異なる特異なものになったのです。それは、白神山地に辛うじて残っていますブナ林の成立、縄文時代の森林植生の地図（スライド1）にピンク

色に描いてある特異な落葉広葉樹林の存在によって知ることができます。西日本の方も実は特異です。茶色で描いてある暖温帯落葉広葉樹林（すなわち照葉樹林）帶は、カシ類やシイノキのようなドングリをたくさんつける木から成り立っている森林です。これも東南アジアの降水量の多い地域を北上してきたもので、大陸側にはほとんど見られないものです。よく似た地域が他にあるかずっと探してみますと、実はいくつかあるんです。北米の東部です。五大湖からもう少し東の方へ行きます。そこにアメリカブナというのがあって、カエデ類とともに降水量が比較的豊富な温帶域で成立する温帶落葉広葉樹林が見られるのです。五大湖周辺はカエデ類に象徴されるメイプルストリートということがありますね。ヨーロッパの中海東岸部とドイツ周辺の中央部にもブナの仲間を主体とした温帶の落葉広葉樹林が見られます。これらは温帶で降水量が多いという共通の気候条件によって育まれたものといえるでしょう。

落葉広葉樹林といえば、ブナやミズナラといった主要な樹種はいわゆるどんぐりと呼ばれる果実をたくさん生産します。秋田の周辺ではドングリをたくさんつけるものがあります。堅果類といえばケルミなどもあります。堅果類がそろっているのは大きな特徴です。しかもこの森林には面白い面がたくさんあるのです。そのひとつは、林縁の日当たりのいいところではブドウの仲間、サルナシ、マタタビなどの蔓植物が絡み、ニワトコやヤマダワグなどの中低木など、有用な果実をつける植物がすごく豊富なのです。これが、縄文文化を育んだ重要な要素の一つと考えていいと思います。

目を海側に転じてみると、そこにも重要な要素のひとつが見えてきます。海の資源ですね。対馬暖流や黒潮暖流が、日本列島を洗うように大きな勢いで流れしていくわけですから。旧石器時代の日本湖や太平洋沿岸にはマグロやカツオは回遊していなかったでしょう。たくさん回遊魚がござって日本列島を洗うように流れ来る海流に乗っかって往来するわけですから、人の生活にとっての重要な生態系要素であったことはたちどころに理解できます。旧石器時代から縄文時代への移行で、海面は大きく上昇し、これに伴って地形も変化する。海と陸の分布が大きく変化し、先ほど述べたように東京湾ができるなど、内湾という環境がいたるところに形成される。旧石器時代では瀬戸内盆地であったのが、その盆地に海水がたまつて瀬戸内海になる。北海道、サハリン、シベリアは、海峡によって分断されてしまうという風な大きな変化を遂げていきました。生態系の根幹を成す、動物や人間の生活を基本的に支えていく植生が、海況の変化に対応して温暖で降水量の多い気候に育まれる広葉樹林に変化していきました。まさに海の生態系も陸の生態系も揃って大きな変化を遂げたといえるでしょう。

さて、ここで旧石器時代から現代までの陸上の生態系がどのように変化してきたかを見てみましょう。これ（スライド2）が本州中央部あたりでの変遷をモデル化したものです。東北地方も含まれていると理解してください。後期旧石器時代では、先ほどからお話しているように針葉樹の多い温帯針広混交林が広く成立していましたが、気候環境の急変に伴って、落葉広葉樹林へと生態系が激変しました。この生態系の激変が縄文文化を育んだことは、食文化やそれによって確かなものとなった定住生活を見れば明らかです。

ところで、これまで縄文人というのは、自然の生態系とうまくかかわりながら自然と共生をしていったという言い方をされてきました。この共生という言葉は大変難しい言葉で、私は使いませんけれども、どのようなことが共生なのかは大変に難しくて、實際にはまだ解っていないと思います。どんなことをしていたのか。それを解説する作業を私は長年やってきましたが、ようやくこんなことが解ってきました。というのは、縄文人は自然をあまり壊さないで生きていたと言われてきましたが、決してそうではなくて、あるときには自然を大きく作り変えて、自然の持っている性質をうまく工夫をして人の生活のために使っている。その結果、二次的あるいは人為的という、人の生活のために必要なものを、手間暇かけて作り変え、作り上げる。二次的あるいは人為的と呼んでいる生態系を作ってきたということが解ってきたのです。たとえばこれからお話しするクリの林がそうです。これについてはおとなりの青森での事例を見ながら、あとで確かめておきたいと思います。

その前に、縄文時代から弥生時代への生態系の激変を見ておきましょう。日本列島どこもといつていいと思いますが、弥生時代への移行において、水田稲作農耕と関係する畑作農耕の伝播・波及によっ

て日本列島の生態系は大きく変わります。ところが、先ほど言いましたように、秋田は少し様子が違っていて、それには特別な理由があります。それはスギ林が縄文時代の後半に急速に拡大してきて、弥生時代から古墳時代の頃は、スギ林が平野部を中心にならに部分を覆うようになってきていたのです。私流に言いますと、生態系の古代化ということが起こってくるのですが、縄文時代後半期から弥生時代、古墳、古代に向かって、スギという針葉樹が急速に拡大します。そして古代ではこれを積極的に資源として利用し、生態系を人為的に改変していくのです。東北地方の歴史を語るときに、縄文時代ともう一つ、奈良・平安の古代を抜きにしては語れないといえるくらい重要な私は思っています。その古代に向けて生態系の古代化ということが起こる皆さんよくご存じのように、古代では鉄の刃のついた加工工具の大量生産と流通によって、針葉樹であるスギを資源として大量伐採することができるようになったわけです。この地方に固有の林産業の基礎が形成されていくわけです。これは、他の地域に見られない特異なもので、それが今日まで続いているといつてもいいのではないかと思っています。このように縄文時代後半期から古代にかけて、日本列島の生態系は大きく変わってしまうのです。長くなりましたが、ここまで前書きを置いて、これから秋田の中の実情を見ていくこうと思います。

まず、後期旧石器時代の海面が現在より 100 m も下がっていた時代の環境を裏付けてくれるものは、実は秋田県内にはたくさんあるのです。あまり話題にならなかったのだと思いますが、これは大館市の池内遺跡です。「えっ、池内遺跡って縄文の遺跡じゃなかったの」とおっしゃるかもしれません。そうなのですが、池内遺跡は後期旧石器時代の堆積物からなる台地の上に立地していました。ここは今、道路が通っています。その道路を通すために掘り下げられたこの壁（スライド3）、ここに森林が埋没していたのです。この黒くなっているところは森林です。この森林を覆っている堆積物は白色の軽石からなっていますが、これは十和田カルデラが 1 万 3 千年前に巨大噴火を起こして噴出した火碎流です。八戸火碎流と言っていますが、昔は八戸の方にしか流れていないと考えられていましたので、八戸火碎流と呼ばれていますが、四方八方に流れていることがはっきりしてまいりまして、秋田の方にも大量に流れて来ているということが分かっています。その火碎流の下敷きになった当時の森林が蒸し焼きになっていたのです。これだけではありません。もう一つ白色の地層があるのです。これが 3 万年前の大不動火碎流と呼ばれるもので、これもまた十和田カルデラの巨大噴火によってもたらされたものなのです。大不動という地名も、五戸の近くにあるんです。その地名をとって大不動火碎流と呼んでいます。このように池内遺跡が立地している台地は、ほとんどが火碎流からできているということになるのです。後期旧石器時代における十和田カルデラの 2 回の巨大噴火がなければ、縄文時代の遺跡が立地する高い台地が形成されていないということなのです。これも土地を作るという環境要素ですね。火碎流が流れる。あるいはそれを噴火させるという事件は、極めて甚大な生態系破壊につながりますけれども、それが結果的には台地を作ることでもあるわけです。ちょっと複雑な気持ちになりますが、北秋田の辺りは、こういう度々の火碎流で土地が作られているということを忘れてはいけないと思います。そして火碎流に埋もれたわゆる埋没林は、先ほどから何度も述べてきたように、針葉樹主体の大陸型の森林だったのです。

さて、これ（スライド4）はいったい何だと思われますか。これは十和田カルデラ東方の五戸の方ですが、八戸火碎流の中に根こそぎ森林が飲み込まれて、蒸し焼きになった丸太材なのです。この白色の軽石は八戸火碎流で、この中にズボズボと突き刺さって、丸太材が同じ方向を向いているのがわかります。丸太材は直径 60cm から 70cm もあるのです。中まで真っ黒になって、蒸し焼きになっているのです。この他、先ほどの池内遺跡での八戸火碎流の写真を少し拡大して見たところです。ここでは森林の立ち株やなぎ倒されて同じ方向を向いている木がズボズボと突き刺さっている様子がわかります。そして 2m くらいの周期で凹凸があります。これは何かといいますと、1 万 3 千年前のアースハンモックと呼ばれる周水河現象のひとつなのです。その頃はすでに地球が温暖化を遂げていたのですが、地表部が凍結と融解を繰り返しているうちにこのような土壤の構造を作り出したのです。シベリアへ行けばふつうに見られる現象ですが、当時、秋田でもふつうに見られたわけですから、気候は

まだ相当寒冷であったことを示しています。大館の池内遺跡でこんなものが見られて私もびっくりしました。こういう寒冷な時代の証拠というのが、各地で認められるわけです。

寒冷な気候に見舞われた旧石器時代の環境について、もう1・2枚、見ていただきたいと思います。これ（スライド5）は、男鹿半島の箱井という所です。こういう地層の壁がありまして、よく見ると黒色の泥炭層の中央に白い筋がありますね。この白い筋は姶良Tnテフラと呼ばれる火山灰です。鹿児島湾には巨大なカルデラがありますが、これを姶良カルデラと呼んでいます。十和田カルデラよりもはるかに大きい巨大なカルデラです。このカルデラが2万8千年くらい前にとんでもない巨大噴火を起こします。それが大量の灰を噴出して、上空高く吹き上げられたので、偏西風に乗って男鹿までやって来たのです。津軽でも見つかっているから当然見つかるだろうと思っていたら、案の定見つかったのです。この火山灰は地球を何十周もしているはずです。北半球の地球を何十周もしているだろ。ですからグリーンランドの氷河の中にもバックされています。そういう巨大噴火が後期旧石器時代にはあったのです。おそらく広域にわたって生態系に甚大な影響を及ぼしたことでしょう。箱井では、この白色の火山灰の直下に森林が埋没していて、トウヒ属などの針葉樹林であったことがわかっています。

こんな風に、縄文時代がどんな時代だったのかということを、その前の後期旧石器時代の環境や生態系を調査し、縄文時代と比較することによってはっきりしてくるのです。今見ていたいたように、秋田県内にもこうしたすごい1級の資料がたくさん埋もれていて、こうしたものを材料に調査を進めていますと、冒頭で見ていたいたような生態系の変遷モデルを描き出すことができるのです。

ここで縄文時代に入りたいと思います。これ（スライド6）は青森平野の南部の大沢というところです。水田面から地下8mまで掘り下げたところです。大水が出たときにここに水を入れようという水害対策のために掘られた逆水池です。工事中のため、逆水池の底が全部見えているのです。この崖に見られる白い筋が先ほどから出てきています戸戸火碎流で、およそ1万3千年前です。これが流れたあと、深い谷が形成されている様子がわかります。これが縄文時代の始まりといっていいかと思います。この谷の形成は1万1千年くらい前にさかのぼります。これが縄文時代という温暖な時代を特徴付ける縄文海進の出発点になっているのです。1万1千年前の谷形成はおそらく「新ドリアス期」と呼ばれている短期間の寒冷期にあたると考えています。地球環境が氷期から間氷期へと急激に温暖化を遂げている過渡的な時期に、突発的とも言える寒冷化が起こっているのです。その後は一気に温暖化を遂げて、海面は一気に上昇したのです。谷の中にはそれ以降の厚い泥炭層が堆積しています。泥炭層には森林がそのまま埋没したいわゆる埋没林が何層にもわたって確認できます。この谷の中を流れている小さな川筋が、このように（スライド6）見事に残っています。これは、私がヘリコプターに乗せていただき、上空から撮った写真です。上空から見ないとわからないくらいスケールの大きな現象なんです。谷を埋めている泥炭層は縄文時代の始まりのころから最近まで連続しているので、環境変動を連続的に記録しているタイムカプセルといえるでしょう。

昭和59年、つまり1984年、私も発掘調査に関わることができた現在の由利本荘市の菖蒲崎貝塚（スライド7～9）を紹介したいと思います。この貝塚が1万年前から7千年前くらいまでの縄文時代早期の環境や生活文化を解明する上で重要な位置を占めていることが次第に明らかになってきています。場所を見ていきますと（スライド8）、この写真が昭和59年当時の発掘現場の遠景です。子吉川の対岸から撮っているのですが、台風が来たために川が相当増水しています。前日くらいまでは水浸しちゃったんです。そう言う時期に発掘調査が始まったのです。菖蒲崎貝塚は本流の子吉川と支流の芋川が合流するところで発見された遺跡です。これ（スライド9）が当時のメンバーで、中央の女性が現在九州大学におられます小池裕子先生です。発掘調査の手順を打ち合わせているところだったと思います。この発掘調査を契機として、私は縄文早期の海の問題すなわち縄文海進の様相とか、人々を取り巻く環境についてようやく考えるようになってきたわけです。

いろいろなことが明らかになってきましたが、今日はトピックスをひとつご紹介したいと思います。2年前ですね、完全な形をした大型の土器が出てきたのです。この左側の土器（スライド10）ですね、

非常に特異な形をしたほぼ完全な土器です。この内側の底に近い部分に焦げて固まったと思われる炭化物が確認されたのです。今日お見えになっている富樫泰時先生が発見されまして、これはすごいということで、炭化物の実体を調べることにしたのです。土器の内側に粒々がいっぱい見えますね、これがたくさん付着していたのです。焦げてこびりついている、そういう状態でした。それをずっと丹念に調べてまいりましたら、炭化物の実体は球形で、壜状になった特異な種皮の構造が観察できたのです。こういう特異な構造をもったものはあまりなく、すぐアサ（麻）だということがわかりました。このことは縄文人のアサ（麻）利用に関して重要な資料を提供してくれました。と言いますのは、アサというのは西アジアから少し北のトルコから中央アジアを原産地とする栽培植物なのです。周辺域の中国のデータはもちろん、ロシアのデータもありません。東南アジア、南の方のデータもないのに、突然日本で、縄文時代早期というとても古い段階において出土したわけです。この年代測定も東京大学のタンデムという大型の加速器質量分析計で計測したところ、およそ7千年前と測定され、これを暦年代に直してみると、なんとおよそ8千年前であることがわかったのです。およそ8千年前も前に、原産地から遠く離れたアジアの東端の日本でアサという栽培植物が発見されたのです。しかも明らかに特殊な土器で煮詰めているというか、利用形態を残した状況証拠として発見されたのです。栽培していたことを確認することはなかなか難しいですが、こうした状況で出てきたわけですから栽培していた可能性は高いと判断されるし、油を利用するか、あるいは煮て食用にするか、何らかの目的で利用していたということは間違いないと思います。これまで私は水田稲作農耕が伝わってきたのは弥生時代だから、それ以前にいろいろな栽培があったとしても、断片的で、しかもそう古くまでは遡らないだろうと考えていたわけです。ところがとんでもない、すでに8千年前に、立派なアサという栽培植物が利用されたことを示す状況証拠として出てきたわけですから。大陸の方との交流、交易というもののも盛んにやっていた可能性が出てきたわけです。アサが見つかったというだけでは片付かない大きな問題を提起しているように思えます。これが縄文時代の環境文化や生活文化を考える上で、大きな意味をもつ新たな事実を投げかけたことになるわけです。

さて、縄文時代早期よりは集落や生業のことがよくわかっている時代、縄文時代前期から中期にかけての秋田から青森にかけて、人々はどのような生態系の中で、どういう風に生態系とかかわって生きてきたのかということを考えてみたいと思います。これは、私が長年取り組んでまいりました三内丸山遺跡です。それから先ほどヘリコプターから撮った写真をお見せしたのは、あれは大矢沢野田遺跡ですが、実はこれも三内丸山遺跡と時期が重なる縄文時代の立派な遺跡です。そして人の生活がほとんど確認できていない八甲田山の田代という湿原です。これ（スライド11）は、それら3箇所での花粉分析の結果を比較したものです。花粉分析の結果はおおむね集落とその周辺域の植生を反映していますので、集落の形成から終焉まで、植生がどのように移り変わっていったかを読み取ることができます。三内丸山遺跡では、居住が始まつてから終わりまで、年代測定の結果からはとても長い期間にわたることが分かっています。縄文時代前期の中ごろから中期の終わりまで、年代測定の結果にもとづいて暦年に直すと、実に5千9百年前から4千年前まで、何と千九百年もの長きにわたって集落が存続していたことが分かっています。この3か所でどんな風な変化があったのかということを調べたものです。

まず、三内丸山遺跡を見てください。およそ5千9百年前で集落が形成されます。円筒土器文化の最初の土器である円筒下層a式土器というのがこの段階で出てまいります。そして集落が形成されます。それと同時にクルミ、そしてまもなくクリが急増してきます。特にクリは純林を形成していたかのようにクリ一色の景観を示しています。これは三内丸山遺跡だけの事情だったのでしょうか。そうではなかったのです。少し離れた所の大矢沢野田遺跡を見てみても同じ変化が明瞭に読み取れます。大矢沢野田遺跡ではクルミはたいして出ないけれども、クリは同じように大きな顔をするようになります。これは要注意でウルシの仲間も一緒に出てくるのです。おそらくウルシ畑が近くにあったのではないかと思われます。ウルシ畑がなければ、こんなウルシの仲間は出てくるはずはないのですが、たまたまそういう所にヒットしてしまったのでしょう。これは明らかに縄文人が、元あったブナやナ

ラ類からなる落葉広葉樹林を開拓・開墾して、自分達の手で、クリ林やウルシ畠を作ったことを示しています。自然の生態系ではクリやウルシ仲間が単独で森林をつくることはありえないことで、しかも長期間存続しているわけですから、人為の重要な証拠になります。縄文人は千数百年間という長きにわたってこれを維持したわけです。皆さんの中にもクリ林を管理栽培している方がおられるかもしれません。クリ栽培を百年、2百年にわたって続けられてきたという経験をおもちの方はおられないかもしれませんのが、三内丸山遺跡では千数百年間という気の遠くなるような長い期間、クリ林という状態を維持するというのは、相当手間暇をかけて維持管理をしないと、続くものではありません。この長大な年数をどのように維持管理してきたかというのは具体的にはまだ分かっていませんが、事実は事実で、この状態を千数百年間も維持させた縄文人のパワーというのが、見えてくるような気がいたします。

ここで、三内丸山遺跡に集落ができた年代である5千9百年前を考えたいと思います。それは、円筒土器文化が登場した年代です。ところが、人の活動が確認できない八甲田山でも、とんでもない大きな変化が読み取れます。ブナ林が急激に衰退してナラ林になっている。これは一体何なのか。山火事が起こって、ブナ林が焼失してしまったと考えています。おそらく陽樹であるナラ林が山火事あとに二次林として成立し、ブナ林が回復していくまでの長きにわたってナラ林が継続したのでしょう。その期間はおよそ4百年間と見積もることができます。これは一体どういうことなのでしょう。実はこの変化の契機となっているのが、十和田カルデラの巨大噴火によってもたらされた火山灰の降灰なのです。八甲田山でもこの火山灰が堆積してから変化が起っていたのです。この火山灰の年代は別途調べられていて、およそ5千9百年前ですから、円筒土器文化の形成、それに三内丸山遺跡の集落の始まりと、すべてが一致するのです。

十和田カルデラの5千9百年前の噴火は、これまでさほど大きな噴火だとは扱われてきませんでした。しかし、近年の火山学の成果によって、巨大噴火であることが分かってきたのです。この噴火でもたらされた火山灰は十和田中^{なか}撮テラと呼んでいますが、最近、火山の爆発エネルギーだと、それが物理学や火山学の立場から総密に検討されるようになって、とんでもないエネルギー放出をしているということが分かってきたのです。この火山灰は、秋田北部から岩手北部、そして青森で広く確認されてきましたが、最近では山形県の米沢盆地や月山でも見つかっています。しかも高熱のガス、エネルギー放出をしているということが分かってきました。すなわち、5千9百年前に何が起こっているのかというと、十和田カルデラの巨大噴火によって八甲田山が山焼きにあって、ブナ林が壊滅的打撃を受けてしまった。しかもなかなか回復できなかった。では、平野部で人の住んでいる所はどうか。円筒土器文化ができて、三内丸山遺跡などに集落が形成された。これらが同時並行であるとするならば、縄文人もまた巨大噴火の甚大なる影響を受けて、生活文化、社会を変えざるをえなかつたといえないのでしょうか。ブナやナラ類の落葉広葉樹林を開拓し、クリの林を造林していった。人が人為的に人為的生態系というものをせっせと作り上げたといえるのです。

結論を申し上げますと、円筒土器文化は十和田カルデラの巨大噴火が最大の原因になって起った。要するにそれ以前の各地に存在した様々な土器文化をもった人達が、この十和田カルデラの巨大噴火によって、巨大な連携ネットワークを形成して、そして円筒土器文化という統一的な文化を作り上げた。もちろんこのプロセスは、まだ分かりません。どのようにしてこのネットワークを形成していったのかというのは、まだ分かりません。そういう社会学的な問題はまだまだ未解決の難問ですけれども、そう考えざるを得ないです。そして円筒土器文化は迅速に分布拡大をして、北海道の渡島半島をも飲み込んで、大きな文化圏を形成するわけです。おそらく、これまで研究事例があまりなかったので、分かっていないだけだと思いますけれども、八甲田山で確認されたような生態系の壊滅的な打撃を受けて、生態系はきっと一変したに違いないと思います。

そして前の図（スライド11）でもう1つ確認をしておきたいのは、これが森吉山ダム関連遺跡でもどんどん確認が進んでまいりましたけれど、きっと秋田県一円、あるいは東北地方全域にわたってと言えることになると思いますけれども、縄文時代の中期の終盤、終わり頃に、クリがどんどんなく

なっていく。三内丸山遺跡でもなくなっていく。大矢沢野田遺跡でもなくなっていく。と同時に、面白いものが増えているのです。トチノキです。今、トチノキが、どういう土器と関連して出てきているのかということを、追いかけて調べています。秋田県でも少しずつ分かってきています。おおむね、秋田県の中南部のこの時期は東北地方の南部に大きな文化圏を持つ大木式土器文化というものがありますけれど、その終盤、特に8b式、9式、10式という段階で、トチノキが確実に拡大して増えるのです。そして、それが人によって、明らかに食料として利用されている。それは基本的には植生が変わって、利用植物が変わってしまったと考えられます。重要な証拠が最近、関東地方の東京西部でもあがってまいりました。下宅部遺跡というところで、縄文中期の終わり頃に谷が形成されて、すなわち、気候の寒冷化に伴って海平面が低下をすると、それによって浸食作用が各地で起こっている。それが大木8b式、9式、10式に対応する土器形式の時期において起こっているということが分かつてまいりました。同時にトチノキが増え、利用され始めるのです。

この図（スライド12）が出てまいりましたので、もう1度先ほどのことを確認しておきますと、断絶という強烈な言葉で書いてありますが、考古学の立場からいたしますと、例えば白座式ですか、そういうことも最近はさらに検討されておりますが、この大木式の文化圏は十和田カルデラの巨大噴火のそれほど大きな影響を被っておりませんから、南の方では大木式はずっと連続いたします。ところが、この秋田の北部だと青森県は、こうした前段階の土器型式がなくなって、突然円筒土器文化というものが形成されて、これが長い年月続いていくということになります。ところがこの終盤になりますと、大木の影響がこの円筒土器に色濃くあらわれてきて、例えばこの辺りでは、楳林式だとか、最花式だとか言われて、ついに大木10式に飲み込まれていくような変化を遂げていきます。午前中に複式炉の話がありましたけれど、実は複式炉が登場してくるのは、岩手、福島などでは大木8b式くらいからではないかと思います。9式、10式ときて、ここで後期に少し残るということもありますけれど、おおむねここでなくなってしまう。まさにこの時期に並行して、同じ変化を辿っている。今日も会場からご質問がありましたけれど、私は1つにはそういう風な植物性食料の加工だとか、その複式炉というのが分布域も重なり合ってくるということから、必ずしもその目的だけのために作られたとは断言できないと思いますけど、それも深く関わっている。そういう風に考えてもいいかと思っています。

さて、私はこういう風に酒も飲まずに話をしておりますけれども、実は結構酒好きで、酒の話をしなければ気がすまないのでさせていただきます。先ほどからしつこく何度も申し上げております円筒土器文化の形成についてですけれども、この時点で大量に酒が造られた証拠があります。それは実は、三内丸山遺跡で最初にその証拠を見つけたのですが、その時は、はっきり言うことができなかったのです。ところが、並行して調査をされていました大館市の池内遺跡で、決定的な状況証拠が挙がってきたのです。大量に造られたのは、三内丸山遺跡でも、また、池内遺跡でも、円筒土器文化がスタートした初期においてだけなのです。先にお話ししておきたいと思いますが、おそらく先ほど申し上げました円筒土器文化圏という大きなネットワークが形成される。社会学的に言いますと、共通経験という、お互いに心を合わせる、手を結ぶ、ネットワークを形成する、そういう社会学的な共通経験の材料として、酒が大量に造られたのではないかということです。

これ（スライド13）は、池内遺跡の谷の中で大量に材や木製品が出てきたのですが、この中にオレンジ色で塗ってある種子ばかりの馬糞みたいな塊が何個もまとめて検出されたのです。種子ばかりが塊になってゴロンと捨てられている。不思議な塊です。それは種子が塊状に詰まっていて、表面は細かい植物繊維で覆われているのです。これはどういう状況証拠かと言いますと、やや粗めのアンギンを敷いて、そこに細かな植物繊維を敷き詰める、そうして種子の入った液体を入れる、そして漬して絞るのです。最後に絞ってやりますと、馬糞みたいな塊になる。この塊の中を調べてみると、あるいは大半がニワトコの仲間、しかもこれはエゾニワトコだということが分かります。東北北部から北海道、そして現在のサハリン南部にしか分布していない植物ですけれども、これが、とんでもない特異な植物なのです。そして、ヤマグワ、マタタビ、サルナシ、キイチゴ類、ヤマブドウが加わっ

ています（スライド14）。ここにもう1つ、キハダが加わって7種類です。「えっ、あのキハダ。」と思われた方がおられるかもしれません。キハダの果実、キハダの葉っぱは、煮てお粥にしますね。胃腸薬。この果実、食べてごらんになったことがありますか。これが必ず少し入っているのです。これ（スライド15）は、池内遺跡の組成です。種の組成を調べてみると、これはヤマグワが多い部分だと、ヤマブドウがすごく多い塊だと、それから、そうですね、ヤマグワとかヤマブドウが多いのもあります。こういう風に果汁、汁が多いのが時には多い。私が見せるからいけないかもしれませんけど、醸造学をやっている先生達に訊いてみると、必ずおっしゃいます。「酒だ。酒以外ない。」ということになります。ここで示した状況証拠をもって、皆さんも考えていただければいいと思いますけれども、酒以外にないと思います。

そのニワトコの実（スライド16）は、これも探索旅行をいたしまして、先ほど申しましたように、エゾニワトコだということが分かったのです。エゾニワトコは、ニワトコと全然違うのです。このように枝もたわわに実っている真っ赤な実、この辺にニワトコはたくさんあると思いますけれども、実はニワトコは黄実、黄色い実になり、非常に雑駁なのです。変異が雑駁で、生物学的にいうと原種に近いんです。元のオリジナルに近い。それが隨分姿形を変えてしまって、実も大きく、実のつきもいい。さらに真っ赤な実になる、脱粒しない。これはサハリンで確認したものです。こういう立派な性質を持っていて、しかもこれが確認できる場所は、東北北部からサハリンにかけてですが、ほとんど一致して人家の周辺にしかないので。つまり、人っ気のない所にはないです。人っ気が多い所には窒素が多い土壌が形成されている。いろいろな排泄物をまき散らしたりとか、他に動物を飼ったりしていると、窒素が多い土壌が形成されますけれども、そういう土壌を好む植物になっているんです。これは栽培植物じゃないか。つまり縄文人がかつて作り上げた栽培植物の可能性が高いのです。ところが、いつの間にか用がなくなっちゃって、人から見放されちゃった。人から見放されても、人から遠ざかるわけにはいかないので、人家の周辺に、何の利用もされなければ、じっとがんばって生きながらえている、と考えることができます。つまり、植物学者はこの植物を栽培植物だといった人は一人もいません。野生植物だって。ところがそれは、現在栽培されている植物を見て栽培植物だと言っているので、かつて栽培植物となって、進化を遂げた植物が、人間から見放されて、それでも生きていかなければならぬ植物が、たくさんあると私は考えています。縄文人が栽培植物として進化を遂げさせた植物は、もっとゴロゴロと私達の生活の身の回りに、たくさんあるのではないか、そういう風に思います。

そこで、度々実験を繰り返しまして、その工程を復元してみました。こういう風（スライド17）に、このエゾニワトコも栽培し、そして収穫期を迎えて収穫し、こうして乾燥貯蔵をする。そして、池内遺跡から明らかになった状況証拠から、このようにアンギンのようなものに細かな纖維を敷き詰めて、そして絞るというような工程（スライド18）が復元できるわけです。収穫した果実を煮るのです。煮出し紅茶みたいですね。こうしておくと糖分が高くなりますから、グツグツ煮ます。そして、それを放置しておけば発酵が進んで酒ができるという具合です。それをこういう風に絞って捨てたのが、池内遺跡のあの馬糞のような単位ということになるのです。考古学の方々がドングリだとクリだとか、1日どれくらいの単位が必要かという風な計算をよくされるのですが、ナンセンスだとは言いませんが、私は、人間というのはそんな単純なものじゃないと思っています。社会的な共通経験として、みんなで「んなあ、酒でも飲みなきゃやってらんねえぜ。」という感じでお祭りをやっていたのではないかだろうかと。ちょっと破廉恥かもしれません。

さて、縄文社会においての環境との関わりというのは、もっといろいろな側面から語らなければならないことがありますけれども、今日は、特に秋田あるいはこの周辺域で分かってきたことをピックアップしてお話をさせていただきました。こういう風な形で、環境との関わりをもっと考えていかなければいけない。これが今まで考古学の世界では、あまり語られることはありませんでしたが、そうした生々しい生活、どんな風に生活していたのか、どんな風にその日その日を暮らしていたのか、あるいはお祭りはどんなことをやっていたのだろうか、という風なことを、私達はもっと考える必要が

あると思います。遺跡の発掘資料で、いわゆるモノを語ってくれる資料は膨大であると思いますけれども、まだまだ手つかずの資料がどこかに眠っていたり、あるいは埋蔵文化財センターの倉庫にでも、置き去りにされている可能性もあるのではないか、そんな風なことを考えたりもいたします。

さて、最後に、スギのことについて考えておきたいと思います。環境要素として、あるいは生活を取り巻いている生活資源、あるいは心を支えてくれる資源として、この秋田の地域では、スギは不可欠なものではないだろうか、と思います。冒頭でお話いたしましたように、基本的には縄文時代に東北地方はブナ林を主体とした落葉広葉樹林に変化します。しかし、縄文時代の中頃から後期へと、秋田地域を中心として、本当に特異なことですけれども、スギが急速に分布拡大を遂げて、弥生時代、あるいは古墳時代に向けてピークを迎えます。どんな風に拡大していくのであろうか。私が秋田に足を踏み入れたおよそ30年前からずっとその目的で、各地を訪れてまいりましたけれども、いまだにはっきりいたしません。しかし今、ようやく高精度な年代測定という技術が発展してきていますから、これを使って移動経路とか、どのようなルートを通って拡大していくのだろうか、ということが、いよいよ解明できるようになってきました。実は昨年ぐらいから密かに歩き回っているのですけれども、ここ数年かけて決定的な結論を出したいと思っております。しかし、現段階でもすいぶん新しいことが分かってまいりましたので、そのいくつかを見ていただきたいと思います。

がんせつをだれ これは鳥海山麓の岩屑雪崩という噴火現象の1つですけれども、それによって飲み込まれたスギ林があるというので調査を始めました。地元の方々はよくご存じですね。この大木1本が、1千円と1千5百万円で売買されているのです。ものすごい大きなお金ですよね。こういうふうに輪切り状態にしてテーブルにしたりとか、置物にしたりとか、いろいろな細工物にしたりしているのです。ある事件があって以来、つまり人身事件があって以来、あまりこれを掘り起こすという人はいなくなつたと訊いていますけれども、実は私、先だって鳥海山麓をずっと車で走っておりまして、いろいろなところにスギがゴロゴロとあるのです。埋没林という地下に埋もれている森林として存在しているのです。必ずしも岩屑雪崩ではなくて、もっと古い時代のものもありそうです。あの岩屑雪崩は年輪年代という方法で、年代が確定されたようですけれども、もっと古いスギ林が鳥海山麓にあるということが分かってまいりました。これ（スライド19）はにかほ市の仁賀保勤労青年ホーム展示室に展示している岩屑雪崩に飲み込まれた木の輪切りの標本です。これはご覧になった方がおられるかと思います。これは年代が確定されているみたいです。ところが、今お話ししたように、山麓を走り回っていますと、田んぼの圃場整備だとで、地下からこんなものが邪魔者として上がってくるんです。（スライド20）これは非常に大きな立ち株です。どこか置物に置いたら非常にいいかなと。あまり保存処理もしくなく、ちょっと磨けばでてかに光ってきます。いわゆる神代杉ですね。あまりお勧めはしませんけれど、一般にちょっと加工すれば20万円や30万円くらいにはなるんじゃないかなと思ったりしますが。これは地場産業になるかもしれないなと。あまりけしかけてもいけませんが、ぜひご覧になってください。こういうのが田んぼの地下にいっぱい埋もれているのです。今まで言われてきたように、岩屑雪崩に飲み込まれただけではなくて、もともと鳥海山麓に立派なスギ林があって、それが埋没しているように思うのです。今はまだ、はっきりしたことは言えませんが、このスギ林がものすごく古くなりそうだ、3千～4千年前くらいまで遡っていきそうだ、それが私が30年前に秋田のスギの歴史を解明するために取り組んだ1つの結果、結論だったわけです。これは花粉分析という方法で、その盛衰を調べてみる。そうしますとちょうどこのあたり（スライド21）から、これは本荘平野、それから女潟というのは、県博、今の県立博物館のある所です。それからこれは能代、みんな同じようにこの点々の柄で示してあるのは、どれもスギです。あるところから突然出始めますね。大体3千年前ですね。3千年前から増え始めているのかな、と当時はそういう見通しをもっていたのです。ところが、最近です。これは未公表ですけれども、男鹿半島へ行ったのです。こんなところには検討する材料はないだろうなと思い、寒風山に上がったら、寒風山から見えた裾野にものすごく好適な資料が得られそうな平野が目に飛び込んできました。行ってみると確かにあったのです。

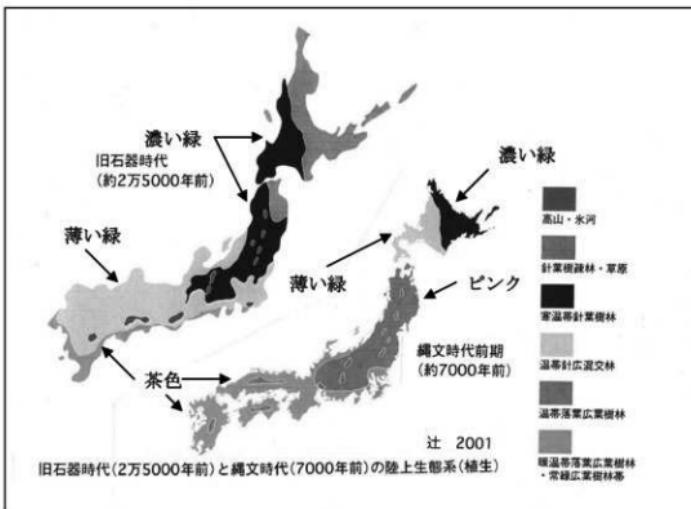
ここでの花粉分析の結果を見ますと、これまでの様子とは少し違っていて、年代測定結果の値がたくさんあって、これが4千年くらいになってしまうのです。スギは男鹿半島にずっと生き残っていたのかなあ、というふうなことを最近は考え始めました。鳥海山だとか男鹿半島の寒風山麓だとか、ああいうところにずっと生き延びていたのかなあ、という風に考えているのです。かつてある生態学者が「秋田のスギは若狭の方からトコトコトコトコ、気候の多雪化、寒冷化に伴って北上してきたものだ」というふうにおっしゃったんです。そういう大論文を国際的な雑誌に書かれていました。ところが、その中継地である新潟だとではほとんど確認できないのです。だとするとその説は全く駄目だということになります。では、どう考えたらいいのだと思いつかれていたところ、鳥海山麓や男鹿に古くからスギがあるようだということが分かってきて、「ああ、やっぱり秋田のスギはもともと秋田にあったのだ。」なんていう、そういう結論になってしまったかもしれません。

さて、現在のスギ林というのは、秋田のスギもそうですが、ほとんどすべてが植林ですよね。天然のスギというのは本来どこで生活をし、どこを通って分布を拡大していったのだろうか。これを考える重要な資料となるのがこれです。先ほどもいいましたけれども、若狭から来たのだろうという考えの根拠になっているのは、実は若狭の方には、縄文時代からのスギが地下に埋もれているのがたくさん見つかっていて、これ（スライド22）は水田の地下に眠っていた神代杉の立ち株です。全部そうです。トランクで2千台分くらいあります。ほとんどが焼却されるのでもったいない、1本20万円から30万円くらいで売れるのにと思ったものです。ところが、そう考えるのは浅はかでした。調べてみると地元の人はちゃんとテーブルなんかにして、ひとつ50万くらい稼いでいたんです。本当にそれを知った時には悔しい思いをしました。これは10年くらい前の状態でけれども、全部燃やされました。それこそ私は本当にもったいないと思いましたね。これを切って細工物にしたら、いくらでも使えるのに、ちょっとお守りなんかにすれば、お守り1枚千円で売れるのですよ。

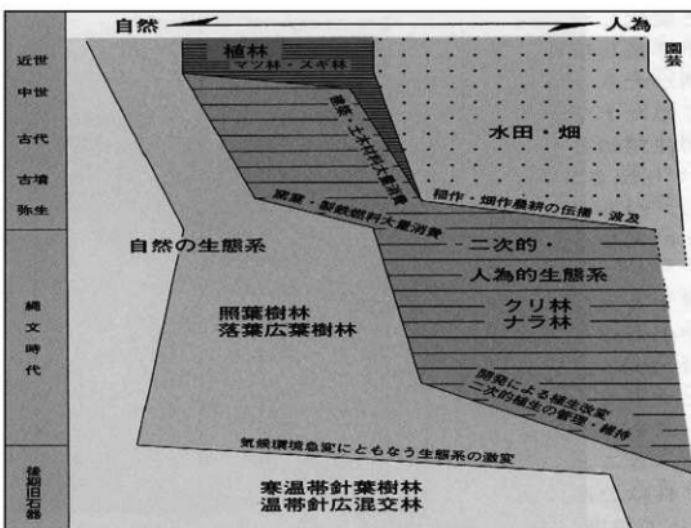
ところで、このようなスギがどこに埋もれていたのかといいますと、平野の水田の下です。つまりスギの本来の好適地はどこかというと、泥炭地です。水はけの悪い、ジメジメした泥炭地。ここが一番スギにとって住みやすい所だったのです。あるいは河川敷、河川を通ってその両脇なんかにスギは生活している。そういう所が好適地となっているのです。だから、山の斜面とかに無造作に、無造作ではないでしようけれども、植林されていますけれども、あれはスギにとって大迷惑で、おそらくスギはノイローゼになっているのだと思います。つまり、植えられたくない所にせっせと植えられるものだから、だから花粉を大量に生産して放出しているのだと思います。つまり人間に対して反発をしているのだと私は思います。本来の生息地をちゃんと知り得た上で、スギが本当に望むところに植えてあげなければいけないのではないかと思うのです。そういう意味で秋田県だけではなくて、かつては岩手県の方にも、岩手県は降水量が少ないから、ものすごく不適な所ですよね。アカマツは植わっていてもいいけど、スギはとても不適な所なのに、屋敷林とかで強引に植えてしまった。もうスギは悲鳴をあげているのに違いない。電車で行ってみると、盛岡で別れて秋田新幹線と東北新幹線でその先に展開てくる屋敷林のスギは全然元気が違うんです。秋田へ来るとものすごくいいですね。岩手を見ていると、ものすごくかわいそうなくらい細々としてみそばらしい。もう歴然としています。ということで、本来は、こういう状態（スライド23）で存在していた。これは、島根県の三瓶山の麓ですが、火山活動で埋もれてしまったスギの埋没林で、当時の巨大なスギ林が谷の中に埋もれていたのです。川筋を伝わって分布拡大しつつあったスギ林です。最近地下から出てきて、これを復元して、地下ミュージアム、地底ミュージアムができます。埋没林ミュージアム、これ直径1.5m位の大木なのです。これは高さ10m。これが地下に埋もれていたのですが、これを埋もれていた状態でみんなに見てもらおうと、地底ミュージアムを作ったのです。おそらく、秋田の平野部あるいは雄物川や米代川流域では、こういう立派で大きい、鬱蒼としたスギ天然林があったのではないだろうかと思うのです。

ところが、古代になりまして、スギは有用な資源として活用されていきました。古代、ここは払田柵だとか秋田城だとかという古代城柵が各地に作られます。その役所の建設や城柵の建設にあたって

も、ものすごい大きな天然性のスギを伐採して、資源として大量に消費されていきました。実は弥生以前で、こここのスギにおそらく手が出なかったはずです。それは伐採具を見ても分かりますけれども、当時の伐採具は石の斧でした。石の斧で針葉樹を伐採しようと思っても、石の斧が折れるだけです。本当にスギだとかヒノキだとかモミを伐採するってことは大変なことなのです。だから、燃やしながら削りとるとかしない限り、なかなか資源としては利用できないのです。ですから、縄文時代に針葉樹が周辺にいくらあっても、これを積極的に資源として利用するってことをしていないのです。ところが、古代になると大量に利用している。それは弥生時代以降、特に古墳時代の5世紀以降に鉄刃のついた加工工具、鉄斧だとかいろいろな加工工具が普及していくことになります。あるいは奈良の都、平城京の建設だとかに、大量の針葉樹材が利用されるようになる。秋田も当然のことながら、古代律令国家の形成の影響を受けて、そうした針葉樹材を木工文化の体系の中に、あるいは核にしてしまうというくらいになって、日本の木工文化は針葉樹へ一気に傾倒していきます。そういう意味で、秋田の歴史を考えるときに、こうした縄文時代の後半期、中期終わりから後晩期にかけて、これは気候の寒冷化と多雪化が原因していると思いますけれども、秋田天然性スギ林がほぼ秋田県全城にわたって拡大したことは重要です。それが基盤になって、古代にはこれを資源として林産業が盛んになる。おそらくそこで形成された林産業というのが、どんどんスギの天然性資源を枯渇状態に陥れたとしても、さらに植林をするなりして、中世、近世へと持ちこたえていったのではないかと、そんな風に考えたりいたします。そういう資料をここ2、3年の間の森吉山ダム関連遺跡群で、先ほどもお話しました地蔵岱遺跡だとか、あるいはその周辺の遺跡から、それを物語ってくれる資料がたくさんもたらされています。ここ2、3年がんばっていけば、そうした歴史をひもとけることも夢ではなく、また皆さんにあらためて、この古代、中世、近世という、歴史時代の人と環境とのかかわりを教えていただいて、そこでの私達と、秋田に住んでいる人達と、森林との関わり、あるいは森林だけではなくて、こういう環境との関わりを語ることができるようになるのではないか、というふうに期待をして、私の話を終わらせていただきたいと思います。どうも長い時間にわたって、ありがとうございました。



1 後期旧石器時代（2万5千年前）と縄文時代（7千年前）の陸上生態系
(辻 2001、NHKスペシャル日本人はるかな旅3、NHK出版)



2 後期旧石器時代以降の植生と人間活動のかかわり
(辻 2002、日本の時代史 1、吉川弘文館)



3

大館市池内遺跡における八戸火碎流と埋没林
(中央の黒色部)



4

新郷村手倉橋における八戸火碎流と炭化丸太材



5

男鹿半島箱井の後期旧石器時代泥炭層と始良
Tnテフラ

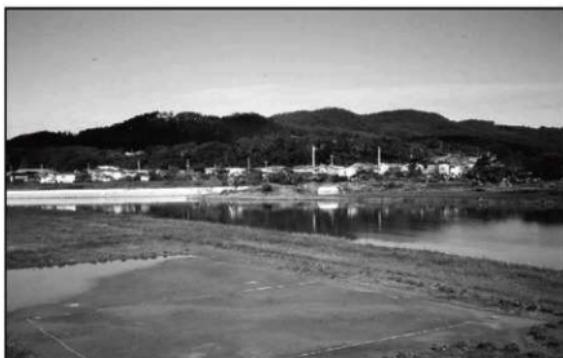


6

青森市大矢沢野田遺跡
における「縄文の谷」



7 上空から見た本荘平野、中央に子吉川



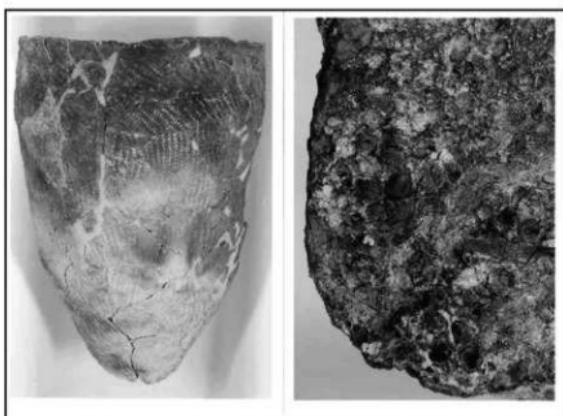
8

由利本荘市菖蒲崎
貝塚の子吉川対岸
からの遠景



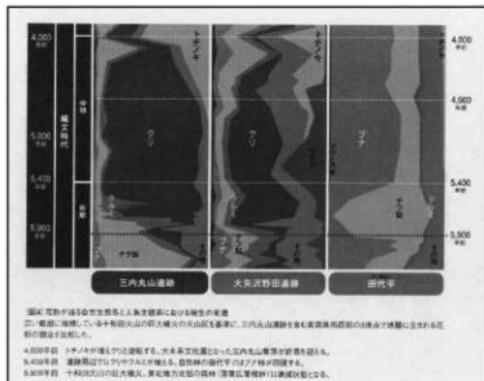
9

由利本荘市菖蒲崎
貝塚調査風景 (1984
年)



10

由利本荘市菖蒲崎
貝塚出土の縄文早期
土器と付着炭化
アサ果実



11

三内丸山遺跡、大矢津野田遺跡、八甲田山田代湿原の植生変遷の比較（辻 2006、季刊生命誌 2006 冬号、J T 生命誌研究館）



12

東北北部の縄文前期・中期
の土器変遷と三内丸山遺跡
の植生変遷（辻 2006、季刊
生命誌 2006 冬号、J T 生命
誌研究館）



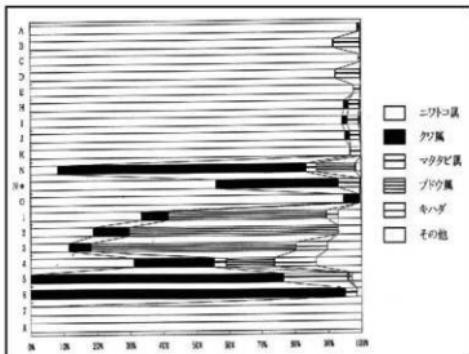
13

大館市池内遺跡のニワトコ
主体種実群塊の分布（秋田
県文化財調査報告書第282
集、池内遺跡、1999年）



14

大館市池内遺跡のニワトコ
主体種実群の種子・果実 (秋
田県文化財調査報告書第
282集、池内遺跡、1999年)



15

大館市池内遺跡のニワトコ
主体種実群の組成 (秋田県
文化財調査報告書第282集、
池内遺跡、1999年)



16

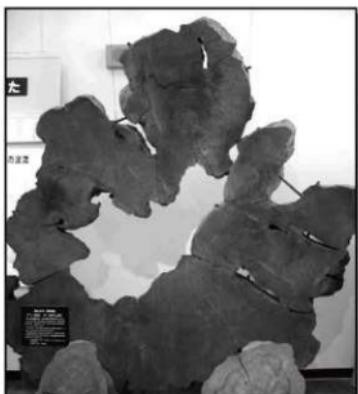
サハリン南部に生育するエ
ゾニワトコの果実



17 エゾニワトコ果実の収穫と乾燥作業の復元図（さかいひろこ原図）



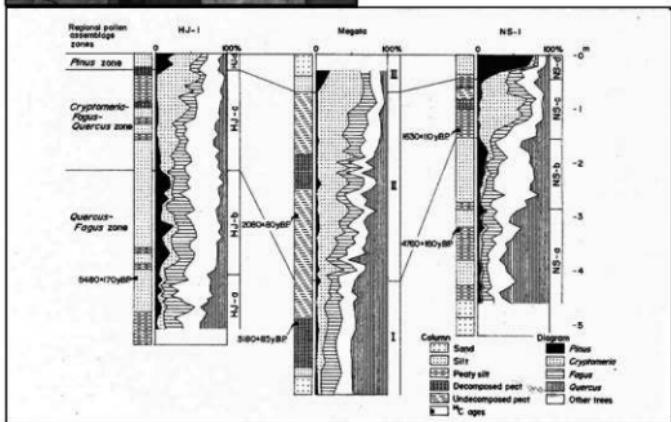
18 エゾニワトコ果実主体の縄文の酒の造り方
(国立歴史民俗博物館 2001年企画展示パネル、さかいひろこ作図)



19 鳥海山麓の紀元前 466 年に埋没したスギ巨木（仁賀保勤労青少年ホーム展示室）



20 鳥海山麓の水田から掘り出されたスギ埋没林



21 本荘・秋田・能代平野の花粉分析図（辻 1981、東北地理 33巻）



22 福井県三方町黒田の水田下から掘り上げられた縄文時代のスギ埋没林



23 島根県三瓶山麓の縄文時代のスギ埋没林（島根県景観自然課 2003、三瓶埋没林調査報告書Ⅲ）

武藤鉄城『石器打法研究』をめぐって

小林 克*

1 はじめに

平成 20 年度、秋田県埋蔵文化財センターでは「秋田の狩猟文化」と題した企画展を開催した。埋蔵文化財センターがその設立来、蓄積してきた考古資料、なかでも、旧石器時代、縄文時代の資料から、現代マタギにつながる狩猟伝統を考える試みであった。展示には考古資料に加え民俗資料も集められた。そして、大正末から戦後まもなくまで、秋田の考古学、民俗学、郷土史の世界、さらにはスポーツ振興等で活躍した武藤鉄城（1896～1956）の業績も、その考古学関係の著作を集め展示した。

武藤鉄城の考古学的業績はまとまった形で公表されたものがない。出版された著作集は民俗学ないし郷土史に関するものであり、とりわけ民俗学関係の著作は優れた業績として高い評価を受けている（武藤 1935・1940 など）。対して、考古学の業績は一部に雑誌掲載論文等があるが、特に初期の仕事の大半が新聞連載の記事であり、そのため研究全体を知るのが難しい。考古学的な著述については、その発表スタイルから考えると、武藤自身がさほど学術的な重きを置いていなかったように見えなくもない。しかし、それら新聞連載も、実は武藤家に保管されていた 40 点を超える自筆原稿を元に活字化された記事であった。その原稿からは、広い知識に裏打ちされた学術的に高い内容を読み取ることができる。そして、なおかつ、氏の名を高くしている民俗学の業績との関わりで考えると、二つの領域の垣根を軽々と越え得た氏の視点の高さ、視野の広さを読み取ることができる。

本稿では、埋もれた考古学的業績の中から、生涯を通してのテーマとなる石器研究のうちの一編「石器打法研究」を取りあげ、研究史上の意義を検証する。

2 武藤鉄城の生涯と考古学研究

武藤鉄城については直接にその人となりを知る手で、いくつかの評伝が書かれている（渡辺 1971、富木 1973）。また、民俗学の立場からの業績研究（稻 1993）や著作目録（武藤ほか 1980）もある。それらも参考に、「石器打法研究」執筆の頃、その考古学研究開始の頃の背景を簡単に見ておく。

鉄城は秋田市豊岩の素封家の四男として明治 29 年に生まれている。長兄は初代、秋田県文化財専門員を務め、後に豊岩村長ともなった一郎であり、考古学上のてびきはこの一郎の果たした役割が大きいとされる。大正 3 年には秋田中学を卒業、慶應大学理財科に進学したが、大正 7 年には理財科本科 2 年で退学。その後大正 9 年 2 月に帰郷している。帰郷後はすぐに職に就くことはなく、兄一郎とともに県内遺跡の調査を行い、最初の未刊の著作『原始人の宗教と芸術』（1921：大正 10 年）にも収められることになる、大仙市強首玄蕃台遺跡（石棒塚）を発掘している。大正 11 年には堀井ヒデと結婚^(註1)、そして、その年に新設された羽後銀行秋田支店に職を得る。しかし、半年ほどで退職し秋田市大町に「鉄城運動具店」を開店するも、倒産・閉店。大正 15 年には角館に転居し、それ以後、本格的なフィールド・ワークを開始し、そして、それら調査を元にしての研究活動へと入ってゆく。

著作目録を見ると秋田に帰郷した後、兄一郎と共同で遺跡調査を行いながら、既に考古学に関する

*秋田県埋蔵文化財センター主任専門員

活発な著述が始まっている。大正 12 年に新聞に連載された「動物と日本人」(『中外商業』)「腕貸伝説」「石棒の磨砥痕及び凹部と割礼の儀式」(『秋田新聞』)「勾玉胎兒説」「狩獵民族滅亡の由來」「石器名称三通の形式」「石冠と丸石の考察」「宗教的情緒の特殊刺激」「石器と異変」「子供と宗教心」「宗教発生に関する物件」(『新秋田新聞』)は、最初の原稿『原始人の宗教と芸術』に盛り込まれた考古学的な興味関心事を項目に切り分け、公表した記事である。これらを読むと、兄一郎と行った玄蕃台遺跡が唯一の発掘調査で、それ以外は学生時代以来抱いてきた人間社会の根幹に関わる問題を原始古代社会の探究に求める観念的な内容になっている。しかし、同時に相当の読書量があったこともうかがわれ、記事にはそうした書物から得た知識がふんだんに盛り込まれている。

その後、河辺郡や南秋田郡の二、三の遺跡調査を行うが、本格的な発掘調査は大正 15 年に角館に転居して後に開始されている。「神代村鎌川字本田石器時代遺跡」「中川村館腰城の石器時代遺跡」「神代村小松中村谷地遺跡について」「若神子館腰城遺跡三回目踏査」(1927) など、翌昭和 2 年に『角館時報』紙に立て続けに発表された遺跡調査の報告は、いずれも角館周辺の仙北郡内の石器時代遺跡についての報告である。『石器打法研究』もまた、これら遺跡から出土した石器が材料となって書かれた研究論文である。その意味で最初の論、『原始人の宗教と芸術』が観念的な著述であったのに対し、この時期の研究、とりわけ石器研究は、文献から得た該博な知識に加え実際の調査資料をもとにしたより具体的な研究であった。そして、なかでも『石器打法研究』は実験考古学とも結んだきわめてラディカルな研究であった。

3 「石器打法研究」について

『石器打法研究』は鉄城の考古学的業績のなかでは初期の仕事である。昭和 2 年 10 月と記された自筆原稿は A4 版ほどの大きさの和紙 24 枚に毛筆で書かれ、和綴じされている。24 枚の原稿のうち 13 枚に石器の図や、後述する洋書から引用したイラストが描かれている。鉄城の初期の著作は毛筆あるいはペン書きの原稿を一部作成しそれをもとに新聞記事として活字化するか、あるいは臘写版刷りで配布するかたちで発表されていた。『石器打法研究』は後者のスタイルで発表された著作であり、昭和 3 年 8 月に臘写版刷りで綴じた冊子を鉄城自らが県立図書館に寄贈している。ちなみに『石器打法研究』と同じ頃に臘写版刷りにされ図書館に寄贈された著作には、「石小刀の研究」(1927: 昭和 2 年)、「丸石乃考察」(1928: 昭和 3 年)がある。『石器打法研究』の自筆原稿と臘写版刷り原稿では字句に若干の違いがあるものの、論旨自体に大きな変更はない。本稿末尾の資料 1 ~ 7 は武藤家に残されていた自筆原稿の内容を、ご遺族である武藤輝亮氏の了解を得て書き写したものである。なお、自筆毛筆原稿、臘写版刷り原稿とともに "Fig" と番号を



第 1 図 中村徳松製作と思われる石器

振った図のほかに、文章中に絵文字のような小さなイラストが挿入されている。書き写した中の※印した箇所に挿入されるべきイラストであり、資料1～7ではそれらを中央にまとめて配置した。

書き出しへは中村徳松という石器作り名人との出会いのエピソードが簡単に述べられている。この中村なる人物は南秋田郡五城目町に実在した人物である。秋田考古学の黎明期にその牽引役を果たした真崎勇助の考古日誌、「雲根録」には明治35年4月8日の条に「南秋田郡五城目町中村徳松ト云モノ來訪石器三ヶ恵ム処ニシテ馬川村高崎字中山ヨリ出テカリト云」(傍点筆者)との記述が、磨製石斧および打製の石槍風の図とともにある。ここに登場する「中山」とは縄紋時代晩期の漆漉布等を出土したことで著名な中山遺跡のことと、五城目郷土史あるいは町史によれば明治34年ないし明治40年に行われた発掘の際、この中村徳松も関わっていたらしい。

ところが、鉄城はこの中村との出会いを「石器打法研究」執筆以前の大正14年に、『日刊新秋田』紙で「五城目の今様原人を訪ぶの記」と題して5回連載している。それには、明治30年頃に秋田市で土器・石器を売り歩いていた偽物作りの話を聞いた鉄城が、イギリスの地質学者であり人類学者でもあったWilliam Johnson Sollas(1849-1936)の“*Ancient Hunters*”(1911)を読んだことをきっかけに、中村に実際に会いその製作法を聞いたことが、克明に記されている。そのなかには中村が製作し帝室博物館に献上した偽物に対し、帝室博物館長三宅米吉の署名捺印のある感謝状が贈られた話だとか、「石器打法研究」に登場する坪井(正五郎)博士が真崎勇助宅で中村と会い、偽の土偶で騙された話だとかが語られている^(注2)。

それらの話がどこまでが実真なのかはわからない。しかし、「石器の打法を知り得たら御前を博士にしてやる」とまで坪井に言われた中村が「石器の打法だけはわからなかった」と述べたという逸話は注目される。県内にはいくつか中村が製作したと思われる資料が現存する(第1図)。それらには勾玉や、人形、四足動物形に作った異形石器らしい打製石器、そして土偶などがある。なかには新聞記事に鉄城が書き書きしたとおり、古色の雰囲気を出すため磨製石斧を臼の中で搗き(“中村ウス”という綽名はそれに由来とされる)、再加工して作った勾玉がある。出土品では決してみることのできない斑晶ある石材で、一目してその異様さに気付く。そしてこれと同様、精巧に作られた頁岩製の人形、四足動物形の異形石器も、そのほとんどが器体中央に残る素材剥片の背面ないし腹面と押圧剥離された縁辺との風化度に著しい差、いわゆる二重バティナがあることに気付かされる。これは、勾玉と同じく、これら石器製作にあっても、実際に遺跡から出土した剥片が材料として使われたためである。中村は遺跡から出土した頁岩剥片を加工しこれら異形石器を作成したのである、「石器の打法だけはわからなかった」とは、異形石器を作るにふさわしい薄い剥片を、連続して剥ぎ取る技術は持ち得なかったと告白した言葉である。

鉄城はこの逸話を枕において自らの石器製作実験を締め論を展開してゆくが、中村と会うきっかけともなり、本文中にも登場するソラス(Sollas)の“*Ancient Hunters*”(以下、“A_H”と略)はかなり読み込んでいたらしい。ちなみに正式書名は“Ancient Hunters and their Modern Representatives”であり、邦訳すれば「太古の狩人と現代の原始人」となる。鉄城が中村をして「今様原人」と呼んだもの同書のタイトルのもじりであろう。内容には当時発見され、後に偽の人骨とわかるイギリスのビルトダウン人についての記述、現代の石器使用民であるオーストラリア原住民や極北民についての記述“THE AUSTRALIAN ABORIGINES”“THE ESKIMO”と題した章もある。

William Johnson Sollas "Ancient Hunters" に解説された、「割れ円錐」の図解

- 1 割れ円錐 (cone)
- 2 刃片の打面を示した図
- 3 加撃による円錐：その側面観、波を打つて進む割れ目
- 4 波紋に開まれた加撃による打痕、波紋は放射状のスジと交差する

"When a flat is struck by the corner of a hammer a conical fracture or a system of such fractures surrounds the point of impact. This is the cone of percussion. When the blow is sufficiently hard, one of the conical fractures develops into an undulating surface, which would be a wave and a fake spring off carrying with it more or less of the cone of percussion. If the fake takes with it the greater part of the cone, its surface next to the cone rises into a gently swelling prominence [Fig. 48(3)]."

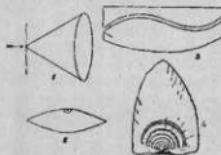


Fig. 48.—Modi de fractura de flint. (1) Cone of percussion; (2) cone of percussion, lateral view at the base for flakes; (3) cone of percussion, undulating surface of fracture proceeding from it; (4) half of percussion surrounded by concentric ripples, which are crossed by radiate striae.



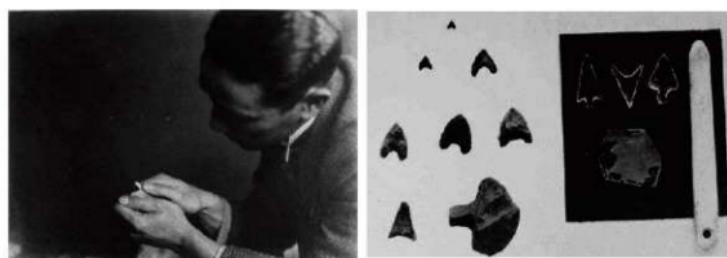
Ludwig Pfeiffer
"Die STEINZEITLICHE TECHNIK"
に描かれた刃片剥離の図解（上）と
「石小刀の研究」の模写（下）

Ludwig Pfeiffer
"Die STEINZEITLICHE TECHNIK"
に示された異なる刃の火打ち石製
ナイフによる、斜めおよび垂直に表
れる傷の断面模式図（左）と、「右小
刀の刃（就いて）」に描かれた石器の
刃による各種の傷の断面模式図（右）

第2図 W.J.Sollas著"ANCIENT HUNTERS" 及び
Ludwig Pfeiffer著"Die STEINZEITLICHE TECHNIK"との関連

同書のFig48には第2図上段に引用するように石器の割れる原理が図解されている。“Cone of percussion”即ち「割れ円錐」理論の図解であり、円錐模式図、石器打面から見た図、波状に割れる側面観、そして剥片腹面の打点中心にできる打瘤を表した図が描かれている。特に波状に割れる側面観は「石器打法研究」にFig 1として小さく描かれた図（資料2下から3つめの図）として引用されている。また、「石器打法研究」にはFigとして番号のないイラストが、英文とともに載せられている（資料5上中段左）。これも“A_H”からであるが、上段は「石器打法研究」で鉄城がバルブと呼んでいる石器残核（アシューレアンの剥片を剥ぎ取ったフリント・コア）、また、中段の下図は自然に割れた磨石器様破片の出土状況図であり、“A_H”Fig71、およびFig31の引用である。「石器打法研究」において石器製作の二段階、“撃碎法”と“削剥法”的うち、第一段階にあたる撃碎法の説明は“A_H”に記述された石器の割れる理論や具体例から、鉄城が独自に理解した内容で記述されている。

石器作り名人中村徳松も理解していなかった、石器剥片を母材から薄く剥ぎ取る理論を“A_H”から学び、それを実験的に試して“撃碎法”を記述した鉄城ではあったが、“撃碎法”的冒頭には“A_H”には記述のない“ハンマーストーン”と“ストライキングプラットフォーム”的なす角度、「七十度」が明記されている。これについてはドイツ、イエナ大学の医学者であり人類学者であったLudwig Pfeiffer(1842-1921)の著作、“DIE STEINZEITLICHE TECHNIK”(1912：以下“D_S_T”と略)に収められた、剥片剥ぎ取りに関する図解が参考になったようである。第2図中段に引用した“Abb.9”(Abb.は挿図の意)には剥片の腹面の図が、“Abb.10”にはそれに対応した剥ぎ取りの際の断面図が描かれているが、その断面図には打面(Schlagfläche)に対して加えられる力の方向角(Treffpunkt Schlagrichtung)が、75度と書き込まれている。鉄城はこの図を石器研究のもう一つの自筆原稿「石小刀の研究」にそのまま書き写している（第2図中段右）^(注3)。このPfeifferの“D_S_T”は、その後の日本の石器研究にもそれなりの影響を与えたようで、例えば芹沢長介氏の『石器時代の日本』（芹沢 1960）には、同書にあるガンフリント（火打ち石）を剥ぎ取る工人の姿が第6図に引用されている。鉄城自身の石器研究では「石器打法研究」より少し遅れて発表される、「石小刀の刃に就いて」(1933:昭和8年)という研究でも同書がヒントになっている。この研究もまた、各種形状の刃の石小刀（鉄城は剥片、retouched_flake、あるいは石匙を総称してそう呼んでいる）の切削効果について、杉柾板の切断に要する時間を比較した実験考古学的研究である。これに描かれた各種断面の石器の刃と対



第3図 石器製作中の鉄城と硝子製石鎚および歯磨ブラシのフレーカー

象物に刻まれる溝の断面との模式図は、“D_S_T”の“Abb.98”に描かれた石器の刃断面と傷の方向を示す対象物断面の模式図にきわめて近い（第2図下段）。鉄城が自身の石器に関する実験考古学を同書からの知識で補強していたことの好例である。

さて、「石器打法研究」に盛られた石器製作二段階のもう一段階、「削剥法」については、製作中の鉄城自身と、使用的道具および製作された硝子製を含む石器写真を、「武藤鉄城アルバム」^(注4)から引用し第3図に示した。「石器打法研究」に骨質磨擦器（ブラシ）を加工した道具で、「びちびち」と小気味良く押圧剥離（コムプレッション）を加えるようが述べられているが、まさにその工程に用いた歯磨楊子の柄と、作られた硝子板の石鎌が黒い紙を下敷きに撮影されている。また、その隣には頁岩の小形の石鎌と石匙の写真があるが、最上段の石鎌はどれほど小形の石鎌が作れるかを実験製作した例で、大正15年には「最小石器に就いて」（1926）という記事を「秋田魅新報」に掲載している。

この第二段階の“削剥法”には“撃碎法”的直接打撃では使われない、対象とハンマーとの間の“ベンチ”—現在ではパンチというものが一般的であるが鉄城はこう呼んだ—をあてがう間接打撃がイラスト入りで描かれている（資料6下段イラスト）。この石器製作を行う原人の姿は、本文に“ヘンリー・カタリナ・ドップ”として引用されるアメリカ、イリノイ大学の女性文化人類学者の原始小説からの引用である。残念ながら、人名の引用は誤っており、本名は Katharine Elizabeth Dopp(1863-1944) である。小学生向けのいくつかの原始小説、“THE TREE DWELLERS”（1904）、“THE EARLY CAVE-MEN”（1907）、“THE LATER CAVE-MEN”（1907）、“THE EARLY HERDSMEN”（1912）を著したことで知られ、それらの著作には原始人の生活を想像した多くのイラストが遺跡からの実際の



第4図 Katharine・E・Dopp著 “The Later Cave Man” との関連

How the Cave-men made Delicate Spear Points 37

liked to watch Straightshaft strike off flakes with a hammer-stone and punch. He liked to listen to the song that Scarface and Straightshaft sang.

Scarface and Straightshaft always sang when they worked with the hammer-stone and punch. While Scarface placed the punch he sang in low tones. And when he was ready for Straightshaft to strike, he sang so as to let him know. Then Straightshaft took up the song and marked the time for each blow.

The men always sang when they worked together. If one man stopped when it was his turn to sing, the other did not know what to do. Besides marking the time, the song helped the men to measure the force of each blow. It helped them to strike off tiny flakes so as not to break the point. So, at length, the Cave-men began to think that the song they sang was a charm.



"When the Cave-men held the spear shaft in their hands, Scarface placed the punch."

"While Scarface placed the punch he sang in low tones."

出土品とともに描かれている。鉄城が引用した立ち姿で石器製作をする人物のイラストは、“THE LATER CAVE-MEN”に載せられた「洞窟人はどのように精巧な槍先を作ったか？」と題した項目に描かれた絵である。「二人の鼻唄の調子のよく合うことは美的の石器を得る要素」と本文に述べられるように、“Scarface”という名の物語の登場人物と“Straightshaft”という名の人物が、歌を歌いながらハンマーストーンとパンチを使う場面の描写が記述されている（第4図右）。

ところで、先の鯨骨の歯磨楊子の柄を加工した道具は、「フレエーカー」という現在では使うことのない用語で表現されているが、この用語もまた、“THE LATER CAVE-MEN”に登場する。骨のハンドルの付いたプリント製狩猟用ナイフを作るのに押し当てて加工する道具として、木では柔らか過ぎ、牙では硬過ぎてうまくゆかず、結局は鹿角と骨とで作った道具でもって最良の結果が得られたことが物語に登場する（第4図左）。それが“flaker”であり、鉄城はそのイラストも書き写している（資料6上段中央）。

4 その後の石器研究と小説に描かれた「石器打法研究」

昭和初めに精力的な石器研究を開始した鉄城は、その後も「石小刀研究の面白味」（1930：昭和5年10回連載『河北新報』）、「石小刀の刃に就いて」（前出）、「石小刀着柄異例」（1935：昭和10年『史前学雑誌』）、「石小刀はいかにして使用されたか」（1935：昭和10年『灰』）、「有刃石器の自然面」（1939：昭和14年『茶わん』）、「疑問の貝製小刀」（1940：昭和15年：『瑞木』）など、石器およびその関連の研究を進めてゆく。それは主に石器の使用法に関する研究であり、その成果は「有刃石器の刃の構造と機能」（1950：昭和25年『第5回日本人類学会連合大会講演』）として結実する。また、その石器使用法研究を進める過程で、秋田県内に残るいわゆる「サケ石」を石器によって刻んだ石器時代の遺物であるという説を唱える（武藤 1939、小林 2009）。「石器打法研究」以来、優れた実験考古学を旨として研究を進めた鉄城が、時代が不明とされた遺物についてもその使用実験で培った観察眼を応用了した成果であった。

鉄城がその考古学研究において石器研究を中心をおいていたことは、彼を主人公“江家琢馬”として登場させた作家高井有一氏の小説、『雪の涯の風葬』（高井 1970）にも描かれている。

「石小刀は、彼の家の下男が下駄の鼻緒を立て、その端を切るのにたまたま用いてみて、切れ味のよさに驚いて以来、何かと役に立っているそうであった」（『雪の涯の風葬』85頁）

この下りは「石小刀の刃に就いて」（前出）に次のように述べた部分の引用である。

「発掘した該石器を附近の農家の縁に置いて休んでいたら傍らで下駄鼻緒を結んでいた若者が、私の知らぬ間にそれを取って麻緒を一挽きで切り、その切れ味に驚きの叫びを挙げたのであった」

また、

「石の平面に約七十度の角度で槌石を撃ちつけると、亀裂がたやすく入るのが判って来た。彼は、鉈で薪を割る時に似た感じで裂ける石の軟らかな従順さに愕いた。

こうして粗く削ぎ取った石片を、石器として完成するまでには、棒石、あるいは骨棒で周囲を欠き、形を整える工程がある。これは本から得た知識であったが、琢馬は、骨棒というところに暗示を得て、鯨の骨で作った歯刷子の柄で代用してみた。思い附きは的を射たようであった。刷子の柄を石片に当

てがって力を蓄めると、薄い破片が、炭火の撥ねるような音を立てて飛び散った』（『雪の涯の風葬』109頁）は、まさに「石器打法研究」からの引用である。

作家も認めた優れた研究であったが、それに対する反応はむしろ冷ややかに描かれている。

「原人は如何にして石器を作りしか」と題した報告の末尾に、琢馬は一章を設けてこの事実に触れた。…………同好の人たちに挑む気で書き、また小冊子に作って一部を雑誌に送ったが、今度も原稿は掲載されず、各地の消息を伝える欄に揶揄を寄せた記事が出た。

「奥羽は高樟の人、江家琢馬氏、自ら繩文期原人になりしほりにして、石器を試作す。その体験を結論づけて曰く、原人には左利き多しと。太古の世界は未知の事象多ければ、或いは然らん。まことに珍奇なる研究にして、話の種に恰好のものなり。かくの如きをものし得るも、地方にいて閑暇に恵まれし人の一得と言ふべきか」……』（『雪の涯の風葬』112頁）

考古学に連れて昭和5年頃から始められた鉄城の民俗調査は、解釈をまじえない徹底した資料収集と記録を貫いたことできわめて高く評価されている。しかし、それはインフォーマントとして的地方郷土史家の禁欲性、それへの評価という皮肉な一面を含んでいたのではないだろうか？アチック・ミュージアムの同人、高橋文太郎に同行し阿仁や上檜木内のマタギ習俗を調査した記録、「秋田マタギ聞書」（武藤 1969）は優れた民俗誌だったにもかかわらず、鉄城自身が高橋の記録が刊行されるまで活字化しないことを守り抜いた。刊行されたのは鉄城没後13年を経た後である。

しかし、こうした民俗調査に引き比べ、きわめて早く『原始人の宗教と芸術』が示すような観念的な関心から出発した考古学は、飽くなき欲求によって蓄積された該博な知識、それに実験的方法が加わってきわめて斬新に展開した。そして、それが「石器打法研究」のような具体となって現れた時、学界にとては急進的過ぎる研究として映ったのであり、その反応はある種の拒絶ないし無理解をもって迎えられたのではないか（註5）。少なくとも、作家の眼にはそう映っている。

5 おわりに

「石器打法研究」は、多くの洋書から得られた知識、そしてイラストまでもが盛り込まれた論文である。今を過すこと80年前以上に石器製作の実験的研究が行われ、それがイギリスやドイツ、アメリカでの考古学研究をも参照した優れたものであったことに驚かされる。

おそらく、現在日本で、石器製作に関して広く知られる古手の文献は、例えば、国分・木村訳『石器時代の技術』（1971：Kenneth P. Oakley "MAN THE TOOL-MAKER" 第5版原著 1967）あるいは酒詰伸男訳『旧石器時代』（1974：M.C.Burkitt "THE OLD STONE AGE" 原著 1954）であろう。また、松沢亜生氏の石器製作実験に基づいた解説なども著名である（松沢 1973、1974）。これらは、いずれも戦後20年以上して紹介された翻訳や論文であり、鉄城没後から数えても15年を経た後の仕事である。既に日本列島に旧石器文化の存在があきらかとなった時期、こうした石器製作に関わる翻訳等はその後の研究を旧石器時代研究、なかでも石器製作の技術論研究へと向かわせ、活発な研究史を作った。しかしそれは「石器打法研究」から始まり、石器使用法研究へと展開した鉄城自身の考古学とは異なる道程であった。それらの仕事に先んじること半世紀近くに、実験的研究により石器製作理論の定立を為していた泉下の鉄城は、いったいどのような眼でこれら研究の流れを見ていたであろうか？

本稿は平成20年度に秋田県埋蔵文化財センターが行った企画展で展示した、武藤鉄城氏の業績に

関わる論である。企画展および本稿をなすにあたり、鉄城娘婿である武藤輝亮氏、および仙北市樺細工伝承館館長、中田達男氏には多くの便宜をいただいた。末筆ながら記して謝意を表する次第である。

註

1 妻の兄は秋田中学から一高美術科に進みながら中退し明治45年に渡米、詩人ホイットマンおよびソロー研究、帰国して以降の農民運動家、そして、その後にルバイヤーの和訳者として知られる文学者、堀井栄歩である。栄歩・ヒデ兄妹の母シゲは豊岩村武藤家から堀井家に嫁ぎ、鉄城にとって大叔母にあることを、鉄城の姪にあたる鶴嶽礼子・鶴嶽ご夫婦からご教示いただいた。妻の兄というだけでなく10才年長の従叔父として近い縁戚にあった栄歩が、鉄城に大きな影響を与えたことは容易に想像できる。少年期からのそうした環境が、鉄城に考古学だけではないきわめて幅広い研究・執筆活動へと向かわせたのである。

2 東京人類学会を通じ、真崎勇助から神田孝平や坪井正五郎へ人形を含む異形石器が提供されていた（神田 1887、坪井 1911）。当時そうした石器や土器の充實が横行し、なかには偽物も多く流通していた。注意を促す記事もある（佐藤 1903）。

3 「石小刀の研究」には昭和2年に體写版刷りして県立図書館に収められている冊子と、武藤家に残された「葉志垣(はしがき)」に昭和五年五月と記されたベン書き原稿がある。前者は主に左右の利き手により、どのように石器を保持したかを、実際の出土資料とともにその握りの形をイラストで数多く表現したのである。対して後者は同じ書名ながら石器製作・使用法だけではなく、例えば編織などの製作や人体の入れ墨など石器の使われた対象を、多くの文献からの図解などを取り入れて論じた。考古学では「原始人の宗教と藝術」以来のまとまった著作である。Pfeiffer の「Die STEINZEITLICH TECHNIK」からの図は後者の「石小刀の研究」に引用されている。

4 武藤家に残された写真帳であり、それを仙北市樺細工伝承館でデジタル化したものを使用させていただいた。使用にあたっては武藤輝亮氏および樺細工伝承館長、中田達男氏からの承諾を得た。

5 武藤鉄城の業績のうち最晩年の「魚形縞刻石」についての論考（武藤 1956）も、必ずしも正しく受け入れられたわけではない。論考には次のような編集同人からのコメントが付けられている。

「武藤氏の報告された魚形刻画は、なおこの他にも岩手県などで注意されており、甚だ興味ふかいものがある。しかし、それらを縄文文化の所産（傍観筆者）であると断定するには、まだ論拠が充分でないと言えるのではなかろうか。縄文文化にはこれまで絵画の類がほとんど見えていない。したがって、この魚形刻画の所属文化を決定するためには、今後慎重な調査が継続されなければならないだろう」

執筆した編集同人は、鉄城の論考が喜田貞吉との間わりでもたらされた民俗考古学的な仕事であること、また、鉄城自身がかつての地方史研究のなかで取り組み、「魚形縞刻石」についても慎重に引用しなければならなかったキリシタン研究にも関わる仕事であることなど一顧だにしていない。さらには同人が編集する雑誌名にも関わって、鉄城が「魚形縞刻石」を「縄文文化」ではなく「石器時代」の所産としていることへの注意もない。一見、もっともらしいコメントではあるが、およそ正当なものではなかったといえる。

引用参考文献（発行年順）

- 神田孝平 1887 「雑記－第十三回解」『東京人類学会報告』第15号
- 佐藤傳蔵 1903 「雑報－石器時代遺物購入者へ注意」『東京人類学会雑誌』第203号
- 坪井正五郎 1911 「裂製動物形石製品」『人類学雑誌』第27巻第3号
- 真崎勇助 1899-1906 「雲根剣」五編
- 武藤鉄城 1933 「石小刀の刃に就いて」『史前学雑誌』第5巻第3号
- 武藤鉄城 1935 「羽後角館地方に於ける鳥蟲草木の民俗学的資料」アチック・ミュージアム 第1巻3号
- 武藤鉄城 1940 「秋田郡邑魚譜」アチック・ミュージアム彙報第45
- 分銅志静・小野一二 1955 「郷土史 五城目町」五城目町郷土史編纂委員会
- 武藤鉄城 1956 「秋田県下の魚形縞刻石」「石器時代」3
- 芹沢長介 1960 「石器時代の日本」榮光書館
- 武藤鉄城 1969 「秋田マタギ開書」慶友社
- 高井有一 1970 「雪の涙の風潮」新潮社
- 国分直一・本村伸義訳 1971 「石器時代の技術」
- 渡部小勝 1971 「武藤鉄城」「秋田の先学」5 秋田県
- 富木耐一 1973 「地方史探究を貢いた武藤鉄城」「秋田人物風土記（続）」昭和書院
- 酒添伸男訳 1974 「旧石器時代」
- 小野一二 1975 「数多い縄文遺跡」「五城目町史」五城目町史編纂委員会
- 武藤輝亮ほか 1980 「武藤鉄城著作目録」秋田文化出版社
- 稻 淳次 1993 「武藤鉄城研究」無明舎出版
- 小林 克 2009 「サケ石」を訪ねて」「日本の美術」515 至文堂

石器打法研究もくろく
撃碎法
削剥法
使用フレエーカー¹
原人ならで現人の作成せる石器

石器打法研究
昭和二年十月

山から出た醜い形状の石塊が原人の手に依り遂に美しい打痕を有する石器に迄変化して往く道程の研究は從来あまり行はれなかつた。否寧ろ吾人の企てゝ到底果たし得ない技巧と諦める者も多かつたのである。今様原人の中村徳松老人が頗りに今は故人となった坪井博士を騙してみた時分「石器の打法を知り得たら御前を博士にしてやる」と云つたことを今だに自慢の語草としてゐる。流石の中村ウス老人も石器の打法だけは判らなかつたと言て私が訪問した時頭を搔いてゐた。然し現在も世界各所に打製石器使用者の居住する以上その方法が何時迄も学界の謎となつてゐる筈はないのである。

慧眼の外国学者は既にその点に着目して又北米インディアンに就き或はオーストラリヤ土人に就き研究の歩を進め、ネルス・シイ・ネルソン、メーンン、ソラスなどその方面的研究家が続出してゐる。

石器を打製するには勿論自然が破壊した石塊で原人の目的物に似通つた形狀のものは手數の省ける都合良き材料石と思はれ又場合それが神が彼らの為め大体その形に削り置いて與れた天与の石として或意味に於て寧ろ崇敬的に原料とされた場合もあるであろう。然し私達はそうした偶然的な機会を別問題として野性的な石塊に対する加工順序を探究しなければならないのである。

一 撃碎と削剥

打法の順序は大体撃碎と削剥に分類することが出来ると思ふ。前者は原料石から目的物の形狀に大体相似の物を欠き取る方法である。即ち若しも運よく原人がその第一段の撃碎で直ちに望み通りの石器を得たならば第二段の

撃碎即ち削剥の労を省略することが出来る。然し第一段の撃碎で完全なものを得ることは先ず百に一つ千に一箇であろう。原料石から分離された片々をその使用目的に最も適當なものとするにはどうしても第二段の削剥を必要とする。則ちじやまな突起は取去らなければならぬだろうし、力を籠める必要の為に特に指が入りするホールも作る場合もあるし掌や指腹の柔軟な部分を痛めぬ為の窮屈な部分を欠き取る必要もあるうし尚ほ又最も肝要なことはその刃の構造である。若し獸皮の裏皮から血管や肉片などを搔き取る場合に両刃のスクラッパー乃至はナイフを使用したらそれば大きな失敗で貴重な毛皮に大穴を開けて仕舞ふであろう。全様に仕上げた革を望み通りの形に裁断する時若し片刃のナイフを使用しても矢張り失敗である。

又若し左利の人間が右利の者の使用するナイフを使用したら彼はその道具が役立たないことを知る許かりでなくうつかりると彼の掌や指腹を醜く怪我するに至るであろう。丁度それは日本剃刀を使用する時その刃を逆に使用する危険さである。

石器の多くは第二の削剥を絶対必要とする。有柄スクラッパーであれ石鎚であれダッカーであれ皆削剥を必要とすること大である。

然し私たちは此処で決して石器のうち原人が特に意を用いて残しておいた自然面を見て直ちにその遺物が使用性の薄い物と解釈してはならない。自然面がよく見せる滑かなど人意では磨製でもしなければ到底得難いであろう。一見粗野に見える打面もその使用目的に効を奏す可く原人が脳の良さ加減を見せたことを表示してゐる。

殊に貝塚の貝利用小刀に於いて原人が割りつ放しの自然面を残したことを批難する者があったら地下の原人も定めし現代人の不心得を冷笑するであろう。論より証據私達が若し貝殻を剥く場合に普通の細かい打痕を並列してゐる小刀を使用したらいくら腕しても焦慮しても自己の努力の無益なことを痛感する。剥身を作る小刀はどうしてもあの欠き放しの西洋剃刀の様な刃を有するものでなければその役目を果たし得ないのである。私達は原人の美しい加工品を称賛すると同時に又残した自

資料1 『石器打法研究』昭和二年版①
(※は挿図)

然面の利用にも充分敬意を拂ふ必要のあることを知らなければならない。

註一、拙著「石小刀の研究」の条に述べた丸刃石小刀の刃の部分などは自然の一欠きが最もその効を奏してゐる。

一、撃碎法

先づ撃碎される原料石に就いて調べてみるとその石質が十勝石、即ち黒曜石の断口を示すものが最も工合が良らしい。最初の準備はその石にストライキングプラットフォームを作ることである。即ち平たい面を作ることである。そしてその端の邊を七十度の角度で叩くのである。叩く道具は円い石の少し長いめのものが適当である。ハンマーストーンと称されてゐる櫛石でそのストライキングプラットフォームを※の角度で打つのである。その方法も彈く様に打撃するものと压し付けて叩くようにするものと二法ある。大抵の場合前者が有効である。そして若し左方へ広く欠き度いと思ふ時には心持そのハンマーストーンを下ろす瞬間に力を左方に入れる様心掛けねばならない。撃碎と云つても率う裂く様なものである。石は欠けると云ふより寧ろ裂ける様な感がある。又若し深く下方に裂かうとすればハンマーの重い物を使用するか又はハンマーを深く下ろす心持で行わなければならぬ。第一回目の二度目の打撃の様にストライキングプラットフォームの欠け去る部分は極く僅少であるに拘らず下方の剥けゆくこと驚く可きものがある。自然は不思議にも私達の必要とする物の形に近い物を直ちに与えて與れる。一打撃で思い設げず石錐形、石小刀形ニケなど、三ヶの石器を容易に得ることがあるのである。

私達は遺蹟から富士形の大きな原料石（石器を多く除去された）を見出す時その側面に上から下へ走る縦にでも削られた様な溝を見て吃驚するがそれも次の事実に想到する時容易に點頭かれるとと思ふ。※

従うして石片を剥ぎ取り行けば正方形近い原料石も速に※となる。それを此度は逆にして底辺をストライキングプラットフォーム※とする。

その標本は後図に示す第一圖に使用した若神

造遺蹟のものであるが然も神代村鎌川本田遺蹟のものと酷似してゐるは面白い。そうして上下撃碎終ったものは后図、「バルブを出した遺蹟」の条に示したような球茎となる。それを二等分して二つのストライキングプラットフォームを作り大形の石器を得ることが困難となつても石錐、石錐の様な小形石器を得ることが出来るのである。※

又私達は多くの場合、打撃が一回であっても第一面の下側（例、第一回実験の二度目の一打撃で出来た下方の※形の左利小刀）に出来るものは多く前面の積極的のものに対し、消極的で左利の人の使用に便宜な形状が出来ることに注意する必要がある。私達がそれを右利きに使用せんとすれば若干第二段の削除法でその刃の工合から手頭の方に近い部分を修正する必要があるのである。

原料石保持の形式は殆ど全部左手で持つ。よほど形の大きいものでも片手で支持が容易である。又球茎があまり小形になつて手を痛める場合には其処へ生皮を捲いたりしたらしい。

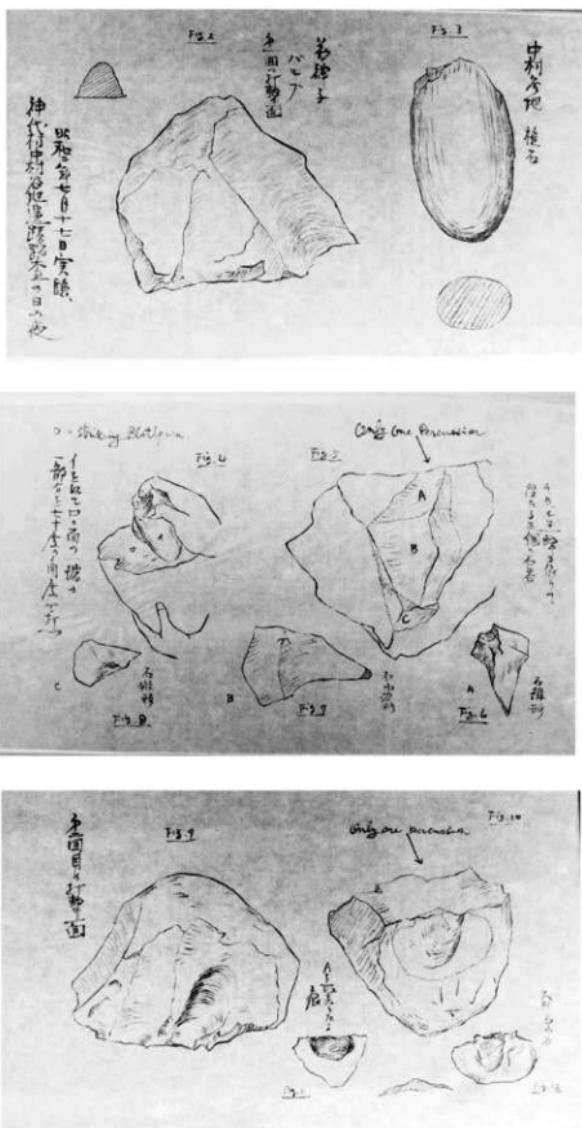
二、削除法

削除法は第一の撃碎の後に当然来る可き加工で仕上げの技術である。然もその仕組が小さくなつただけで理屈は殆ど全様である。即ち被加工品の形の小さくなつたことは勿論その櫛石の形も小さくなり又は形状が若干変化して来る。

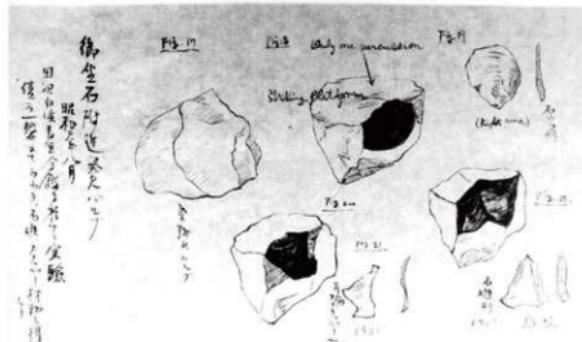
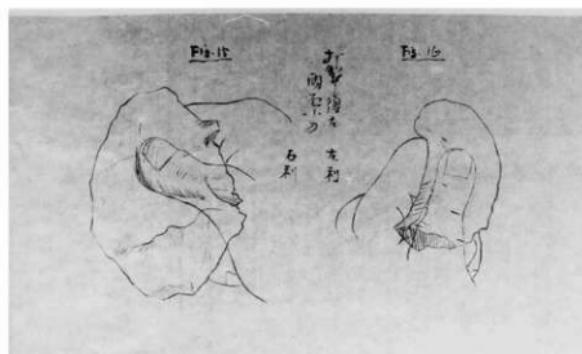
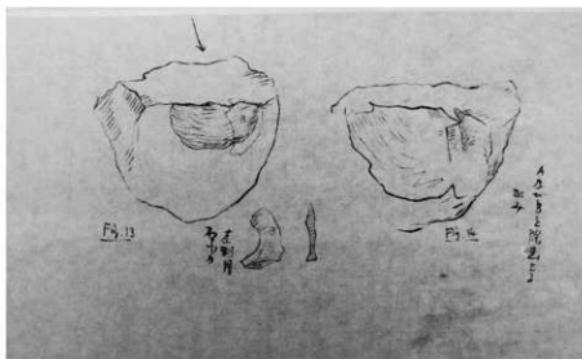
これに就いて四つの技巧が考へ得る。その一是前述の撃碎法の縮図で然もコムプレッションの打撃を以てする。（前項ではバーキュージョンで弾く様に打つ方が有効と述べたが）則ち石器を何か不動の台に載せ左手でその欠く可き部分を抬げ置き其処へフレーカー（この場合はハンマーストーンでなく）を当てて圧し付ける。※

他の一方法は後図石器削除方法に示した様に横向きに欠き取る方法で然もコムプレッションである。之は若しその欠く可き部分が薄ければ薄い程気持ちよくその破片を飛ばすことが出来る。外人の研究家などその方法に依れば普通の硝子板などもカレンダーを一枚一枚剥ぎ取る様に容易く打製出来ると云つてゐる。それは假に極端な言としてもそれに近い位の

資料2 『石器打法研究』昭和二年版②



資料3 『石器打法研究』昭和二年版③ fig2 ~ fig12



資料4 『石器打法研究』昭和二年版④ fig13～fig23

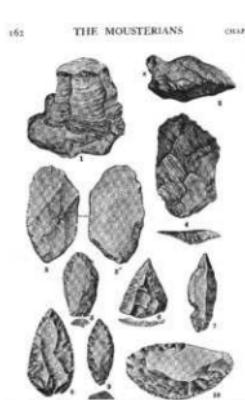
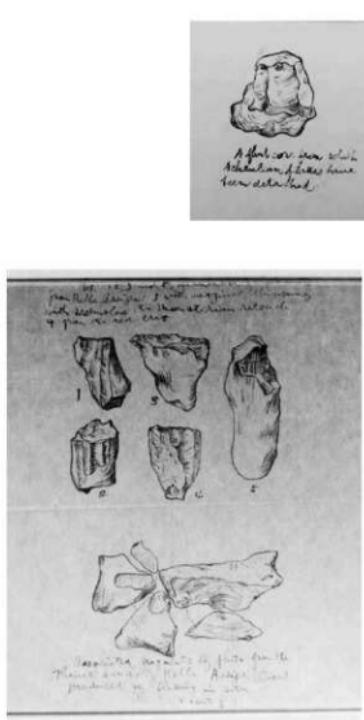


FIG. 31.—Associated fragments of flints from the Thessalian walls of Bellus-Acropolis (Kraze) produced by flaking *in situ*. (After Beaufort, c. about 1.)

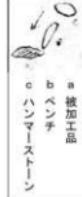
William Johnson Sollas "Ancient Hunters"
に示された図



資料5 『石器打法研究』昭和二年版⑤ fig24～fig25 及び 参考図

芸当は出来るのである。

私は試にガラス板の破片をその方法で削剥し殆ど望み通りの石鎚を得たのであった。※
第三の方法は被加工品を左手に持つてそれへ先にバルブへ行った時的心持ちでバーキュージョンの弾撃（私は歓んで此の言葉を使用し度い）を加へるのである。これも次に述べる方法も唯前法の様に第一の削剥と並列してその打痕を規則正しく並べ得ないことは劣る。
第四は即ちベンチとハンマーストーンを使用する方法で次図に示すのがそれで自分独りで行う場合もあり又共同して一人はベンチと被加工品を持ち他の一人がハンマーストーンを振り上げて打撃を与へるのである。但し此の



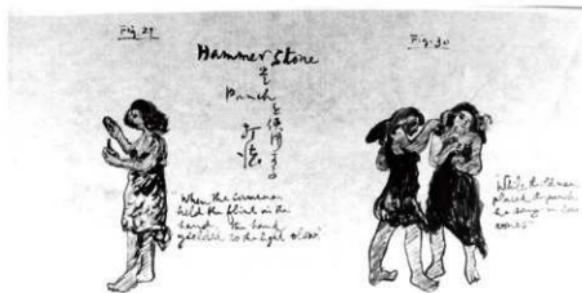
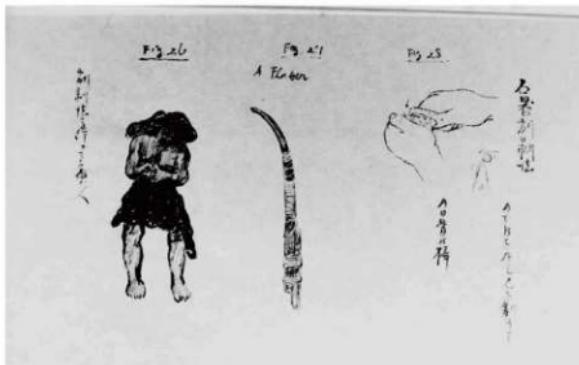
場合二人の鼻唄の調子のよく合ふことは美的の石器を得る要素であるとヘンリー・カタリナ・ドップ氏など面白く想像してゐる。※

○歯の使用

中央オーストラリア土人石器の最後の仕上げのためその歯を使用し細かな打痕を作る。

○ヤアガン人（フェージア人）

バークレイ氏に依ると「全種族オナ人はガラスの破片で矢の根を作る時には軽石でその尖端を研ぎ尖らし石を台にして座敷代用とし細工に便にし骨の鶴を以て白樺の枝を削って矢の軸を作り孤の皮で塵をぬぐい水鳥の羽毛ではねをつけそれを翼の肉の腱で縛りつけてそこをヤニでぬりかためる」



資料6 『石器打法研究』昭和二年版⑥ fig26～fig30

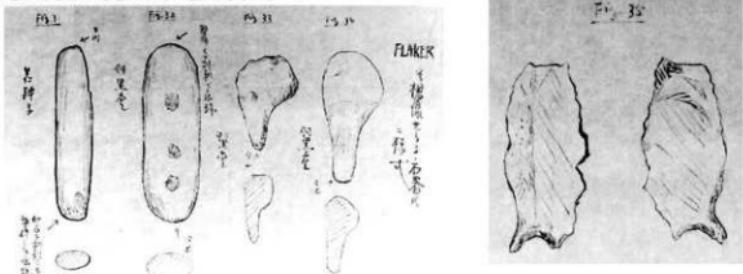
三、使用フレエーカー

而して此の場合使用するフレエーカーは人々の想像するだろうと思ふことに反して被加工品よりも少し軟かい目の棒石又は骨棒が使用される。遺憾なことに東北地方はそうした骨質の物が冬季間の降雪の為その破壊作用を受け貝塚などの場合の外その形態を止むことはない故当時の原人が優秀な骨製のフレエーカーを使用してみたとしてもその格好を想像することは甚だ困難であるが大体前回の様な物か又は後回の石製の棒片と全じ様なものであったらふと思ふ。次回に示す若神子産の棒片には明らかにその目的の為め生じたと思われる痕跡があり羽黒堂其他の遺蹟から出るもの亦全様である。又他の遺蹟ではあまり見当たらないが羽黒堂から出でるビストル形の石器などは右手で握りその先端の尖った所で石器の被加工品へ圧し当てる時は非常に具合がよろしい。

然しフレエーカーとして最も良いのは骨棒であろう。棒石又は櫻木などのベンチも使用されたことと思ふが矢張り骨製のものに及ばない。私は鶴の骨で作ったらしい歯磨楊子の柄でその方法を実際に見て見たが何とも言へず工合が良い。圧力の加えられると同時に薄い石片がビヂビヂと飛び去る。

尚ほ前述のベンチは現在の電工の使用する様なベンチの意でなく寧ろタガネに相当する様な棒石又は骨棒の意味である。

ストーンハンマーは或は現在至る所の遺蹟から出る円石であったかも知れない。唯その円石には発火痕と称せらる凹みがあり凹石とまで称されてゐるものがあることは未だ考慮の余地がある様にも思はない譯でもない。



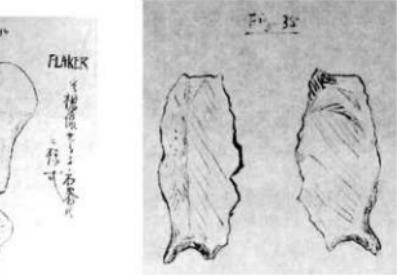
資料7 『石器打法研究』昭和二年版⑦ fig31～fig35

四、原人ならで現人の作成した石器

私が若神子遺蹟と御座石付近から出たバルブにて一段の擊碎法を与えて種々の石器を得又硝子板に両法を施して立派な石器を得たことは前述の通りであるが最近、学校の相馬先生や太田先生が私から矢張りその石器製作なる悪い病気が伝染して机の縁を悉皆傷だらけにしてゴスゴスやった結果これは又優秀な素張らしく立派な石器を二三箇製作した。そのうちの一つなど外の先生達に見せたら私のネクタイピンにして置いた石器だと云つてどうしても承知しない程であった。最早原人ならで現人の手で立派な石器の完成したことは実は世界の先史学の歴史の特筆大書すべき事柄と言わねばならない。而してその使用したフレエーカーは現代の真正なベンチの柄の部分※を使用したのである。その道具のカーブしてある点の工合良かったことなども大いに考慮すべきであろう。

羽黒堂遺蹟出土未製品

人々が完全な石小刀を石屑又は未製品と云ふは笑止の沙汰であるが之こそ正しく石器の未製品である。原人が下部を若干削剥してあるのは※雁股石器を作成する目的ではなく、怖らくそれは彼の亞米利加インデアンが好んで作る石器即ち※魚形のもの作ろうとする途上であろう。嘗て強首玄蕃台からいま一撃で優秀なドッガーと石器形破片を得るに容易なものを見出したことがあるが、共によき参考資料である。



縄文時代の珪質頁岩採掘址群

- 三種町上岩川遺跡群の構成と採掘・石器製作・搬出 -

吉川耕太郎*

はじめに

日本列島ではこれまでに、長野県鷹山遺跡群や星ヶ塔、大阪府二上山遺跡群、栃木県向山遺跡などで縄文～弥生時代の石器石材採掘跡が発見されている。鷹山や星ヶ塔は黒曜石、二上山はサスカイト、向山ではチャートが採掘されており、いまや先史人類の採掘活動は特殊なものではなくなつた観ずらである。海外ではイギリスの Grime's Graves のフリンント鉱山が著名である。

黒曜石、サスカイト、チャートといった主要石器石材となるべく忘れてならないのは東北地方の珪質頁岩である。堆積岩として河川流域を中心とした面的な分布を示し、河原で容易に採取できると從来考えられてきた珪質頁岩の採掘址群が発見されたのは2006年のことである。

本稿では、これまでに筆者が幾度か取り上げてきた（吉川2008、同2009）珪質頁岩採掘址群である秋田県三種町上岩川遺跡群（秋田県教委2008）を対象に、本県ではどこでも拾えるはずの珪質頁岩を縄文人がなぜ採掘したのかについて、これまでの報告や論考を整理しながら検討してみたい。とくに既刊の報告書においては各遺跡出土の石核形態に主眼が置かれているため、ここでは遺跡群の評価に重きを置きたい。

上岩川遺跡群形成の背景について、筆者はかつて定住化が本格的に進んだ縄文時代前期を画期とした地域的専業（分業）化の促進との関わりの中で論じ、地域集団を構成する各集落の共同作業で珪質頁岩が採掘されたあり方を想定したが、遺跡群の詳細について言及する紙数がなかった（吉川前掲）。そのため、本稿では石材資源開発と遺跡間連鎖の観点から再論したい。なお、本稿では石器の器種認定や遺構の理解についてとくに断りのない場合は報告書の記載を優先させている。

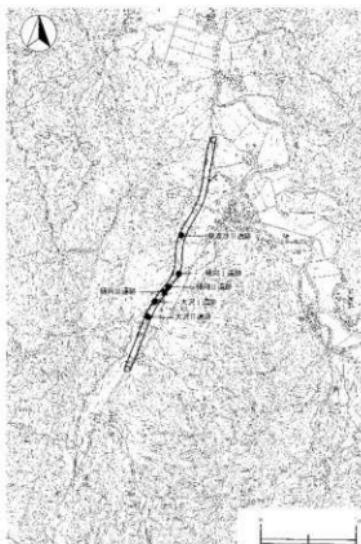
1 上岩川遺跡群の概要

1 上岩川遺跡群の概要

上岩川遺跡群は、出羽丘陵北縁部の三種町に所在し、鹿渡渉Ⅱ、樋向Ⅰ、樋向Ⅱ、樋向Ⅲ、大沢Ⅰ、大沢Ⅱの計6遺跡で構成される（第1図）。上岩川地内を北流して八郎潟東部承水路に注ぐ三種川の支流、小又川の左岸丘陵から東へ舌状にのびた河岸段丘縁辺部に立地する。各遺跡は、小又川に注ぐ小さな沢により地形的に区切られている。表層地質図からは珪質頁岩を産出する女川層の真上に分布しているのが分かる（第2図）。

上岩川遺跡群の所在する旧琴丘町は神社の鳥居や祠、墓石の脇に珪質頁岩が祀られている風景をよく目にすることもある。家の下遺跡の報告書では高さ1.6mほどの珪質頁岩が祀られている様子が写真で紹介された（秋田県教委1992）。こうしたことからも、「どこでも拾える」はずの珪質頁岩が、こと当該地域では地元住民に特別に扱われていることが伺い知れる。なお、家の下遺跡は後期旧石器時代前半期に帰属する環状ブロック群で、県内でも最多の出土石器数を誇る。豊富かつ良好な接合例や石器組成、遺跡の構造論的検討から、筆者は当該遺跡を準原産地遺跡として位置付けたことがある（吉川2007）。後期旧石器時代から珪質頁岩が豊かに産出したであろうことを物語っている。

*秋田県埋蔵文化財センター文化財主任



第1図 県道4号能代五城目線と上岩川遺跡群
(秋田県教委 2008)

地区のほか、標識地となった男鹿半島女川や鶴の崎辺、雄物川下流域の上位段丘の疊層中や中・上流域の支流横手川流域・羽後町七高山などが今のところ知られている。良質とはいへ質や原石サイズはまちまちである。そのなかでも上岩川地区的珪質頁岩は節理が発達しているものの、大形で玉髓質の光沢を持つきわめて特徴的な石質である。

報告では大沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の立地する段丘崖断面の観察から、表土層→黄褐色粘質土層→灰白色粘質土層→粘質土を挟む「破碎泥岩ブロック層」→泥岩層（女川層）という層序が確認されている。上岩川遺跡群で繩文人が目的とした珪質頁岩は、遺跡群が立地する段丘の地表下約1mの疊層中（上記の破碎泥岩ブロック層）に包含されている。原礎は亜円礎～亜角礎で、小又川上流側の遺跡近傍に存在が予測される女川層の岩体からおそらくは浸食により削り取られてその他の河川堆積物と一緒に段丘疊層を形成したのだろう。当該段丘は長期間継続的に河川の氾濫を受けたものと見え、表土を剥いだ黄褐色粘質土層には亜角礎が多く含められている。

3 各遺跡の内容

本遺跡群は高速交通関連整備事業県道能代五城目線の建設事業に係る分布調査によって2005年に発見され、翌2006年に発掘調査が県埋蔵文化財センターによって実施された。調査の結果、表1に示すように、9基の珪質頁岩原石の採掘址群が検出された^(註1)。このほかにも石器を製作した場所と考えられる石器集中部が35箇所認められている^(註2)。石器総点数は133,999点である。石鏃、石槍、石箭、石匙などの製品は145点組成し、原石を除いた石核や剥片等の残滓は133,168点を数える。原産地遺跡らしい石器組成比率である。また、製品のうち、石槍はほとんどが未製品である。橿向Ⅲ遺跡・大沢沢Ⅱ遺跡からは縄文時代前期～中期に帰属する土器片がわずかに出土しており、活動の中心時期は大まかに言ってその辺りだろうと考えられる。

2 上岩川産珪質頁岩の特徴とその由来

珪質頁岩は新第三紀中新世に生成された堆積岩である。日本海沿岸の油田地帯に多く、青森県小泊層、秋田県女川層、山形県草履層などが知られている。秦昭繁はこれまでに継続的な調査を行っており(秦 1998 他)、堆積岩では難しい原産地推定についても積極的に検討している(秦 2009 他)。秋田県で石器石材として自貫な珪質頁岩の分布は、当該



第2図 遺跡周辺の表層地質区分図
(秋田県教委 2008)

北から順に遺跡の内容を検討する。

<鹿渡渉Ⅱ遺跡>

標高 38 ~ 44 m の低位段丘上に立地する。調査区は中央部をはしる林道により南北に分断されている。調査面積 1,730m² から石器集中部 13 箇所、土坑 1 基が検出された（第3図）。調査区北側斜面から多量の石器製作残滓が出土し、報告者は調査区外への石器製作跡の広がりを推測している。石器集中部は西側からの緩やかな斜面に分布するが、S X Q 29・40 は北側の沢に向かう急斜面上にある。桶向 I 遺跡とならんで石器集中部が最も多く確認された。

石器総点数は 37,328 点で、1m²あたりの出土点数（石器密度）は 21.6 点である。内訳は、石槍 2 点、石竈 1 点、スクレイバー 2 点、原石 223 点、石核 458 点、剥片 36,749 点である（第7図）。注目すべきは原石の点数である。石器総点数とあわせて本遺跡群で桶向 I 遺跡について 2 番目に多い出土量である。また、接合資料中（4）には石竈の未製品（6）が含まれており、石竈製作がなされていたことがわかる。しかし、石器総点数に比べて定形的な石器製品は僅かであり、石器製作の目的物の全体は見えにくい。

本遺跡では原石採掘坑が確認されず、原石の集積と石器製作が集中的に遂行された区域であったことを示している。また、このことは、原石採掘段階と原石集積段階が空間的に分けられていたことを予測させる（註③）。

<桶向 I 遺跡>

標高 38 ~ 43 m の低位段丘上に立地し、南北に細長い調査区の総面積 3,300m² から石器集中部 13 箇所、原石採掘坑 1 基が検出された（第3図）。石器集中部は調査区中央に分布し、採掘坑はそれより 25 m ほど南で確認されている。なお、S X Q 9 は沢地形の覆土中から石器がまとまって出土したもので、報告者は「捨て場」の可能性も示唆しているが、いずれにせよ、遺構か否かも含めて他の石器集中部とは性格が異なるだろう。

原石採掘坑は形態上、複数の土坑が連結したような状態を呈しており、あたかも古代の粘土採掘坑のような形態を示す（第5図）。報告者は、覆土の観察から図中②・⑦のピットが自然堆積を示しており、もっとも新しいと指摘している。なお、②・⑦の底面からは頁岩原石がまとまって出土した。

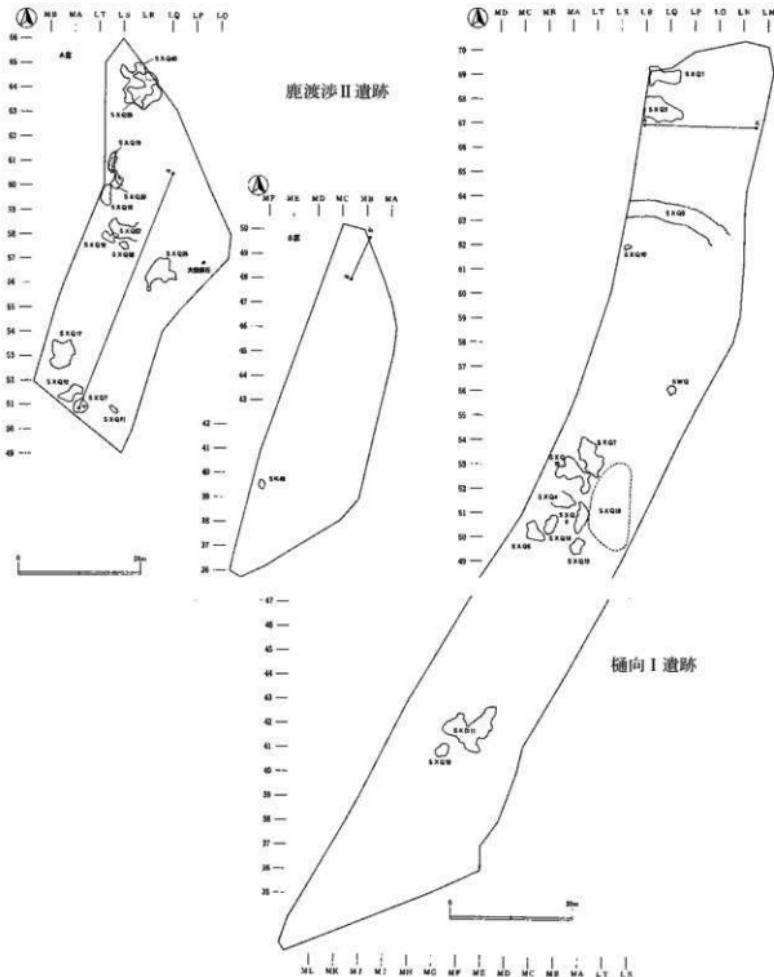
石器総点数は 50,571 点と遺跡群中最多で、石器密度は 15.3 点/m² である。内訳は、石槍 3 点、両面加工石器 2 点、石匙 1 点、石鏃 4 点、スクレイバー 20 点、石斧 1 点、原石 475 点、石核 1,507 点、石刃核 3 点、剥片 48,530 点、石刃 1 点である（第8図）。原石の出土は遺跡群の中で最も多く、鹿渡渉Ⅱ 遺跡同様、原石がとくに集積された遺跡と考えられる。20cm をこえる大型石槍の未製品（1）や石鏃の未製品（8・9）などが出土していることから、これらを目的物とした石器製作がなされていたのだろう。未製品を含む製品の点数も遺跡群中最も多い。注目したいのは、17 の分類形に類似する珪質頁岩製打製石斧である。器体中央部の抉り部分以外はほとんど加工が施されていない。同様の石斧は、前述したチャート採掘址の栃木県向山遺跡で「タガネ状石器」として紹介されているなかにチャート製のものがある（第12図1）。同じ堆積岩原石の採掘址群の共通性が垣間見える資料として注意しておきたい（註④）。また、より良質な剥片が遺されているにも関わらず、背面に疊面が多く残された剥片を素材としたノッチ（15）があることにも、注意しておきたい。

本遺跡は原石の採掘と石器製作が場を離れて行われていたことを示している。

<桶向 II 遺跡>

南北を沢に挟まれた標高 41 ~ 43 m の低位段丘の緩斜面上に立地する。調査面積 290m² から柱穴様ピット 2 基、掘り込みの浅い土坑 4 基（註⑤）が検出された（第4図）。このうち、S X 2 からは 2,654 点と数多くの石器が出土している。報告者は石器製作に伴う残滓の廃棄遺構と考えている。

石器総点数 7,268 点、石器密度 25 点/m² で、1m²あたりの出土点数は、原石採掘坑が同じく確認されていない鹿渡渉Ⅱ 遺跡と近似する。石器組成の内訳は、石槍 1 点、スクレイバー 2 点、石鏃 1 点、敲石 1 点、原石 28 点、石核 127 点、石刃核 4 点、剥片 7,102 点、石刃 1 点である（第9図）。ここでも疊面付き剥片を素材としたスクレイバー（ノッチ）が 1 点認められる。石槍（1）は製作途上に器



第3図 遺構配置図(鹿渡渉II遺跡・種向I遺跡)

表1 上岩川遺跡群の概要(縄文時代以外と考えられる遺構・遺物は除外)

遺跡名	調査面積m ²	石器集中部	原石採掘坑	土坑他	石器総点数
鹿渡渉II	1,730	13		1	37,436
種向I	3,300	13	1		50,571
種向II	290			6	7,268
種向III	950	5	5	3	34,957
大沢I	1,170	4		1	2,840
大沢II	600			5	927
総計	8,040	35	9	16	133,999

表2 上岩川遺跡群の遺構別石器組成表 原石には「分割礫」、「剝離原石」を含む。スクレイバーにはノッチを含む

遺構名	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	石斧
石塙外	7	148				148									
石塙内中段1	47					47									
石塙内中段2	28					28									
石塙内中段4	147					3			144						
石塙内中段5	329	5				12			312						
石塙内中段8	697					6			691						
石塙内中段9	634	4				15			615						
石塙内中段10	77					2			75						
石塙内中段12	162	22				23			1560				1		
石塙内中段13	355	4				18			350						
石塙内中段14	849	35				6			807						
石塙内中段15	13101	3				1			13023						
石塙内中段16	8515	3				74			8434						
石塙内中段17	3375	78				49			3247		1				
石塙内中段18	1791	15				58			1718						
石塙外	6939	89				188			6658		2		1		1
計	37436	223	0	458	0	36749	0	1	21	0	2	0	0	0	1
——															
縄向山遺跡	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	石斧
石塙内中段1	60					18			579		1				
石塙内中段2	553	4				1			550						
石塙内中段4	849	35				6			807						
石塙内中段5	2347	41				29			2274		1		1		
石塙内中段6	439	16				12			411						
石塙内中段7	1579	9				16			1552						
石塙内中段9	6358	19				81			6256						2
石塙内中段10	659	1				1			657						
石塙内中段12	108	1				2			105						
石塙内中段14	242	1				2			233						
石塙内中段15	1025	37				4			960						
石塙内中段16	203	18				28			202						
石塙内中段19	6243	186		300		5747	2		1		5		2		
原石採集坑11	880	49	1	35		793			1		1				
計	26642	50	2	968	1	25588	1		13		3	17	1		
——	50571	475	3	1507	1	48530	3	0	4	1	20	0	2	24	1
——															
縄向山遺跡	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	石斧
石塙内中段4	8					8									
石塙内中段5	2347	1				3			231						
石塙内中段7	130	7		13	1	109									1
土坑2	2654					14			2639						
土坑6	1572	12	2	47		1509					1		1		
土坑9	539	31	2	18		518									
土坑外	2069	7		32		2028	1								1
計	7268	28	4	127	1	7102	1	0	0	0	2	1	0	1	1
——															
縄向山遺跡	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	石斧
石塙内中段1	860	1				852									
石塙内中段2	92					14			90						
石塙内中段3	633					2			625	1	1		2	1	
石塙内中段4	5747	60	2	86		5593	1			3		1	1		
石塙内中段5	1055					19			1035						
原石採集坑6	6165	111	2	170		5969	1	1	1	5					5
原石採集坑7	1040	5	1	30		1000	2								2
原石採集坑15	53								53						
原石採集坑17	2205	16	2	83		2097	1			1	3		1		1
原石採集坑20	1600	13		13		1600	1								3
土坑3	527	10	1	14		472	1		1		2				1
土坑4	14034	21	209	1	13801	6	3	31	2	6					1
計	34957	105	8	647	1	34129	14	5	4	5	21	1	5	11	1
——															
大沢I遺跡	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	石斧
石塙内中段1	92					92									
石塙内中段2	169					1			168						
石塙内中段3	479					477			2						
石塙内中段10	153					153									
土坑4	1947					7			1939						
土坑5	307	10	1	14		472	1		1		2				1
土坑6	14034	21	209	1	13801	6	3	31	2	6					1
計	34957	105	8	647	1	34129	14	5	4	5	21	1	5	11	1
——															
大沢II遺跡	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	トランシエ
原石採集坑2	0					5									
原石採集坑5	5					2									
原石採集坑7	2					2									
土坑3	2					2									
土坑9	3					3									
土坑10	3					3									
土坑外	917	2		45		856	2		1		3		1	1	1
計	927	2	0	45	0	871	2	0	1	0	3	0	1	1	1
——															
上岩川遺跡群	組合数	原石	石刃様	石核	石刃	剥片	石種	石層	石頭	石鉋	スクレイバー	石鏃	両面加工	二次加工	トランシエ
南高井	37436	223	0	458	0	36749	1	1	2	0	6		1		
橋前1	50571	475	31	1507	1	46530	3	0	4	1	20	0	2	24	1
橋前2	7268	28	4	127	1	7102	1	0	0	0	2	1	0	1	1
橋前3	34957	105	8	647	1	34129	14	5	4	5	21	1	3	11	1
大沢I	2840	0	0	8	0	2829	14	0	3	0	21	0	0	6	1
大沢II	927	2	0	45	0	871	2	0	1	0	3	0	1	1	1
計	133999	833	15	2792	20	130210	61	14	61	48	2	8	38	11	11

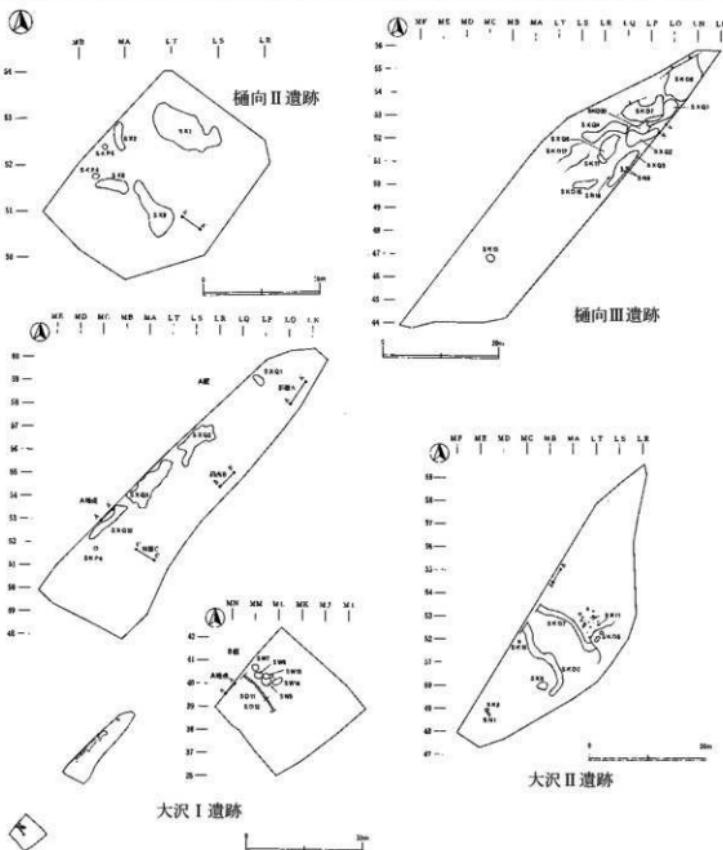
体中央で折損したものである。敲石（3）は安山岩製で、非常に脆い石質であることが報告者により指摘されている。同様のものは前述の向山遺跡でも出土しており（第12図2）、流紋岩質ではあり脆弱である。軟質素材の敲石を用いた作業が共通してあったのだろうか（註6）。

本遺跡では石器集中部は確認できないものの、石器密度およびSX2のあり方から、鹿渡渉II遺跡と同じく石器製作を中心とした区域と考えられる。

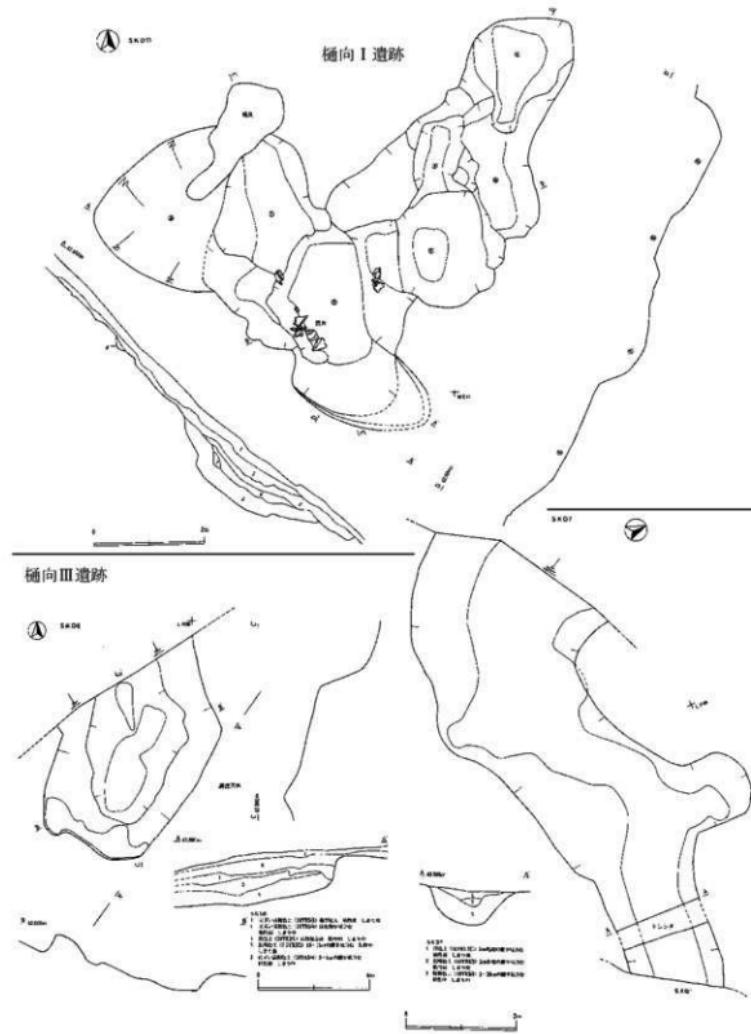
〈樋向III遺跡〉

標高38～43mの低位段丘上に立地する。調査面積950m²から石器集中部5箇所、原石採掘坑5基、土器埋設遺構1基、土坑2基が検出された（第4図）。調査区南西側は現代の掘削を受けており、遺構・石器ともに稀薄であるが、遺跡群中、原石採掘坑が最も多く確認されている。樋向I遺跡と異なり、原石採掘坑と石器集中部が重複して分布する。また、採掘坑に隣接する土器埋設遺構からは縄文時代中期後半に帰属する土器底部や、近接して縄文時代前期の土器片も出土している。

原石採掘坑には形態上、土坑状を呈するもの、2基の土坑が連結したような状態を示すもの、溝状



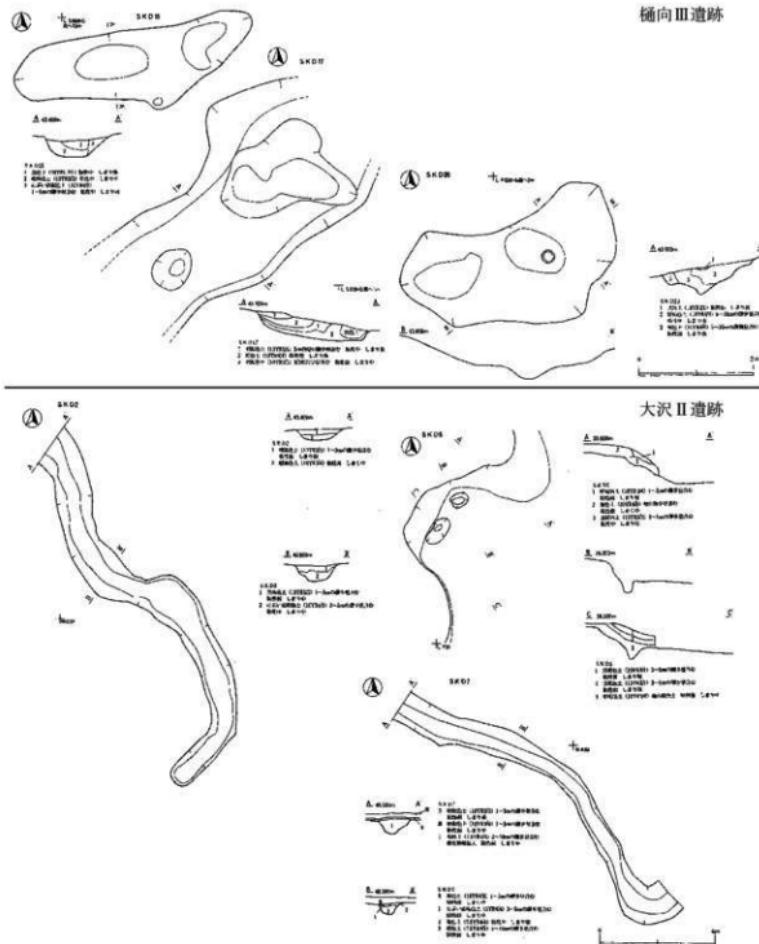
第4図 遺構配置図（樋向II遺跡・樋向III遺跡・大沢I遺跡・大沢II遺跡）



第5図 原石探掘坑（樋向Ⅰ遺跡・鹿渡渉Ⅲ遺跡）

のものに分けることができる（第5・6図）。

石器総点数34,957点、石器密度36.8点/m²である。本遺跡群中、石器密度が最も高い。南西側の後世の掘削を考えるとより高くなることが想定される。出土石器の内訳は、石槍14点、石籠5点、石鏸4点、石匙5点、スクレイバー21点、石錐1点、両面加工石器5点、二次加工ある剥片11点、

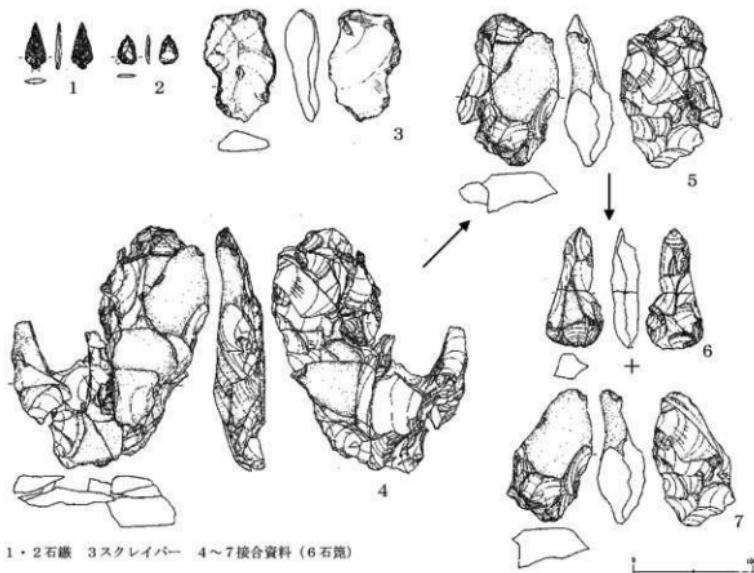


第6図 原石探掘坑（桶向III遺跡・大沢II遺跡）

半円状扁平打製石器（安山岩製）1点である（第9図4～24・第10図）。製品類の出土点数は最多であり、とくに石槍は群を抜いている。スクレイパー類も本遺跡群中最多であり、礫面付着剥片素材のものもまとめて出土している（第10図20～27）。

本遺跡は遺跡群のちょうど中央に位置し、原石探掘坑がもっとも多く確認されていることから、探掘区域のコアゾーンと考えられる。また、石器製作も桶向I・鹿渡沙IIについて大規模に行われており、石器組成からは大形の石槍製作を中心としていたことが推測される。

<大沢I遺跡>



第7図 出土遺物（鹿渡渉II遺跡）

標高42～45mの低位段丘緩斜面上に立地する。調査面積1,170m²から石器集中部4箇所、柱穴様ピット1基が検出された（第4図）。また、林道をはさんで南西側の調査区では中世に帰属すると考えられる炭窯跡（略号SW）と溝跡が確認されている。SXQ2・3・10は調査区西側で検出され、上面は後世の掘削により失われている。本来一つのまとまりとしてさらに調査区外西側へとびる可能性がある。

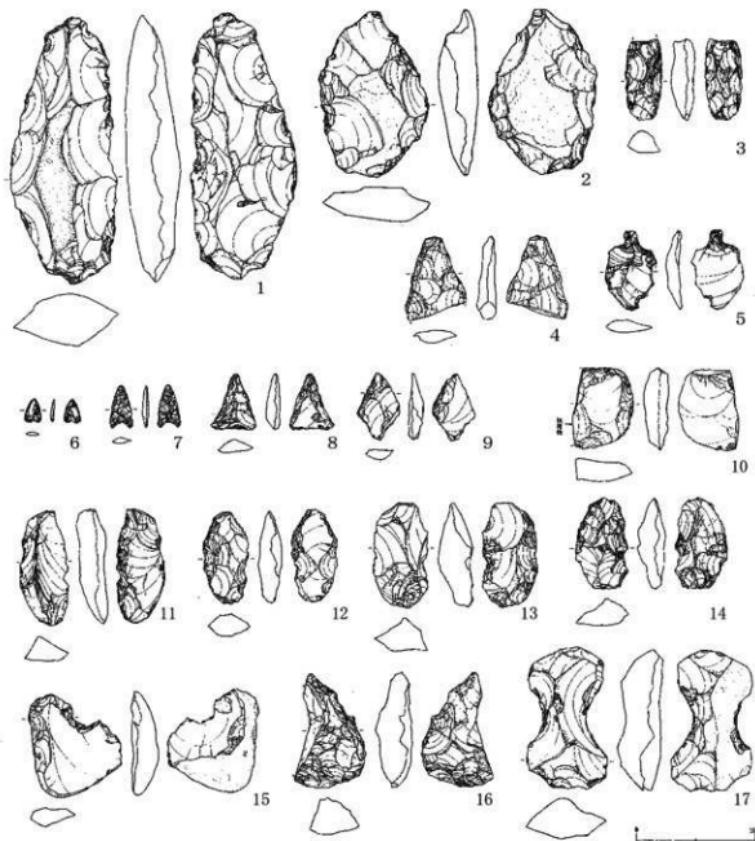
石器総点数2,870点、石器密度2.5点/m²である。石器組成の内訳は、石器3点、石核8点、剥片2,829点という単純な組成を示す（第11図）。

本遺跡は専ら石器製作が行われた区域と考えられる。その中心は調査区外の西側に広がるのだろう。
<大沢II遺跡>

標高39～40mの低位段丘縁辺に立地する。調査面積600m²から原石採掘坑3基、土坑3基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基が検出されたが、石器集中部は確認されなかった（第4図）。

原石採掘坑（第6図）とされたもののうち、SKD2・7は屈曲した溝状を呈する。自然の溝状地形とも考えられたが、報告者は「SKD2にみられるように先端が留まり、水が流れるような状態を示していない」とこと、「深さは深いところでは1m前後もあり」、珪質頁岩原石を含む「破碎泥岩ブロック層」に底面が到達していることから、採掘坑と積極的に評価しており、本稿もそれに従いたい。また、SKD5は土坑状を呈する。土器埋設遺構は、中期に帰属すると考えられる粗製の深鉢が埋設され、炉として使用されていたものである。位置関係から原石採掘坑と同時期と考えられる。土器埋設遺構の周囲からは柱穴状のピットが多く確認されているが、報告者によると竪穴住居跡に伴うものとは認定できなかったようである。

石器総点数は927点、石器密度は1.5点/m²と本遺跡群中もっとも少ない。石器組成の内訳では、石槍2点、両面加工石器1点、石器1点、スクレイバー3点、二次加工ある剥片1点、トランシェ様



1~4 石槍 5 石匙 6~9 石鏟 10~15 スクレイパー 16 両面加工石器 17 石斧

第8図 出土遺物（樋向I遺跡）

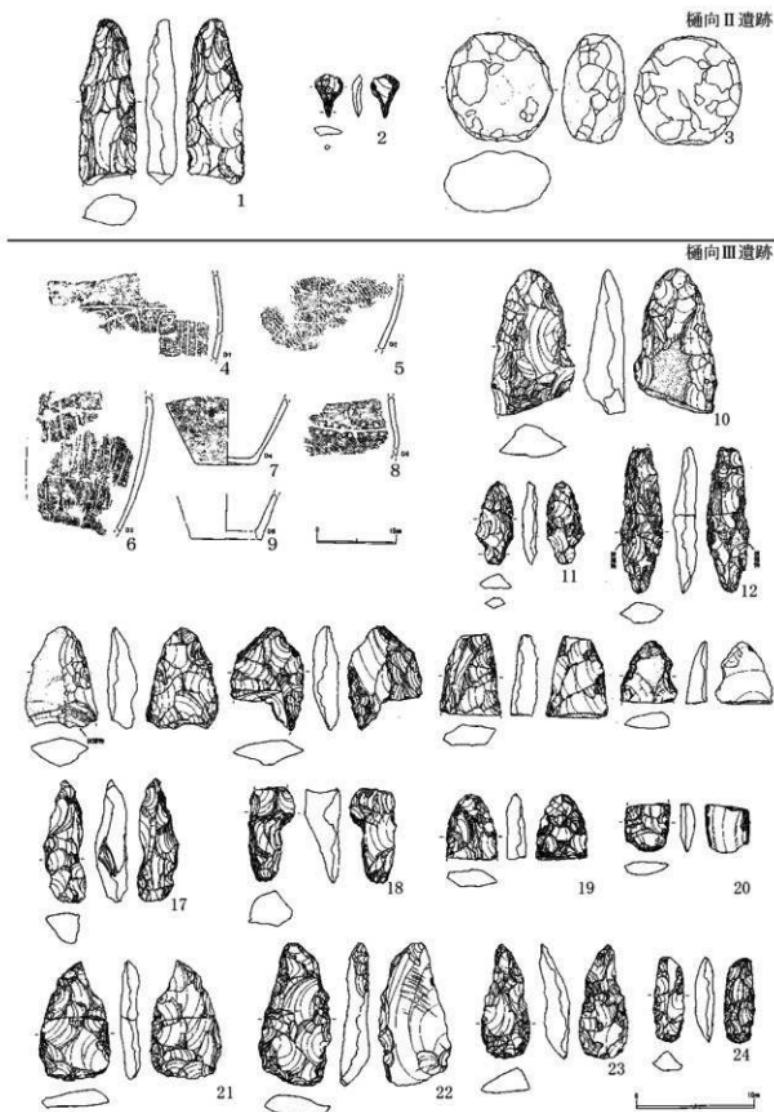
石器1点が出土している（第11図）。原石採掘坑のある遺跡では、点数の多寡に関わらず石槍が組成している点は注意される。また、ここでもスクレイパーには礫面付き剥片が素材として用いられている例がある（8・9）。

本遺跡は原石の採掘が中心に行われた区域で、土器埋設遺構から中期に帰属すると考えられる。

2 上岩川遺跡群の構成と遺跡類型

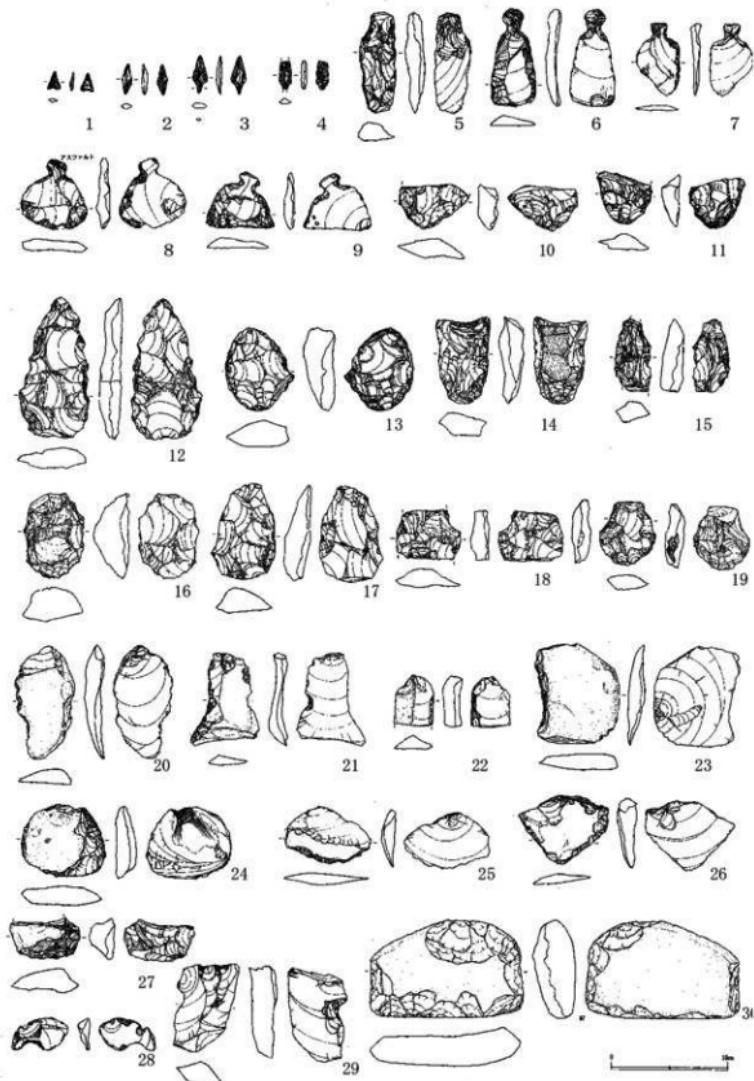
1 遺跡の類型

遺跡を構成し、また特徴付ける遺構は、原石採掘坑と石器集中部である。この二種の遺構はそれぞれ独立的・排他的に存在するものではなく、原石の獲得から石器製作に至る石器原料消費プロセス上の前後関係に位置付けられるものである。これらは6遺跡に均質的に見られるものではなく、これまで



(桶向II遺跡) 1 石槍 2 石鎌 3 石鎚 (桶向III遺跡) 4~9 繩文土器 10~20 石槍 21~24 石鎌

第9図 出土遺物(桶向II遺跡・桶向III遺跡)



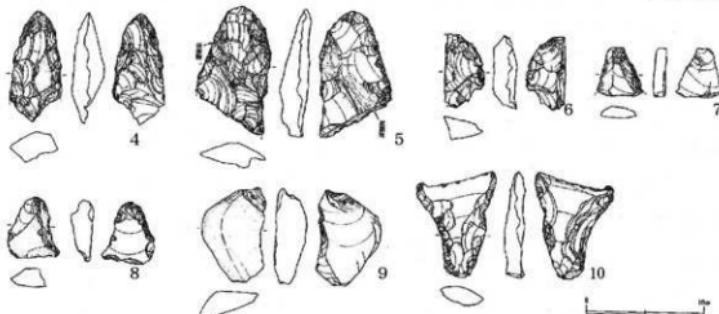
1~4 石鏃 5~9 石匙 10~13 両面加工石器 14~17・19~29 スクレイパー 18 石槍 30 半円状扁平打製石器

第10図 出土遺物（桶向III遺跡）

大沢Ⅰ遺跡



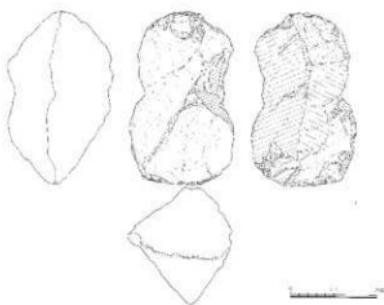
大沢Ⅱ遺跡



(大沢Ⅰ遺跡) 1～3石器

(大沢Ⅱ遺跡) 4・5石槍 6両面加工石器 7～9スクレイパー 10トランシェ様石器

第11図 出土遺物（大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡）



第12図 栃木県向山遺跡の出土遺物

で触れてきたように遺跡間で偏在する傾向にある（表1）。そこで、遺跡の性格を明確にするために、遺構の組み合わせと原料消費の観点から遺跡を類型的に捉える。

- ①A類・・・原石採掘坑と石器集中部が確認された原石採掘消費型の遺跡で、樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅱ遺跡が該当する。珪質頁岩原石を採掘し、採掘坑の周囲もしくは地形的に連続する離れた場所で原石消費（＝石器製作）が行われる。遺構数と石器残滓点数から、採掘により重きがおかれたA1類（樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅱ遺跡）と、石器製作により重きがおかれたA2類（樋向Ⅰ遺跡）に細分することができる。
- ②B類・・・石器集中部とそれに類する遺構が確認された原料消費型遺跡で、鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・大沢Ⅰ遺跡が該当する。珪質頁岩の石器原料（原石・石核・素材）が搬入され、消費（製作）される。

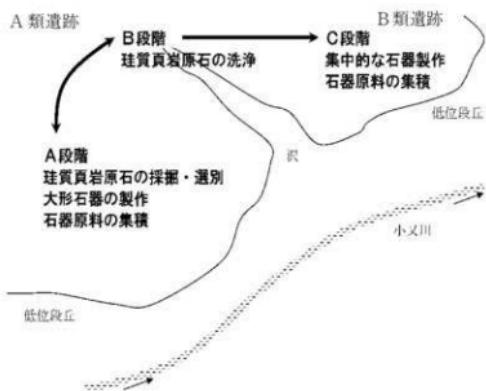
このように上岩川遺跡群では低位段丘面のいたるところで採掘活動が行われていたのではなく、採掘と石器製作が場所をたがえて行われていたことが分かる。

2 原石採掘と石器製作の空間配置

さて、遺跡類型と分布の関わりについてもう少し詳しく見てみると、一つの傾向に気づく。遺跡群を南から見るとA1類（大沢II）→B類（大沢I）→A1類（樋向III）→B類（樋向II）→A2類（樋向I）→B類（鹿渡渉II）というように、採掘地が限られていたという点に加えて、採掘地と石器製作地が、分布上交互に立ち現れているのである。このことは何を意味するのであろうか。

まず、採掘地が空間的に限定されているのは、目的とする大形・良質の原石を採掘できる場所が遺跡群中でも限られていたとすれば、そこをねらった結果かもしれない。このことを証明するには、各遺跡での産状把握、段丘礫層中に含まれる原石の遺跡間比較分析を経なければならないが、本稿ではその準備がないため、今後の課題としておきたい。ただし、採掘坑が確認されていない樋向II遺跡の立地する礫層中にも大形の原石が多く含まれておりそのことから、採掘地の選定には別の理由があったとも考えられる。

また一方で、場所をたがえて採掘と石器製作が行われていた背景には、空間をたがえる何らかの規制の存在を推測させる。その「規制」とは何であるのか。ひとつは作業プロセスと効率上の問題かもしれない。すなわち、報告者が想定したように^(註7)、原石の採掘から石器製作にいたる過程を三段階で捉えると、採掘（A段階）と石器製作（C段階）の間に、原石の洗浄（B段階）が当然介在すると思定される。この洗浄は各遺跡間にある沢が利用されたのであろう。高度に専門化・システム化した共同作業プロセスでは、いわゆる「流れ作業」として、作業内容と作業場所が1:1の関係を保持しつつ動線が錯綜しないように空間配置されると考えられる^(註8)。採掘された原石を沢地で洗浄し、製作場所へと持ち込むといった一連の作業プロセスが上述のような遺跡群における遺跡差に反映しているのではないだろうか（第13図）。その過程で原石の質を確認するための剥離が隨時行われ^(註9)、選別・集積がなされたのであろう。



第13図 上岩川遺跡群の空間配置模式図

以上は作業仮説の域を出ず、今後資料に基づいたさらなる分析が必要であることはいうまでもない。この点については最後にもう一度触れるとして、つぎに、各論として原石採掘坑と出土石器について改めて見ていただきたい。

3 原石採掘坑の諸類型

本遺跡群を特徴付ける原石採掘坑は、どれも深さ1~2m程度で段丘礫層（報告書中の「破碎泥岩ブロック層」）にまで到達しており、明らかに当該層中の珪質頁岩原石を目的とした採掘坑であることが分かる。これまでに見てきたように、形態上、以下のように類型化して把握することができる。

- ①土坑型・・・不整形で明確な立ち上がりを持つものと、なだらかな壁面を持つものがある。樋向III遺跡のSKD6・15・20、大沢II遺跡のSKD5が本類型に相当する。
- ②連結土坑型・・・樋向I遺跡のSKD11の1基のみであり、土坑型の発展形と捉えられるが、

特徴的であるため本稿では独立した一類型とする。

③溝型・・・幅1~2mほどの溝状の採掘坑で、桶向Ⅲ遺跡のSKD7・17、大沢Ⅱ遺跡のSKD2・7が相当する。

土坑型・溝型が各々4基、連結土坑型が1基の合計9基が原石採掘坑として確認された。このうち溝型は採掘坑としてはきわめて特殊な形態であり、本遺跡群以外の採掘遺跡での類例は、国内において今のところないのではないだろうか。溝状となる成因としては、地表下1mと比較的浅い原石包含層に到達後、その包含層を横方向に追いかけるように掘削した結果と考えられる。目的とする層がより深ければ、例えば長野県鷹山遺跡群星賀峰第01号採掘址（明治大学鷹山遺跡群調査団1999）にみられるように底面付近での狸掘りの形態を示すのだろう。

以上の形態差が何に起因するのかは今のところ明らかにできないが、原石を追うように掘削された溝型に見られるような行動形態は、より原石が多く包含された個所に当たったため発現したかもしれない。もしくは、堀削労力削減のために自然の沢地形を利用したのだろうか。また、連結土坑型は集中的な採掘行為の累積的結果を示している。

4 製品から見た石器製作の実体

1 目的製作物は何か

そもそも本遺跡群で採掘する目的は何であるのか。同質の頁岩であれば眼下を流れる小又川でも容易に採取できる^(注10)。にもかかわらず低位段丘を1m掘削する理由は、より大形の原石の獲得にあつたと推測される。小又川で採取でき、かつ石器製作に適している珪質頁岩は大きくても直径20cm、一般的には直径15cm以下の亜円礫である。採掘坑底面や段丘疊層中で観察された珪質頁岩原石は人頭大のものから、大きければ一抱え分はある亜円～亜角礫まである。すなわち、光沢質であることによると加え、大形であることが採掘に対する動機づけの一つと考えて間違いないだろう。

それではなぜ、大形原石が必要とされたのであろうか。珪質頁岩製の出土石器を今一度みてみると、製品としては石槍20点・石籠6点・両面加工石器8点・石鏃14点・石匙6点・スクレイバー48点等がある。このうち、大形原石が必要で、かつ、接合資料などから明らかに遺跡内で製作されているものには石槍と石籠、両面加工石器がある。とくに石槍は20点と最多であるにも関わらず、すべて未製品、製作途上の失敗品である。このことは、本遺跡群では石槍製作が主目的とされ、完成品は遺跡外へと搬出されたことを物語っている。とくに採掘坑のある桶向Ⅰ・桶向Ⅲ・大沢Ⅱ遺跡で石槍・両面加工石器がまとまる傾向にあることが指摘できる（表1）。採掘坑周辺での大形製品の製作が、採掘から連続的に遂行されていたことを示すものである。

さらに、残滓類に目を向けると、僅かながら石刃核と石刃が組成されているのに気付く。これは筆者が別稿で述べたところではあるが（吉川2009）、石槍製作に加えて石刃生産もあわせて行われていたことを示している。石刃核を準備するには大形の原石が必要となる。さらに剥離にあたって一定の技術力が要求される石刃は、石槍とあわせて本遺跡群での主要な生産品となつたのであろう^(注11)。

以上のように、本遺跡群での主要な目的製作物は石槍や石籠、両面加工石器、石刃であったと考えられる。これらを製作するためには大形・良質の原石入手が必要であり、河原での採取よりも採掘の必要性があったと理解できる。

2 その他の製作物にみる原料管理の一侧面

さて、それではその他の大多数を占める小形剥片石器はどう評価できようか。採掘・製作活動に携わった人々の携行品として遺跡内に持ち込まれた場合も当然あったであろう。しかし、第8図8・9などの石鏃未製品と考えられるものもあることから^(注12)、第二義的であるにせよ、小形剥片石器の製作も行われていたと推測される。

ここで注意しておきたいのは、製品の点数上、最も多くを占めるスクレイバーである。個々の遺跡概要を述べる際に触ってきたが、スクレイバーには礫面付着剥片を素材としたものが顕著にある。

一方、残滓に目を向けると 130,210 点の剥片中には礫面の付着しない良質なものが豊富にある。にもかかわらず、スクレイパーには礫面付着剥片が意図的選ばれているかのようである。そうしたスクレイパーは面的な加工が施されず、簡単な刃付けのみである場合が多い。まさしく「便宜的な石器」(Binford 1977) といった観がある。一方、石鎚や石匙などの小形剥片石器には礫面付着は認められない。

ここに、剥片には礫面付きと礫面なしの二種があり、前者は臨機的な使用に供されるスクレイパー類と強く結びついていることが指摘でき、石鎚や石匙の素材選択には礫面が付着しないという要件があったであろうことをうかがわせる。言い換えれば、素材選択の面から石鎚・石匙はより管理的な、スクレイパーはより便宜的な石器であり、膨大な点数に及ぶ剥片 1 点 1 点にしても、石器素材として管理されていた姿を読み取ることができるのである。

一般的に剥片は残滓類として扱われる。しかし、本遺跡群では、臨機的な石器製作において礫面の付着しない剥片は選択されない傾向にあることから、そのような剥片は残滓ではなく、原石と同じく石器原料として管理が徹底化されていたといえるのではないだろうか。管理下におかれた石器製作地にある石器集中部は、遺棄された残滓のまとまりではなく、限りなく「アボ」(田中 2001) に近い性格を持っていたのかもしれない。とすれば、当時の集団は採掘以外にも、原石や石核、素材剥片などの原料を探りにくる目的で当該地を度々訪れた可能性も生じよう。先にみた桶向 II 遺跡の S X 2 も「アボ遺構」である可能性もある。

5 採掘と流通を担った人々

1 組織的な採掘活動と管理

上岩川遺跡群で展開した採掘・石器製作活動ははたしてどのような人々によって担われたのであろうか。縄文時代の石器原料採掘について先行研究がなされている関東・中部地方の黒曜石の事例をみてみると、たとえば、大工原農は、黒曜石石器群の詳細な分析を通して、原産地 - 中継地 - 集落間の組織的開発・流通を説き、前期中葉～中期初頭を一つの画期とし(大工原 2002)、さらに、その画期に「交易者集団」の存在を想定した。また、池谷信之は神津島産黒曜石と中部高地産黒曜石の開発・流通を連動的に捉えて論じた(池谷 2005)。そのなかで神津島産黒曜石の陸揚げ地である見高段間遺跡の成立がやはり前期末～中期初頭とされている。そして、そうした石器資源開発には特定の集団の従事が想定された。

これらの研究を参照軸にして上岩川遺跡群について検討すると、まず、時期については、出土土器や石器形態から、前期から中期が活動の中心だったと考えられる。とくに本遺跡群の特徴をなす大形の石槍は前期の特徴的な器種である。前期は「縄文海進」で知られるように急激な気候の温暖化とともに定住生活の安定期に入った時期と考えられる。定住化は地域社会を形成し、その周辺の環境資源の開発に伴う分業化も促進したと推測される。上岩川遺跡群の所在する地域にも、柏木岱 II 遺跡(秋田県教委 2009) や出羽丘陵を挟んで西側の河岸段丘上に立地する孤森遺跡(秋田県教委 2004)、兵ヶ沢遺跡(秋田県教委 2000) などで確認されたように、複数の前期集落が営まれるようになる。地域社会の形成・確立ともいえる当該期では、良質な珪質頁岩原産地は地域で管理すべき資源領域だったのではないだろうか。石器資源が「財」となり得ることは先の黒曜石に関する研究で明らかであるし、珪質頁岩についても佐藤広史や会田容弘の石刀生産・流通に関する研究があり(佐藤 1988、会田 2000)、秦昭繁も言及するところである(秦 2009a)。また、フリント鉱山と石刀・石斧流通に関するヨーロッパ新石器時代の事例も知られるところである^{〔注13〕}。

つまり、縄文時代前期において、地域社会を構成する各集落が共同で珪質頁岩原産地を管理・採掘し、石槍などの製品を作成したような組織的資源共同開発体制が現出したと考えられる。まして、どこでも採取できる珪質頁岩ではなく、光沢をもった大形原石の産地となれば、それを生活領域に取り込む地域社会での管理が当然あったものと推察されよう。よって、上岩川産珪質頁岩原石やそれを原料として生産された石槍等は、自家消費分ではなく、流通品目として位置付けられたものと考えたい。

それゆえに、剥片一つにいたるまで管理が徹底していたといえる。

本遺跡群で採掘される原石のなかで特徴的な玉髓質の珪質頁岩は、硬質で節理も比較的多いため、石器製作の面からは適しているとは言い難い。にもかかわらず、当該地で採掘がなされたのは、やはりその光沢を放つ見た目の美しさであろう^(註14)。それがある種の「上岩川ブランド」となった可能性がある。また、「ブランド」の価値には、石質そのもののほかに、それに付与された石器製作の技術力も想定される。すなわち、上述の石槍や石刃の生産に行使された技術力等も流通価値の対象とされていた可能性がある。それでは、こうしたブランド品はいったいどの範囲まで流通したのであろうか。

2 流通に関する予察

流通の範囲を特定するには幾多の課題を克服しなければならない。そのうち、もっとも重要な課題は原産地推定法の開発であろう。近年、秦昭繁の注目すべき試みがあるが（秦2009b）、黒曜石と違つてまだ客観的な分析方法が確立していない珪質頁岩で流通論に言及するのは限界がある。しかし、それで何も言えないとなれば研究の停滞を招くだけである。他の考古学的手法（肉眼分析による产地推定を含む）を用いて少しでも流通論に近づく努力が必要と考える。ここでは、筆者の力量不足により十分な検討はできないが、流通に関して若干の予察を述べてみたい。

上岩川遺跡群は出羽丘陵東側の低位段丘面に立地するが、丘陵を超えて西側の日本海に面する河岸・海岸段丘上には前述したように円筒下層式期の集落跡である狐森遺跡や兵ヶ沢遺跡がある(第14図)。これらの遺跡で構成された地域内における探査・分配・流通を想定することがまずはできよう(吉川2008)。それでは地域外とのつながりはあるのだろうか。

これらの遺跡群がまとまる領域は出羽丘陵北端域に属する。この出羽丘陵の北には米代川河口域が広がる。本稿では米代川上流のいわゆる内陸部に位置する大規模な集落跡として著名な大館市池内遺跡（秋田県教委 1997・1999）を見てみたい。

池内遺跡は円筒下層式を中心とする前期後半の集落跡で、堅穴住居跡79軒、貯蔵穴171基のほか、土坑墓が44基検出されている（第15図）。小林克はこの土坑墓群を、分布状況と副葬品として出土した石鏃・石槍などの石器類によって2群3細分し、狩猟集團差を見出した（小林1998、同2008）。これら石鏃を中心とした石器副葬品はどれも精巧な作りで欠損しておらず、実用品というよりは、副

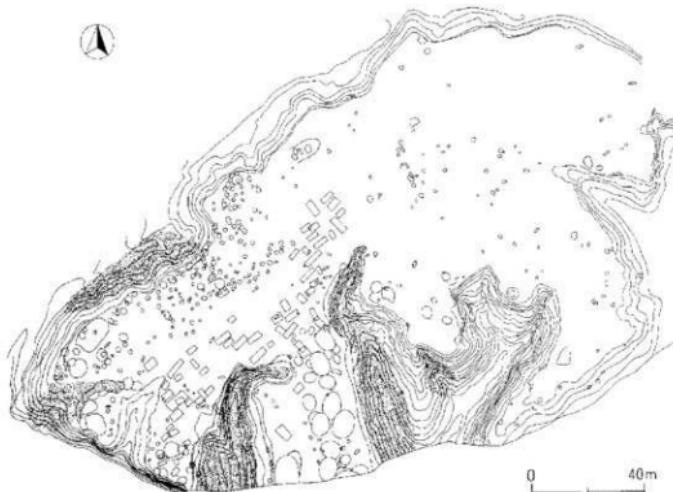


第14図 上岩川遺跡群と周辺の前期集落

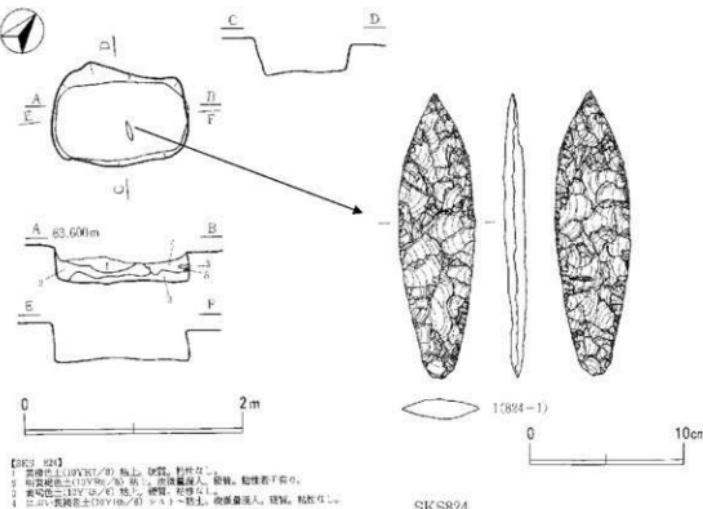
葬るために製作されたかのような観がある。このうち、石棺に注目したい（第16図）。石質は光沢をもたないが珪化が進んだ良質のもので、薄手・大形に仕上げられており、丁寧な作りである。安斎正人はこのような石棺を威信財として位置付けている（安斎2007）。

ところで、池内遺跡では、河口から70km遡った内陸部であるにも関わらず、海棲魚類の骨がまとまって出土した。さらには、男鹿産を中心とした黒曜石製石器もまとめて認められる。これについては別稿で触れたが、機能部が作り出されていない非実用的な石器として遺跡内に持ち込まれたようだ。

ある（吉川 2008）。これら魚類や男鹿産黒曜石といった海浜資源は直接入手されたというより、間接的な入手、おそらくは交易などにより得られたものと理解するのが当該期にあっては自然であろう。



第15図 縄文時代の池内遺跡遺構配置図（秋田県教委 1999）



第16図 第824号土坑墓と出土遺物（秋田県教委 1997に一部加筆）

とすれば、このような沿岸域集団との交易品目に、上記資源のほかに沿岸域の女川層を由来とする良質な大形珪質頁岩（製石器）も含まれていたとは考えられないだろうか。

内陸部でも、小形剥片石器製作に供される珪質頁岩原石は、米代川流域とその支流で勿論入手可能ではある。しかし、上岩川遺跡群で見たような良質かつ大形の珪質頁岩原石が採取できる場所は今のところ知られておらず、表層地質として女川層が縱走する沿岸域に限られている。よって、内陸部の大形・良質の珪質頁岩は沿岸域から持ち込まれた可能性もあり、今後の検討課題である（図15）。

ただし、本稿では上岩川遺跡群と池内遺跡を直接結びつけることを意図しているではなく、集落遺跡出土の石器には、たとえそれが珪質頁岩製であっても、集落内での製作品のほかに流通物資としての搬入品の存在をも視野に入れた石器群分析が必要であることを指摘するにとどめたい。これからの中格的な石材調査に負うところが大きいことは言うまでもないが、原産地遺跡の探索、集落遺跡、墓域などの出土石器の詳細な検討と議論を今後、進めることによって、本県における縄文時代人と石器石材資源の関わり、地域社会と流通について新たな展望が開けると確信する。

6 まとめ

小稿では、珪質頁岩採掘址群である上岩川遺跡群を対象として、冒頭で示したように主に二つの目的について論じた。一つは上岩川遺跡群の6遺跡の構成とそれらの関わりである。二つ目は採掘活動や石器製作の実態と採掘目的についてである。一つ目に関しては、まず、良質な原石を段丘疊層から得るための採掘地と、それらの原石を原料として集中的に製作が行われた石器製作地が空間的に区別され、作業プロセスに沿った空間配置が採られていたことが遺跡間の比較により予測された。そのなかでも遺跡群の中央に位置する傾向Ⅲ遺跡が内容・規模の両面から中心的だったと考えられる。二つ目に関しては、大形・良質の珪質頁岩原石採掘の主目的として石槍・両面加工石器・石鎧の製作が考えられた。さらに採掘地は地域社会における共同管理がなされていたことが想定され、「共有財」として原石から剥片一つにいたるまでの管理の徹底化を読み取ることができた。流通についても言及したが、この点に関しては、集落遺跡等の石器群分析を上記のような原産地との観点から進めねばならず、今後の検討課題として提示した。

珪質頁岩採掘址群として正式に報告されたのは本遺跡群が初例であるが、今後、他地域でも新たに発見される可能性は大いにある。否、もしかすると珪質頁岩は河原で採取されるものではなく、露頭からの抜取りや採掘が常態だったのかもしれない（田村2005）。いずれにせよ、本遺跡群の発見により、列島の三大石材環境を作り出した黒曜石・サヌカイト・珪質頁岩すべてに対する採掘遺跡が出揃うことになる。東北地方での珪質頁岩の石材調査はこれまで秦昭繁一人に負うところが大きかった。筆者も秋田県内での踏査を進めているが、未だその成果を報告するに至っていない。石器研究者は一丸となって各地において丹念な石材調査を継続的に進め、公に報告していく必要があることを実感する。本遺跡群についても未だ岩体が明らかになっておらず、玉髓質を含む珪質頁岩の生成過程や段丘形成の具体的なメカニズム解明も今後の課題である。

東北地方に住む今の我々から見れば、珪質頁岩はさして物珍しくない石材である。しかし、それは我々が石器の作り手ではないからである。言い換えれば、石材環境を見誤っている可能性がある。旧石器時代や縄文時代の人々にとって、生活を支える重要な資源としての珪質頁岩はより吟味されたものだったろう。当時の石器製作集団が、社会の要請に応じてより良い質の原石を求めた結果が採掘活動だったといえる。採掘行為が単なる現実的・機能的要請に基づいたものであるのか、地域社会の紐帯維持のための「協働作業」としての役割も担ったのかは、後期旧石器時代から縄文時代全般にわたって、まずは同一石材環境下での通史的な検討を進めたうえで解決の糸口が見出されるだろう。いずれにせよ、「珪質頁岩」と一括される中には、様々なレベルの価値が付与されていた可能性を指摘しておきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、次の諸市から多くのご教示をいただきました。末筆ですが、記して感謝いたします。

利部修氏、国武貞克氏、小林克氏、榮一郎氏、櫻田隆氏、勅使河原彰氏、秦昭繁氏、柳田俊雄氏

【註】

- 註1) 道構略号については、報告書にあわせて石器集中部をS X Q、原石採掘坑をS K D、土坑をS K、土器埋設遺構S R、溝をS Dとする。
- 註2) なお、ここでいう「石器集中部」とはとくに石器が密集して出土した範囲を発掘調査中、単位的に捉えたものである。石器集中部周辺を含む調査区内地には分布の粗密はあれ、一面から石器は出土している。
- 註3) 報告者の利部修は原石の採掘から石器製作に至る過程を「原石採掘（A段階）→原石被覆土除去・洗浄（B段階）→石器製作（C段階）」の3段階で整理している。B段階は考古資料的には説明困難な場合が多いが、石器製作の準備段階として当然あり得べき段階であろう。また、B・C段階間に「原石の選別」があったものと考える。さらに「集積」が各段階の作業の区切りで行われたであろう。
- 註4) 幕山遺跡群（前掲）や向山遺跡（新木県立博物館2007）からは打製石斧が出土しており、採掘具の可能性が考えられている。採掘具に関してはGrime's Gravesで鹿角製のピックが出土している（Mercer 1981, Green 1993）。
- 註5) 報告書ではA基とも掘り込みが浅いため「性格不明遺構（略号：S X）」としているが、ここでは土坑とする。
- 註6) 刃片の打面部の観察からはリップやバブルが発達せず、打点も明瞭でない傾向が指摘でき、ソフトハンマーによる剥片剥離作業を推測させる。
- 註7) 註3参照。
- 註8) 例えば、時代は大きくなるが、三種町小林遺跡（秋田県教委2004）や由利本荘市堤沢山遺跡（秋田県教委2008）など古代の製鉄・鍛冶作業が行われた遺跡では、作業内容に即した計画的な空間配置が現出されている。
- 註9) 本遺跡群からは原石の中身を確認するために剥離が行われた。いわゆる「一発コア」がまとまって出土している。それらは石器組成上、原石に分類してある。
- 註10) 現在と当時とでは河川における礫の分布状態が同じであったかどうかは、地形・地質学的観点から検討の余地がある。
- 註11) 縄文時代中期の東北地方南部で展開した石刃の流通にあたっては佐藤広史や会田容弘の論考がある（佐藤1988、会田2000）。石刃が特定道路で生産されるか否かは、集落遺跡の詳細な分析が今後必要である。
- 註12) 第8図8は報告書中では石砲に分類されているが、法量・形態・素材選択性および先端部の加工が基部作出ではなく、尖頭部作成のためと考えられるため、ここでは石臘未製品と判断した。
- 註13) ブラッドリーはイギリスの新石器時代におけるフリンント鉈と“axes trade”、地域社会について言及する中で、石斧をprestige goodsとして、そうした威信財の成立条件として、交換の制限と供給のコントロールの2点を挙げている（Bradley1984）。
- 註14) 認知考古学の観点から「美」を「検出・体制化・喚起」に分類する松木武彦の論を参照すれば（松木2009）、ここでいう色彩は、「検出」にあるだろう。
- 註15) 大館市域では、米代川右岸に分布する大滝層が女川層に対比され、「縄質泥岩」が採取できるようである（秋田県農政部農地整備課1986）。池内遺跡調査担当者の櫻田隆によると、大館市内には珪質頁岩が露頭を含めて見られるらしく、池内遺跡の石器原料も地域内での入手が中心だった可能性も否めない。しかし、筆者はまだ実見しておらず、今後、踏査を進めて石質・大きさ等を確認していくなかで、内陸部における原石採掘をふくめた良質石材の入手についても言及できるかもしれない。

【参考文献】

- 会田容弘 2000 「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通—東北地方南部のありかた—」『山形考古』第6巻第4号 山形考古学会
秋田県農政部農地整備課 1986 「土地分類基本調査 大館」 秋田県
秋田県教育委員会 1997 「池内遺跡—国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—遺物編」 秋田県文化財調査報告書第268集
秋田県教育委員会 1999 「池内遺跡—国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ—遺物編」 秋田県文化財調査報告書第282集
秋田県教育委員会 2000 「兵ヶ沢遺跡—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—」 秋田県文化財調査報告書第296集
秋田県教育委員会 2004 「孤森遺跡—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXI—」 秋田県文化財調査報告書第378集
秋田県教育委員会 2004 「小林遺跡Ⅱ 平安時代・中世編—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財 発掘調査報告書XXIX—」 秋田県文化財調査報告書第376集
秋田県教育委員会 2008 「堤沢山遺跡—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXVII—」 秋田県文化財調査報告書第430集
秋田県教育委員会 2008 「鹿渡波Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡—高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—」 秋田県文化財調査報告書 第436集
秋田県教育委員会 2008 「柏木岱Ⅱ遺跡—高速交通関連道路整備事業県道琴丘庄上小阿仁線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

- 一） 秋田県文化財調査報告書第442集
安斎正人 2007 「円筒下層式土器期の社会—縄紋時代の退役狩猟者層—」 『縄紋時代の社会考古学』 安斎正人・高橋龍三
郎編 同成社 27-58頁
- 池谷信之 2005 「シリーズ遺跡を学ぶ04 黒潮を渡った黒曜石 見高段間遺跡」 新泉社
- 小林克 1998 「縄紋社会における「祭祀」の一構造」 『季刊考古学』 第64号 70-76頁
- 小林克 2003 「森吉山麓縄紋社会の狩猟儀礼—マタギ文化の源流—」 『季刊東北学』 第15号 東北芸術工科大学東北文化研究センター 94-110頁
- 佐藤広史ほか 1988 「石器の考察」 『大柴川・小柴川遺跡』 宮城県教育委員会 480-494頁
- 木村等・芹澤清八 2007 「向山チャート原産地のあり方と流通」 『第5回岩宿フォーラム シンポジウム石器石材Ⅱ予稿集』 岩宿博物館 12-13頁
- 田中英司 2001 「日本先史時代におけるデボの研究」 千葉大学考古学研究叢書1
- 田村隆 2005 「この石はどこからきたか—関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて—」 『考古学』 III 安斎正人編 1-72頁
- 柳本県立博物館 2007 「とちぎ石ものがたり－人と石の文化史－」
- 秦昭第 1998 「珪質頁岩とその分布」 『考古学ジャーナル』 No.432 ニューサイエンス社 31-35頁
- 秦昭第 2001 「考古学における珪質頁岩の石材環境と産地推定」 『山形応用地質』 第21号 1-8頁
- 秦昭第 2003 「東北地方の珪質頁岩石材環境」 『考古学ジャーナル』 No.499 ニューサイエンス社 8-11頁
- 秦昭第 2009a 「やまがたの前期縄文石器と地域間交流」 『じょうもん天地人—やまがた前期縄文化の考古学—』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 115-120頁
- 秦昭第 2009b 「山形県の珪質頁岩石材環境」 『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』 日本考古学協会 63-70頁
- 松木武彦 2009 「進化考古学の大冒険」 新潮選書
- 明治大学鷹山遺跡群調査団 1999 「長野県鷹山黒曜石原産地遺跡群の研究—1995・96・97・98年度にわたる鷹山黒曜石採掘址群調査の記録— 平成8~10年度科学研究費補助金(基礎研究(A)(2))研究成果報告書」
- 森崎秀一 2009 「柳本市向山遺跡出土のタガネ状石器について」 『柳本県立博物館研究紀要一人文一』 第26号 柳本県立博物館 11-24頁
- 吉川耕太郎 2007 「秋田県域における縄文時代の黒曜石利用と縄文海進」 『第3回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集』 加速器分析研究所 80-82頁
- 吉川耕太郎 2008 「東北日本における石材資源の獲得と消費」 『考古学ジャーナル』 No.575 ニューサイエンス社 23-27頁
- 吉川耕太郎 2009 「上岩川遺跡群からみた縄文時代の石刃生産とその運用に関する予察」 『秋田考古学』 第53号 秋田考古学協会 1-14頁
- Binford, L. R. 1977 Forty-seven trips. In Stone Tools as Cultural Makers, ed R. S. V. Wright, pp. 24-36. Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra.
- Bradley, Richard. 1984 The Social Foundations of Prehistoric Britain: themes and variations in the archaeology of power. Longman archaeological series, LONGMAN
- Green, Barbara. 1993 Grime's Graves, English Heritage, London
- Mercer, R. 1981 Grimes Graves, Norfolk. Excavations 1971-2. Vol.1. HMSO. Department of the Environment Archaeological Reports11, London

横手盆地における払田柵成立前の古代集落跡

-大仙市諸又遺跡の事例を端緒として-

高橋 学*

はじめに

横手盆地北部・大仙市払田・仙北郡美郷町本堂城回に所在する払田柵跡は、9世紀初頭（801年頃）に成立した城柵官衙遺跡である。秋田県では1974年より現地に調査事務所を設置して、継続的に学術調査を実施している。また、柵跡内の調査と並行して横手盆地内の市町教育委員会と連携をとり、払田柵跡に関連する古代遺跡の情報収集、すなわち聞き取り調査から踏査・試掘・内容確認調査も実施するに至っている。このような一連の行動を通して、払田柵跡及び関連する遺跡の情報が蓄積されつつある。

小稿で取り上げる払田柵成立前の古代集落¹⁾ここでは7～8世紀代とするに着目すれば、当該期集落跡の分布は、盆地中央部の横手市雄物川町・平鹿町域には限定されるのである¹⁾。単発的に概期の遺物が出土する遺跡は盆地内に点在するものの、その数はきわめて限定的であり、北部にあたる古代山本郡域（現在の仙北市・大仙市・美郷町）での集落跡は未確認であった。

ところが、大仙市四ツ屋東部地区で実施が予定されていた県営は場整備事業地内から2003年に発見された遺跡は、8世紀後半に中心をおく集落跡であることが明らかとなったのである。

遺跡は、大仙市（旧大曲市）高闘上郷字諸亦に所在し諸又遺跡（略記号：7MM）として登録された。同遺跡は、2003年6月に大曲市教育委員会を調査主体とする調査が実施され、報告が県に提出されている²⁾。小稿では払田柵成立前の古代山本郡域の集落跡である諸又遺跡に着目し、横手盆地内における集落分布の様相や払田柵との関連についても考察を加えることにしたものである³⁾。

1 調査の概要

（1）立地と周辺遺跡の様相

諸又遺跡は、横手盆地北側の仙北平野西部に位置し、大仙市大曲市街地の北東側、JR田沢湖線北大曲駅の南東約250mに所在する。遺跡地周辺は地形区分⁴⁾では、横手低地とされる最低位の砂礫段丘面上に立地し、標高は30m程である。遺跡の南側には窪堰川が南西方向に流れ下り、雄物川の支流である丸子川に合流する。丸子川は払田柵跡の南を西に向かって流れている河川である。なお、諸又遺跡は払田柵跡の北西約4.5kmに位置する。

遺跡の立地する窪堰川右岸域の砂礫段丘上には、古代の土師器・須恵器を包含する遺跡が点在する。遺跡の南側に隣接する地区内では、水田開墾時に土器3個体と太刀片が出土したとされ、上野遺跡として周知されている⁵⁾。その他の古代遺跡は、四ツ屋東部地区を対象とした県営は場整備事業に伴う踏査・試掘による新発見である（第1図①～⑤）⁶⁾。また、同河川左岸域では2008年に大仙市教育委員会による発掘調査が実施された半在家遺跡が位置する。

半在家遺跡は、大仙市高闘上郷に所在し、10世紀初頭を前後する時期の水田跡が明確な畦畔を伴い20面以上検出され、条里制を想起させる直線的な大畦畔も確認された。水田の取水源でもある河川や水路内周辺では祭祀に係る遺構（掘立柱建物跡=祭祀屋か、土坑）や遺物（人形・齊串・呪符木簡・墨書き土器・桃核等の自然遺物）も見つかり、払田柵跡との強い関連も指摘されている⁷⁾。

*秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

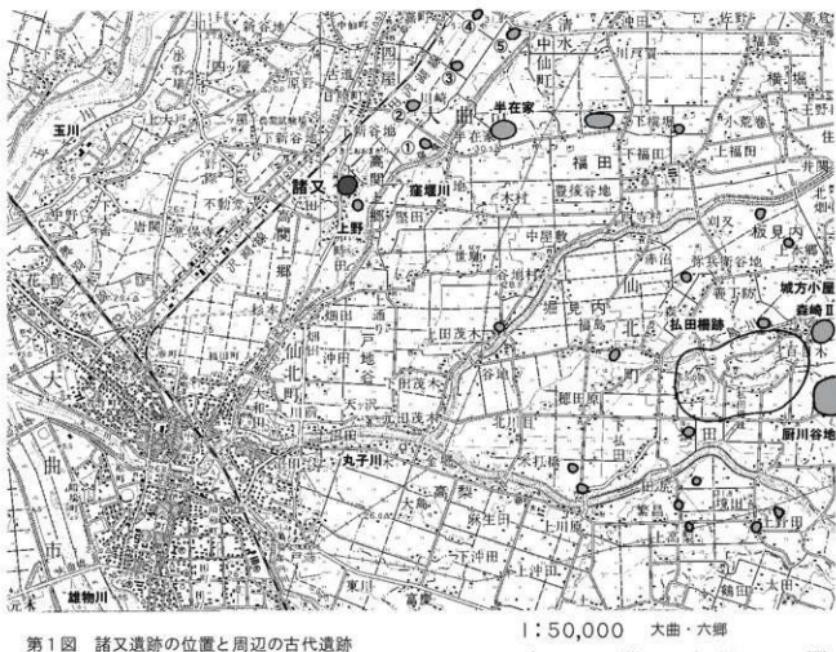
(2) 検出遺構と遺物

大曲市が秋田県に提出した報告によると、検出された遺構数は30である。種別は堅穴建物跡2棟、堅穴状遺構4基、土坑23基、溝跡2条、焼土遺構1基である（第1表）。出土遺物は、古代の土師器・須恵器、土製品（土鉢）、石製品（砥石）、鉄製品、自然遺物（骨片）、中世の須恵器系陶器、近世の陶器及び時期不明の鉄滓などがある。出土遺物からみた遺構の構築時期は、①古代、②中世以降、その他は③時期不明である。各時期毎に特徴的な遺構と出土遺物の概要を紹介する。その他については、第1・2表を参照頂きたい。

①古代

S I 25堅穴建物跡（第4図、第5・6図1～15）調査区北部で検出された東壁中央北寄りにカマドをもつ堅穴である。西壁と南壁西側のプランは不明瞭であるが、残存部から推定される規模は東西6.5m×南北5.2mである。床面上には径あるいは一辺45～70cmの柱穴が4本（P 1～4）配される。深さは28～35cmである。柱穴間の距離は、南北（P 1-4、P 2-3）で3.9m、東西（P 1-2、P 4-3）で3.4mである。壁溝はない。カマドは径65cm程の火床面と長さ150cmの煙道部が残るのみである。カマドと柱穴P 1-4間の床面上には大小の土坑が掘られている。

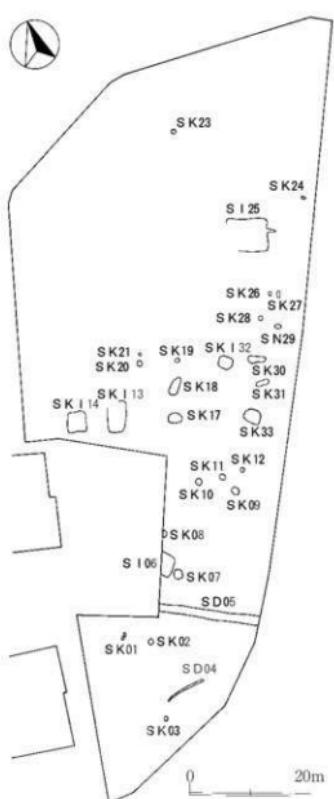
出土遺物は、須恵器壺、土師器壺・甕がある。図示したもの以外にも比較的多くの土器が出土しており、その多くは土師器甕である。第5図1は須恵器壺である。酸化炎焼成であり、胎土や色調は7に示した土師器甕のそれに酷似する。



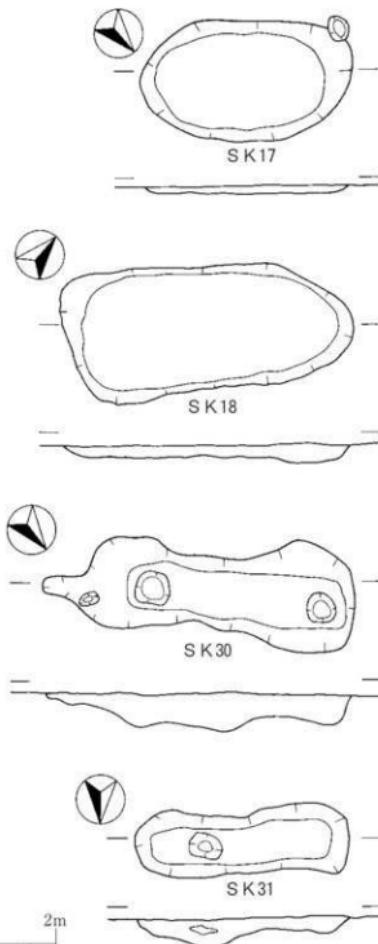
第1図 諸又遺跡の位置と周辺の古代遺跡

S 106堅穴建物跡（第4図、第6図16・17）調査区中央南側で検出された南東壁中央南寄りにカマドをもつ堅穴である。堅穴の西側は調査区外となるため、形状・規模は不明である。カマドの残存する壁面での長さは3.7mである。床面上の隅部には小土坑が掘られているが、明確な柱穴は確認されなかった。壁溝はない。カマドは長さ45cm、幅30cm程の火床面と幅28cmの溝状を呈する煙道部が残されていた。煙出し部は先行して精査されたSK07土坑により失われカマド煙道長は不明である。

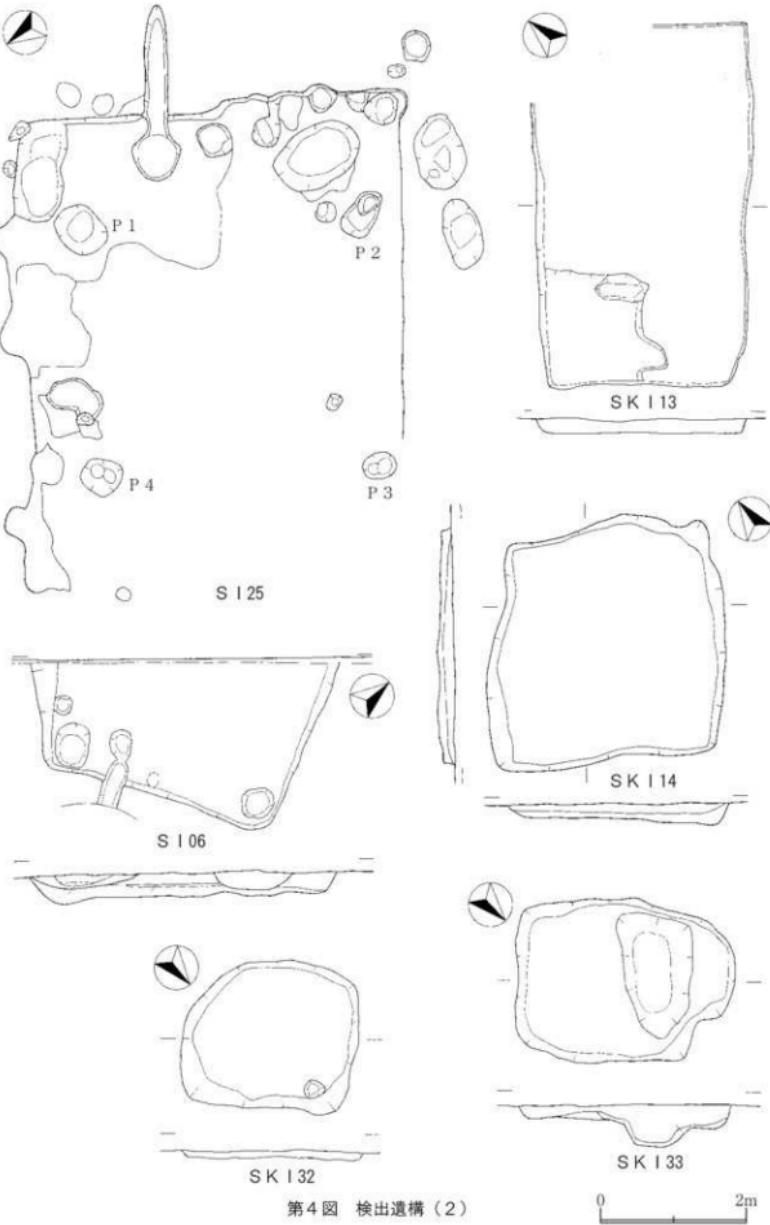
出土遺物には土師器壺（16）、甕と砥石（17）、小片ながら板状の鉄製品がある。



第2図 諸又遺跡遺構配置図



第3図 検出遺構（1）



第4図 検出遺構（2）

S K I 33堅穴状遺構（第4図）調査区中央東側で検出された。堆積土が人為的に埋め戻されていることと、出土遺物に土師器と共に長さ28cm程の棒状鉄製品（第6図23）が複数含まれる点から墓であった可能性も考えられる。

その他、古代の遺構には土坑があるが、遺構面が過去の耕地整理で削平されていること、土坑周辺の柱穴や焼土の分布等を勘案すると、これらは堅穴建物を構成する遺構と推定されるものも含まれるようである。それは**S K01・02土坑周辺**、**S K11・12土坑周辺**、**S K26～28土坑**・**S N29焼土遺構周辺**である。**S N29**は火熱を受けた硬化面として確認されたことからカマド（火床）の可能性がある。

②中世以降

S K30土坑（第3図）調査区中央北東側で検出された土坑である。出土遺物は認められないものの、長楕円形あるいは瓢箪形の形状は、中世あるいは近世において構築された「カマド状遺構」と称される遺構に類する（補註）。軸線方向は東-西を示し、煙出は東端部にあたるようである。類似の形状を示す土坑は、南側3mに位置する**S K31土坑**があり、これもカマド状遺構であった可能性がある。

中世の遺物が出土した遺構には、**S K19土坑**がある。ここでは土師器・須恵器と共に須恵器系陶器（第7図32）が1点出土している。

③時期不明

S K07土坑 調査区中央南側、**S I 06カマド煙道**と重複する形で検出された。土坑内出土遺物はないが、フラスコ状の掘り込み形状から縄文時代の構築と推定される。遺跡内からは縄文土器も採集されている。

S K18土坑（第3図）調査区中央部で検出された。軸線方向を北東-南西とする楕円状の土坑である。出土遺物には重量約1.9kgの鉄滓がある。その他の遺物はなく時期不明であり、古代あるいは中世以降と想定される。

S D05溝跡 調査区南側で検出された東西方向の溝跡である。幅は1.2m前後で、16m以上の長さで延びることが確認されているが、出土遺物はなく時期不明である。

（3）小結

調査で得られた資料を、古代に限定してまとめると次のようになる。

①遺構

確認された堅穴建物跡は2棟であるが、**S K01・02**、**S K11・12**、**S K26～28**・**S N29**周辺にも堅穴建物が存在していた可能性があり、本遺跡は数棟以上の堅穴建物と堅穴状遺構・土坑等で構成される集落跡であったことになる。**S I 25**を例にとると堅穴は、床面上には4本の主柱穴を配し、壁際の周溝（壁溝）をもたない形状であり、南東方向に長い煙道を伴うカマドをもつ。おそらく伏屋式の屋根構造をもつ建物景観に復元される。

②出土遺物（第5～7図）

古代に帰する遺物は、須恵器壺・甕、土師器壺・甕、土鉢、砥石、鉄製品がある。

出土した須恵器は遺構内に限定すれば**S I 25**出土の壺1個体（1）のみである。

土師器では遺構外出土の1個体の甕（31）を除くと壺・甕とともに非ロクロ成形・調整の製品である。壺では平底（3・28など）あるいはすわりの悪い平底（16など）であり、明確な丸底形を呈するものは未確認である。器形では、外面底部中央に形式的な段・稜・沈線を1～2条残す個体（2～4・6・18・28）が多く、それらのない個体（5・16・27）を上回る。器面調整は、内外面ともミガキを主とし、6を除き内面には黒色処理がなされる。なお、2の外面棱線下から底面にかけてはハケメ痕跡が明瞭に残されている。

第1表 諸又遺跡検出遺構一覧

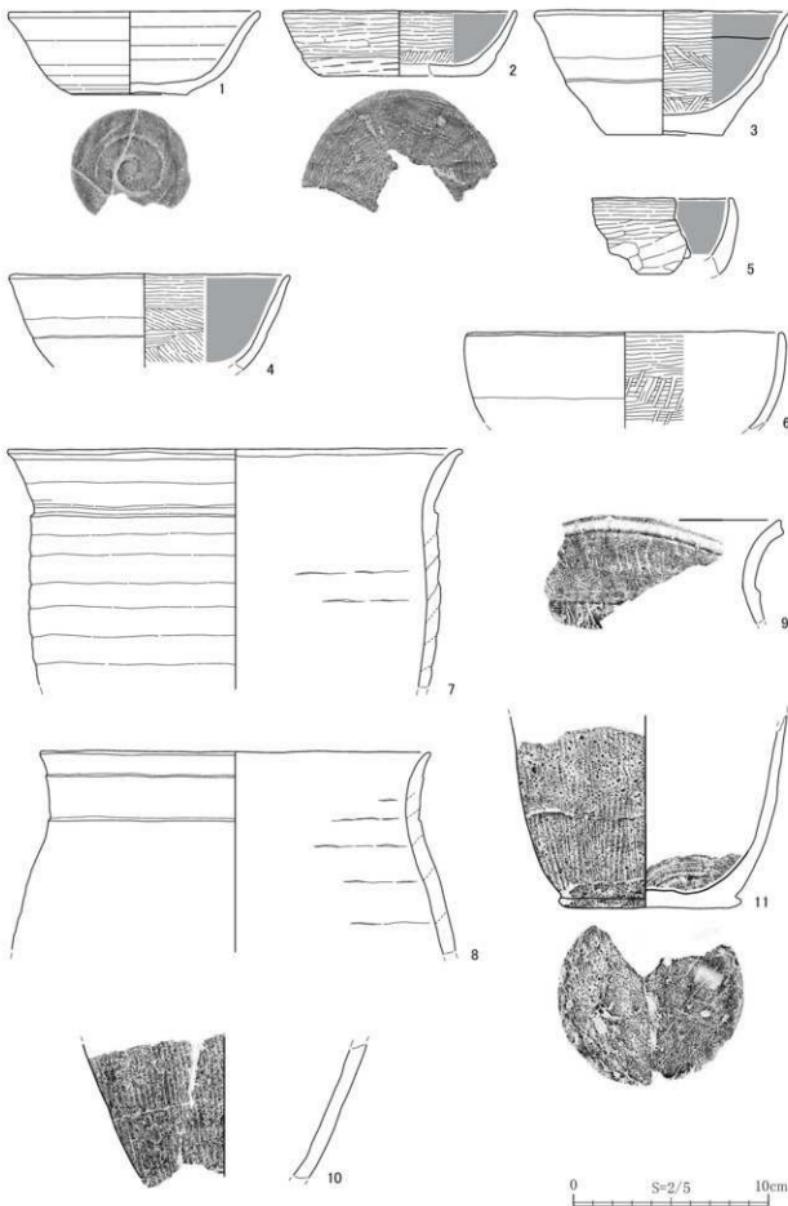
番号	種別	規模(cm)	深さ	平面形状	出土遺物	備考
S K01	土坑	55×33	30	略円形	土師器壺・甕、炭化材	周辺にも焼土・柱穴あり
S K02	土坑	80×75	33	略円形	土師器甕	周辺にも焼土・柱穴あり
S K03	土坑	55×40	27	略円形	土師器壺・甕	焼土を多く含む、人為堆積
S D04	溝跡	(680)×30	8	溝状	土師器甕	
S D05	溝跡	(1670)×120	30	溝状	—	人為堆積か
S I 06	堅穴建物跡	370×(260)	40	方形か	土師器壺・甕、砥石、鉄製品	土垣2基に切り込まれる
S K07	土坑	190×190	—	円形	なし	フラスコ状、縄文時代か
S K08	土坑	110×(80)	25	円形	なし	焼土を含む
S K09	土坑	122×115	20	円形	土師器、鉄製品	人為堆積、焼土を含む
S K10	土坑	85×85	12	円形	なし	焼土を含む、柱穴と重複
S K11	土坑	105×90	15	円形	土師器、土鈴、骨片	焼土を含む、周間に柱穴あり
S K12	土坑	68×65	15	円形	土師器	焼土を含む、坑内に柱穴あり
S K I 13	堅穴状遺構	495×300	25	長方形か	なし	
S K I 14	堅穴状遺構	330×325	30	略方形	土師器甕、焼甕	
S K17	土坑	215×125	7	楕円形	土師器甕	焼土を含む
S K18	土坑	295×135	20	楕円形	鉄津	焼土を含む
S K19	土坑	78×65	77	略円形	須恵器甕、土師器、須恵器系 陶器擂鉢	焼土を含む、円筒状に掘り込まれ ている
S K20	土坑	95×80	25	円形	なし	焼土ブロック多く含む
S K21	土坑	42×42	10	円形	なし	焼土多く含む
S K23	土坑	65×65	25	隅丸方形	土師器壺	人為堆積
S K24	土坑	65×45	22	楕円形	なし	
S I 25	堅穴建物跡	650×520	—	長方形	須恵器壺、土師器甕・壺	東壁中央北側にカマド
S K26	土坑	60×53	15	隅丸方形	土師器甕	人為堆積
S K27	土坑	95×65	15	隅丸長方形	土師器壺・甕	人為堆積
S K28	土坑	73×70	20	略円形	土師器壺・甕	人為堆積
S N29	焼土遺構	130×80	15	不整椭円形	土師器甕	カマド火床面の可能性あり
S K30	土坑	320×115	33	長楕円形	土師器甕	カマド状遺構か、焼土を含む
S K31	土坑	220×70	28	長楕円形	なし	カマド状遺構か、焼土を含む
S K I 32	堅穴状遺構	240×200	10	隅丸方形	土師器甕	焼土を含む、底面凹凸
S K I 33	堅穴状遺構	300×230	15~60	隅丸方形	土師器甕、鉄製品(棒状、鍼 状)	人為堆積、小堅穴と土坑の重複の 可能性もあり

※規模は、長さ(長軸)×幅(短軸)、()内は残存部の法量、-は記録なく不明、深さはcm

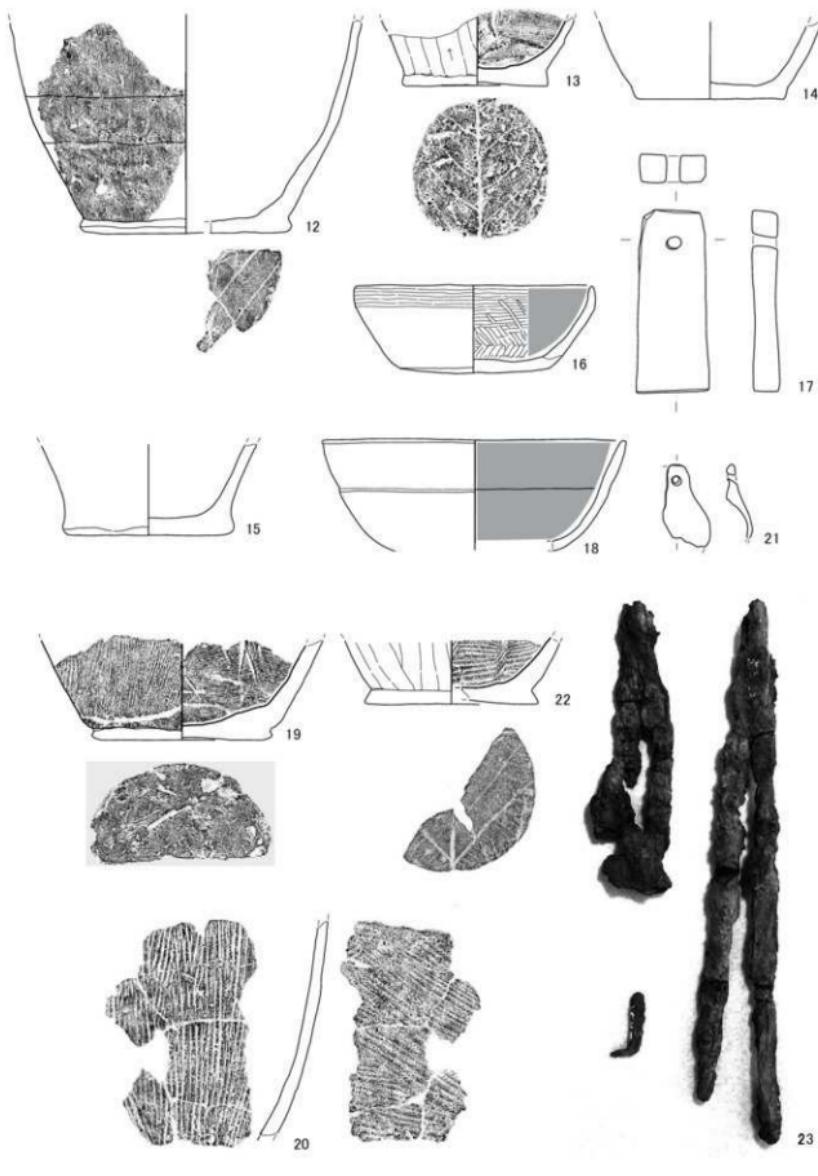
土師器甕は全体形状の明確な個体はないが、長胴形を呈していたと見られる。口縁と胴部との屈曲部には、1条の段が形成され(7~9)、口縁部は緩く外傾しながら立ち上がり端部を細く丸く收める型(7・8)と、やや強く外反させ端部を面取りする型(9)がある。底部では胴下半から底面の境界部に顯著な突出部が認められる型(22・29など)が目立ち、突出・張出しの認められない個体(14・30など)は少数である。器面調整は、外面では継位のハケメ(11・12・20など)とケズリ(7・8・22など)の別があり、内面ではハケメを主とする個体(20・24など)とハケメ後ナデ(12・14など)、ナデ(7・8・30など)が認められる。底面には木葉痕(11~13・22・29)、ケズリ(15・30)、ナデ(19など)が残されている。

③時期

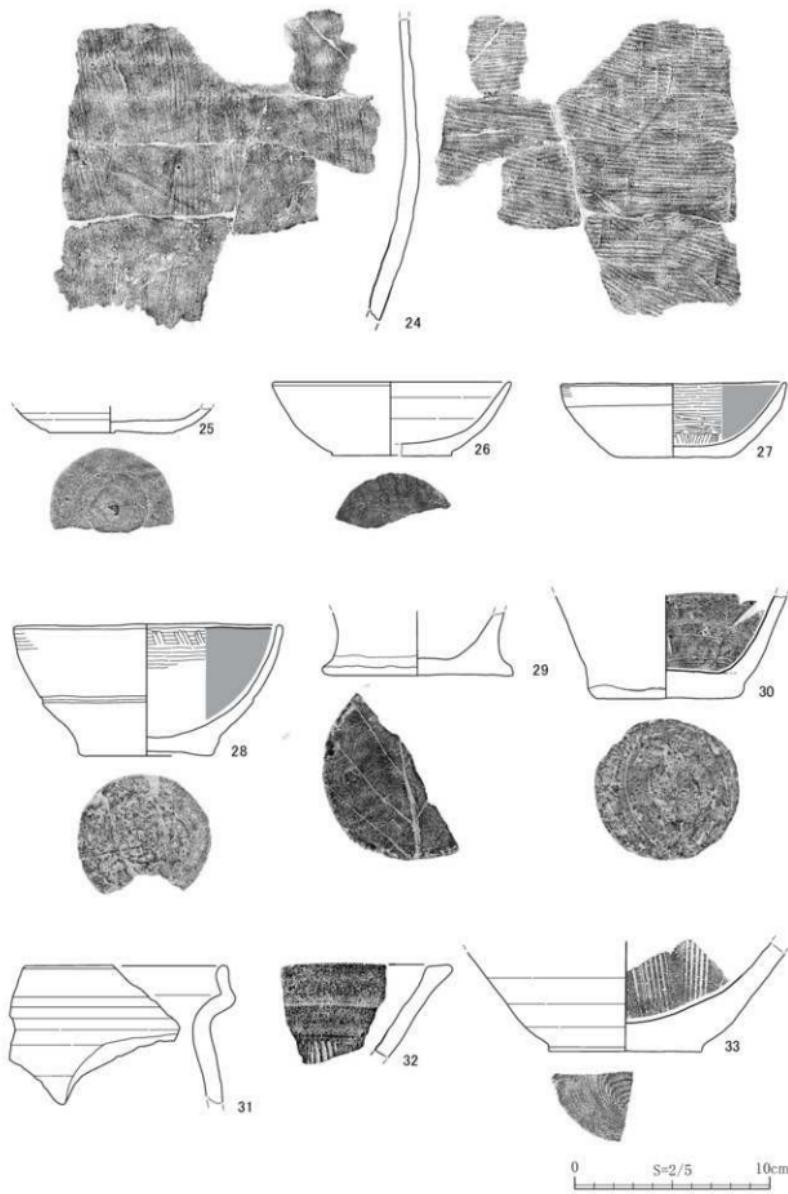
集落の存続時期は、遺構間の重複が極端に少ないと見られる。須恵器・土師器の形状・調整手法から推測すれば8世紀後半から9世紀前半の比較的限定された時間内に収まる。しかし、遺構外からは9世紀中頃以降に出現するロクロ使用で受口状の口縁形態を示す土師器長胴甕(第7図31)が出土していることから、調査区外を含めた古代集落としての下限時期は9世紀後半から10世紀代に及ぶ可能性も高い。それでも遺構内出土遺物の量比を勘案すれば、その盛期は8世紀後半代に求めることができよう。



第5図 出土遺物（1）



第6図 出土遺物（2）



第7図 出土遺物（3）

第2表 諸又遺跡出土遺物観察表

番号	出土位置	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面部調	口径	底径	器高	備考
1	S I 25	須恵器坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ 切り	橙色	12.8	5.9	4.3	酸化焼成、二次火熟
2	S I 25	土師器坏	横位ミガキ	ミガキ→黑色處理	ハケメ	黄褐色~黑色	11.9	8.0	3.3	体部中央や下に棱(沈線)、底面意図的な穿孔か
3	S I 25	土師器坏	横位ミガキ	ミガキ→黑色處理	ナデ	明褐色	13.0	6.0	6.4	体部中央に形式的な棱線。器厚あり、やや複雑な作り
4	S I 25	土師器坏	横位ミガキ	ミガキ→黑色處理	欠損	浅黄褐色	14.2	-	(4.9)	体部中央に形式的な棱線。二次火熟
5	S I 25	土師器坏	横位ミガキ ケズリか	ミガキ→黑色處理	欠損	灰黄褐色	-	-	(4.0)	小片
6	S I 25	土師器坏	横位ミガキ	ミガキ、非 内黒	欠損	明褐色	16.0	-	(4.9)	二次火熟か
7	S I 25	土師器甕	口縁部横ナ デ、胴部ケ ズリ	ヘラナデ	欠損	橙色	23.0	-	(12.3)	粘土組成物明瞭、二 次火熟
8	S I 25	土師器甕	口縁部横ナ デ、胴部ケ ズリ	ヘラナデか	欠損	浅黄褐色	20.0	-	(10.4)	粘土組成物明瞭、二 次火熟
9	S I 25	土師器甕	口縁部ハケ メ→ナデ、 胴部ハケメ か	ヘラナデ、 ハケメか	欠損	浅黄褐色	-	-	-	小片、二次火熟
10	S I 25	土師器甕	縦位ハケメ	ヘラナデ	欠損	にぶい褐 色	-	-	(6.8)	二次火熟、煤状炭化 物付着
11	S I 25	土師器甕	縦位ハケメ	ハケメ→ナ デ	木葉痕	浅黄褐色	-	8.6	(9.9)	二次火熟
12	S I 25	土師器甕	ナデ状のハ ケメ	ナデ	木葉痕	橙色	-	10.0	(10.9)	
13	S I 25	土師器甕	ケズリ	ハケメ	木葉痕	浅黄褐色	-	7.4	(3.5)	二次火熟
14	S I 25	土師器甕	剥落し不明	ハケメ→ナ デか	剥落し不 明	浅黄褐色	-	7.4	(4.0)	二次火熟著しい
15	S I 25	土師器甕	ケズリ	ナデか	ケズリ、 砂底狀	浅黄褐色	-	8.0	(4.7)	二次火熟
16	S I 06	土師器坏	横位ミガキ	ミガキ→黑色 處理	ケズリ→ ナデ	にぶい黄 褐色~黑色	12.0	7.8	4.5	
17	S I 06	砥石	-	-	-	長9.4×幅3.7×厚1.3				重量26g、墨砥石
18	S K02	土師器坏	横位ミガキ	ミガキ→黑色 處理	欠損	にぶい黄 褐色	15.4	-	(5.6)	二次火熟著しい
19	S K02	土師器甕	ハケメ	ハケメ	ナデ	にぶい黄 褐色	-	8.6	(5.1)	二次火熟
20	S K03	土師器甕	ハケメ	ハケメ	欠損	にぶい黄 褐色	-	-	(11.2)	二次火熟
21	S K11	土 筋	ナデ	-	-	浅黄褐色	長さ(4.3)、推定幅3.4			土師質、頭部に孔
22	S K28	土師器甕	ケズリ	ハケメ	木葉痕	にぶい黄 褐色	-	8.9	(3.5)	
23	S K1 33	鉄製品	右・左上: 棒状(断面方形一辺約0.7cm)、各2本接合か、右端長さ28.0cm 左下: 鏊(断面方形一辺約0.4cm) 現存長3.3cm							
24	S K28	土師器甕	ハケメ	ハケメ	欠損	浅黄褐色	-	-	(15.5)	SN29・SK30出土破片 と接合
25	遺構外	須恵器坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ 切り	明褐色	-	6.3	(1.3)	
26	遺構外	須恵器坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ 切り	明褐色	12.1	5.9	4.8	
27	遺構外	土師器坏	ナデ→ケズ リ	ミガキ→黑色 處理	ナデ(ケ ズリか)	灰黄褐色	11.4	6.0	3.8	
28	遺構外	土師器坏	ミガキ	ミガキ→黑色 處理	剥落し不 明	にぶい黄 褐色	13.4	6.7	6.7	体部中央に形式的な 棱線。二次火熟
29	遺構外	土師器甕	ケズリ	ヘラナデ	木葉痕	にぶい黄 褐色	-	9.7	(3.3)	二次火熟
30	遺構外	土師器甕	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	にぶい黄 褐色	-	7.3	(5.3)	二次火熟
31	遺構外	土師器甕	ロクロ	ロクロ	欠損	浅黄褐色	-	-	(7.2)	二次火熟
32	S K19	須恵器系 陶器植鉢	ロクロ	ロクロ→鉢 目	欠損	褐色灰色	-	-	(4.8)	小片
33	遺構外	陶器植鉢	ロクロ	ロクロ→鉢 目	回転糸切 り	にぶい橙 色	-	7.8	(5.6)	近世陶器

※口径・底径・器高はcm、() 内は残存部の法量

2 諸又遺跡の調査事例から導き出されることとは何か

限定的な調査であり、得られた情報は断片的であるものの、横手盆地北部において8世紀後半代の集落跡が発見された意義は大きい。前述のように、従来までの調査成果に基づけば、7～8世紀代の集落跡は盆地中央部に限定され、南部や北部に広がりをもつようになるのは、9世紀中頃以降である。盆地北部に払田柵が創建されるのは、9世紀初頭であることから、当該地区内に先行する集落の存在は予想はされていたものの、今まで確認できない状態だったのである。

(1) 横手盆地における7～8世紀代の集落跡・須恵器窯跡・古墳群・遺物包蔵地

横手盆地内における当該時期に営まれた集落跡は、諸又を含め15遺跡である。その他には須恵器生産遺跡3、古墳・古墳群3、遺物包含地10を挙げることができる。盆地を北部（仙北市・大仙市・仙北郡美郷町）、中央部（横手市域・旧平鹿郡）、南部（湯沢市・雄勝郡）と分けて整理すると、北部には諸又遺跡と古墳1、遺物包含地4、南部では柏原古墳群（羽後町）のみであり、他は中央部に集中する。以下、各遺跡の概要を列記する⁸⁾。①～⑩番号は、第8図の遺跡位置図番号と対応する。

【集落跡】

- ①オホン清水A遺跡（横手市塚堀）7世紀後半の堅穴建物跡1棟（S I 601）検出。北側に隣接するオホン清水B遺跡では5世紀後半の堅穴建物跡が確認されている。
- ②下藤根遺跡（横手市平鹿町中吉田）7世紀中頃の堅穴建物跡3棟検出（S I 01・07・08）。カマドをもつ堅穴としては県内で最も古い例になる。
- ③中藤根A遺跡（横手市平鹿町中吉田）下藤根遺跡の北東側に隣接して立地。7世紀中頃の土師器出土。8世紀後半の堅穴建物跡2棟検出。
- ④中清水遺跡（横手市平鹿町中吉田）8世紀後半の堅穴建物跡6棟検出。年子狐遺跡として調査され、現在は中清水遺跡として周知されている。『横手市史資料編考古』では年子狐I遺跡S I 01・02堅穴住居跡及び出土遺物として報告されている。
- ⑤上藤根I遺跡（横手市平鹿町中吉田）中清水遺跡の西側に隣接して立地。8世紀後半の堅穴建物跡1棟検出。中清水同様に年子狐遺跡として調査された経緯をもつ。『横手市史資料編考古』では年子狐I遺跡S I 07堅穴住居跡及び出土遺物（第9図38～41）として報告されている。
- ⑥釘貫遺跡（横手市雄物川町東里）7世紀後半から8世紀中頃の堅穴建物跡14棟検出。遺構群は4時期の変遷がある。最終4時期目のS I 04出土遺物は須恵器蓋、土師器坏・高坏・鉢・壺等がある（第9図1～18）。
- ⑦十三塚遺跡（横手市雄物川町東里）8世紀代の堅穴建物跡6棟検出。出土遺物には、須恵器坏・蓋と丸瓦・平瓦あり。横手盆地において古代の瓦が出土しているのは、払田柵跡と近接する美郷町厨川谷地遺跡⁹⁾・森崎II遺跡¹⁰⁾のみである（第1図参照）。
- ⑧水里遺跡（横手市雄物川町東里）分布・確認調査ではあるが、堅穴建物跡・土坑・溝跡等が検出され、堅穴内から8世紀代の土師器壺が出土している。
- ⑨八卦遺跡（横手市雄物川町沼館）8世紀代の堅穴建物跡2棟（S I 01・07）検出。S I 07出土遺物には須恵器坏、土師器坏・高坏・鉢・長胴壺・球胴壺、土錐・土製勾玉・砥石がある（第9図19～33）。本集落は9世紀代にも存続している。
- ⑩大見内遺跡（横手市雄物川町薄井）8世紀代の堅穴建物跡1棟（S I 10）検出。S I 10出土遺物は、土師器坏・椀・長胴壺・球胴壺・土製紡錘車がある（第9図34～37）。本集落は9世紀代にも存続している。
- ⑪東櫻遺跡（横手市雄物川町東里）8世紀代の堅穴建物跡を1棟（S I 301）検出。S I 301出土遺物

は、須恵器坏・蓋・壺、土師器坏・長胴甕である。本集落は9世紀代にも存続している。

⑫植向遺跡（横手市雄物川町会塚）13棟の堅穴建物跡が検出されているが、うち9棟は7世紀後半から8世紀前半と報告。他の堅穴建物跡や掘立柱建物跡は9世紀前半～中頃の構築である。

⑬足十馬場南遺跡（横手市雄物川町造山）払田柵跡調査事務所が2007年に新たに発見した8世紀代の集落遺跡。調査前段階では採集遺物は全く確認することはできなかったが、小規模な試掘調査の結果、堅穴状遺構が検出された。

⑭造山遺跡（横手市雄物川町造山）払田柵跡調査事務所が2009年に内容確認調査を実施し、8世紀後半の堅穴建物跡1棟、土坑・溝跡等が検出された。堅穴出土の須恵器には、北陸あるいは山形県沿岸部庄内地方産の可能性のある坏が含まれている。

【須恵器窯跡】

⑮竹原窯跡（横手市平鹿町上吉田内）須恵器窯跡が群集する中山丘陵の北西部に位置する。窯跡は4基検出され、8世紀中頃～9世紀後半まで継続的に操業。8世紀代の窯跡は3基である。

⑯西ヶ沢窯跡（横手市平鹿町醍醐）中山丘陵南西部に位置する。窯跡は1基であるが2時期以上の操業が想定されている。

⑰末館窯跡群（横手市雄物川町今宿・大沢）横手盆地西縁、出羽山地東端部に立地する。A地点窯跡と約500m離れたB地点窯跡からなる。A地点窯跡は8世紀第2四半期前半の操業開始を想定しており、県内では初現期の須恵器窯跡である。

【古墳・古墳群】

⑱蝦夷塚古墳群（横手市雄物川町造山）古墳17基を確認。古墳の造営時期は8世紀中頃から末頃までと想定されている。古墳出土の遺物には、土師器坏・壺、須恵器壺、太刀・小刀・鉄鎌・鉄斧・幣金具などがある。

⑲柏原古墳群（雄勝郡羽後町大久保）古墳64基を確認。造営時期は8世紀中頃から9世紀後半までと考えられている。

⑳上中村古墳（仙北郡美郷町六郷東根）古墳1基から藤手刀が出土。須恵器・土師器も出土したようであるが所在不明。古墳は河原石葺きの形態であることから、岩手県北上市江釣子古墳群との共通性が指摘されている。古墳は1896年（明治29）の六郷大地震の影響で周辺地形が変化し、現在は形跡もないといとされる。

【遺物包含地】

㉑会塚田中B遺跡（横手市雄物川町会塚）9世紀初頭～前半代の集落跡であるが、下限時期を8世紀中頃とする土師器球胴甕も出土。

㉒石塚上台遺跡（横手市雄物川町会塚）遺物包含層より7世紀後半から8世紀前半代の土師器坏・壺が出土。なお、同遺跡からは外側に19文字の墨書のある土師器皿が採集されている。

㉓首塚遺跡（横手市雄物川町今宿）8世紀代の須恵器坏類等が20個体以上採集されている。

㉔下糸畠原遺跡（横手市平鹿町下鍋倉）7～8世紀代の土師器壺1個体が採集されている。

㉕宝童堂II遺跡（横手市十文字町上鍋倉）土器焼成あるいは堅穴建物のカマドとなる可能性の高い焼土遺構内から8世紀後半の土師器壺が出土。

㉖粗半内遺跡（横手市増田町粗半内）7世紀後半と見られる須恵器台付壺と蓋が個人宅に保管されていた。現在は秋田県立博物館に所蔵。

㉗上野遺跡（大仙市高岡上郷）8世紀代（あるいはそれ以前）の土師器坏が採集。第10図1～3は、今回の報告にあわせて再実測したものである。遺物は大仙市教育委員会所蔵。

⑧八幡遺跡（美郷町六郷）払田柵跡の南西約4.5kmに位置する。9世紀後半～10世紀前半の集落跡であるが、遺構外より8世紀後半の土師器壺・甕が出土している（第10図5・6）。調査区外に概期の集落が存在していた可能性は高いであろう。

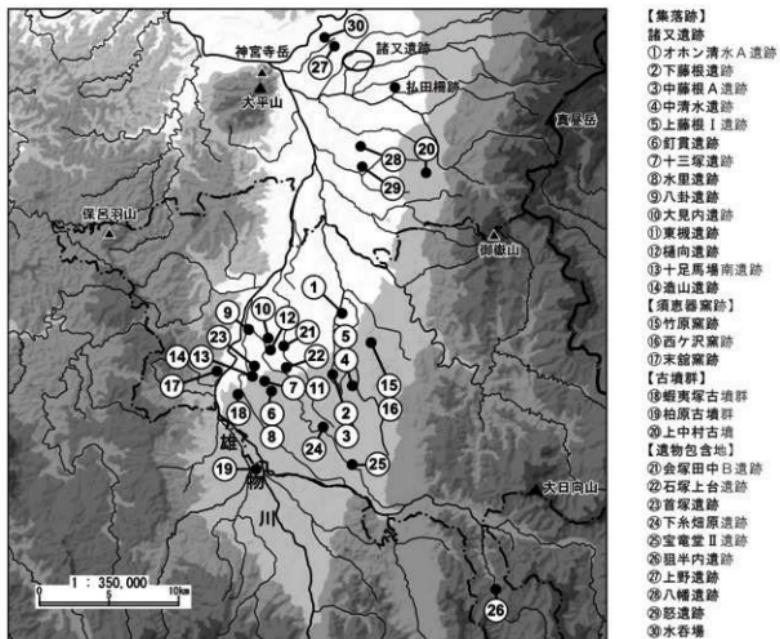
⑨怒遺跡（大仙市下深井）払田柵跡の南西約6kmに位置する。大正期に墨書き器を含む多くの土器類等が採集され、9世紀代の須恵器と共に8世紀代の非口クロ土師器壺（第10図4、底部に「足」墨書き）が1個体混在していた¹¹⁾。出土品一括は、1959年に秋田県指定有形文化財（考古資料）指定を受けている。

⑩水呑場（大仙市新谷地字水呑場）『秋田県史考古編』には、「中仙町四ツ屋長野水呑場」出土として3個体の土師器壺・高壺・甕が写真及び図示されている（第10図7～9）。ここは遺跡として周知されていないが、諸又の北西約2kmに水呑場集落があり、遺物の採集地はここ近辺と推定される。

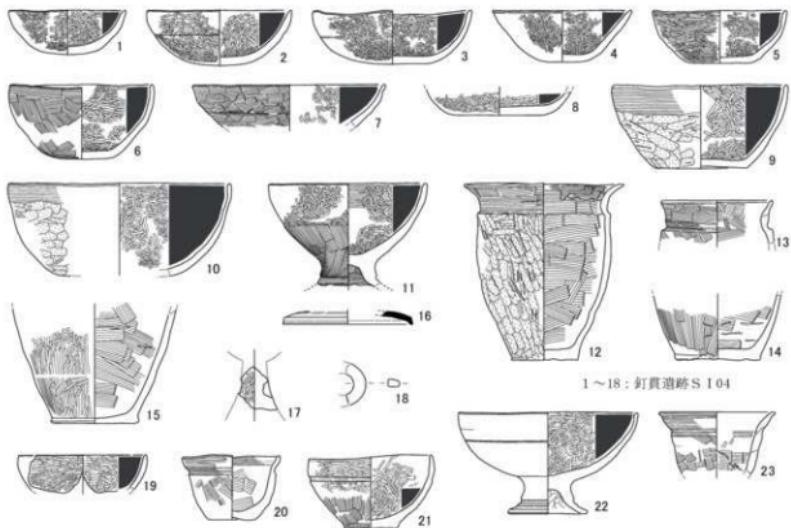
（2）古代諸又集落の位置付け

諸又遺跡の特徴を同時期とみられる盆地中央部の古代集落跡との比較から探ってみたい。比較対象の遺跡・遺構は、横手市八卦遺跡S I 07・釘貫遺跡S I 04・大見内遺跡S I 10・上藤根I遺跡（旧年子狐遺跡）S I 07を抽出した（第9図）。これらは竪穴建物跡内一括資料が得られている遺構であり、諸又の土器類、特に土師器壺の形態に近似する事例から選定した。

抽出した横手市内概期集落の土器組成は、須恵器壺・蓋、土師器壺・高壺・鉢類・長胴甕・球胴甕が挙げられる。諸又では土師器高壺と球胴甕が欠落し、数量比較はできないが、須恵器の保有比率も横手市内より極端に低いと想定される。その他の遺物では小片ではあるが土鏡に着目したい。

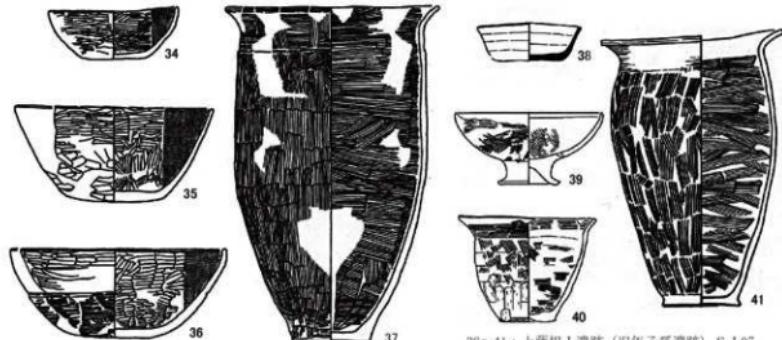


第8図 横手盆地の7～8世紀代の遺跡位置図



1~18: 钉貫遺跡 S 104

19~33: 八卦遺跡 S 107



34~37: 大見内遺跡 S110

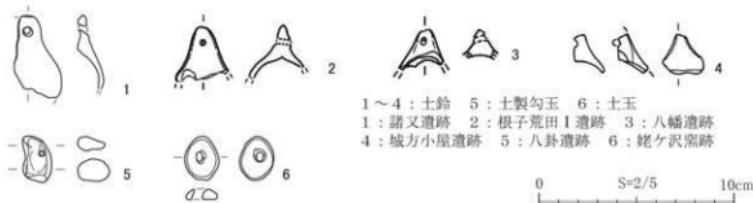
38~41: 上藤根 I 遺跡 (旧年子窯遺跡) S 107

0 5=1/5 20cm

第9図 横手盆地中央部の奈良時代の土器一括資料



第10図 横手盆地北部の奈良時代の土器



第11図 横手盆地の古代祭祀遺物（土製品）

S K11出土の土鉢は、球状あるいは釣鐘・錫形の外殻と頂部の鉢には穿孔による錫が認められる。下半部は欠落しているが、外殻の最大幅は推定3.4cmである。S K11は土坑であるが、前述のように竪穴建物を構成する施設であった可能性もあり、共伴遺物からその時期は8世紀後半から9世紀前半に取まる。県内で古代の土鉢が出土しているのは、管見では払田柵跡周辺域に限られる。美郷町八幡遺跡・根子荒田I遺跡¹²⁾・城方小屋遺跡¹³⁾・大仙市新山遺跡¹⁴⁾での各1点である（第11図）。根子荒田Iは9世紀前半～10世紀前半、八幡・城方小屋は9世紀後半～10世紀前半、新山は10世紀代であり、諸又が最も古い出土例となるのかもしれない¹⁵⁾。これら4例には共通点があり、頂部に穿孔をもつ形状と土師質の胎土ではあるものの薄手で共伴の土師器とは明らかに異なる胎土・焼成である。

魔除けなど呪術的な信仰に基づいた祭祀遺物ともされる土鉢は、古墳時代以降の出土例によれば太平洋側の青森・岩手・宮城・福島に多く、日本海側の秋田・山形では極端に少ないとされる¹⁶⁾。中嶋友文の集成によると¹⁷⁾、青森県内では古代の土鉢が22遺跡から160点出土している。その分布は津軽地方、特に青森市（旧浪岡町）大沢巡川西岸と隣接する五所川原市前田野目台地上に集中し、次いで八戸市内の3遺跡が続くようである。秋田県の4遺跡4点と比較するまでもなく、青森県との差は歴然である。

さらに、土鉢と同様に祭祀遺物とされる勾玉・土玉等の秋田県内における出土量も極端に少ない¹⁸⁾。横手盆地内では、横手市八卦遺跡S I 07から土製勾玉片が¹⁹⁾、横手市姥ヶ沢窯跡S K199から土玉が出土²⁰⁾しているにすぎない。共伴遺物から前者は8世紀後半、後者は9世紀後半～10世紀前半に帰属する。これら祭祀遺物の陸奥・出羽側での出土量の極端な差は、祭祀形態の相違としてみると可能であろうし、払田柵周辺でのみ土鉢が出土することについては、当該集落の構成員に陸奥側からの移入民が含まれていることも推測されよう。

おわりに

横手盆地内における払田柵成立前の古代集落は、中央部と共に北部にも分布することが本事例から明確となった。北部域では現在、諸又一例であるものの、その周辺域でもある上野・水呑場でも同時期の遺物が採集されていることを考え合わせると、払田柵成立前集落の一部は明らかに高闘上郷を中心とする地区に点在あるいは集住していたのであろう²¹⁾。これら集落の構成員とは、土鉢の出土から類推すれば、陸奥側から奥羽山脈を越えて陸路來訪した可能性が高い²²⁾。

西暦801年頃に成立した払田柵は、陸奥国最北の城柵である志波城（803年創建）との連携・連絡を重視し、あの場に造られた。払田柵近辺には大河川ではなく、陸路を重視したその立地は、志波城以北の蝦夷の地との交易・朝貢をも視野に入れた選地の結果であったと筆者は考えている²³⁾。盆地北部における先行集落の発見は、集落構成員が陸奥側と払田柵を結ぶ陸路の開拓・整備の任を負っていたことの類推も可能にした。

横手盆地内に雄勝城が造営されるのは、759年（天平宝字3）である。その所在地は未だに不明のままであるが、史料上では雄勝城下に坂東・北陸地方から柵戸の移設や造営にあたり鎮兵等が大量に動員された記事が認められる²⁴⁾。彼らがどの経路で盆地内に移入したかについては、由理からの陸路すなわち近世の本荘・沼館街道、現在の国道107号が主であったと推定したい。それは史料の記述と共に遺跡の分布も傍証となろう。史料とは『続日本紀』天平9年（737年）条に、大野東人が陸奥国から出羽柵（後の秋田城）までの直路開拓計画を進言し、実行に移したものと雄勝村の手前で断念した記録である。このことからすれば、雄勝城成立時までには横手盆地に南側から入る陸路は確保されていなかった可能性がある。遺跡の分布については、由理から盆地に入る国道107号沿い（雄物川

町・平鹿町）に当該期集落が集中することである。

払田柵成立直前の横手盆地は、西は日本海沿岸部・由理、東は陸奥北部との陸路が整備され、盆地を中心においた東西幹線が機能を果たしていた。陸路の整備は、後の払田柵成立に寄与するとともに、払田柵が10世紀後半まで存続し得たことについても、陸路＝交易・朝貢ルートの維持が大きなウエイトを占めていたと想定しておきたい。

註

- 1 烏田祐悦2004「横手盆地における5～8世紀の土器様相（試案）」『秋田考古学』第48号
- 2 2004年3月29日付けで大曲市教育委員会教育長から秋田県教育委員会教育長あての文書が提出されている。
- 3 筆者は調査中の現地を実見しておらず、以下の記述は大曲市が提出した報告と写真によるものであることを予め断っておく。
- 4 秋田県農政部農地整備課1978『雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査 大曲』
- 5 土師器・須恵器3個体は、秋田県教育委員会1985『払田柵跡I－政序跡－』秋田県文化財調査報告書第122集に実測図が掲載されている。太刀片は秋田県教育委員会2008『秋田県遺跡地図（平鹿地区版）』によると、散逸もある。
- 6 同地区内を対象とした2000年の分布調査により、①鳥屋場遺跡、②下巣町遺跡、③上巣町遺跡、④切上遺跡、中嶋遺跡（④の北约400mに位置）が古代の土師器・須恵器を散布する遺跡として登録され（秋田県教育委員会2001『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集）、同じく2002年には、⑤東田遺跡が新発見されている（秋田県教育委員会2003『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集）。
- 7 大仙市教育委員会2009『半在家遺跡』大仙市文化財調査報告第7集
- 8 概要是、横手市2007「飛鳥・奈良時代の遺跡と遺物」『横手市史 資料編考古』に挿ったが、その他に、④⑤秋田県教育委員会2008『秋田県遺跡地図（平鹿地区版）』／鳥田祐悦2007『横手市平鹿町年子孤地区の遺跡群について－遺物の再整理をとおして－』『秋田考古学』第51号。⑥雄物川町教育委員会2003『水里遺跡』『遺跡詳細分布調査報告書』雄物川町文化財調査報告書第4集。⑦横手市教育委員会2008『撫向遺跡・石塚I遺跡』横手市文化財調査報告第10集。⑧秋田県教育委員会2008『払田柵跡調査事務所年報2007』秋田県文化財調査報告書第440集、⑨秋田県教育委員会2010『払田柵跡調査事務所年報2009』秋田県文化財調査報告書第457集に収録予定。⑩横手市教育委員会2007『会塙田中B遺跡』横手市文化財調査報告第7集。⑪註5文献。⑫美郷町教育委員会2006『八幡遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第2集。⑬高橋学1986『秋田県内出土の墨書き器集成』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号。⑭秋田県1960『秋田県史考古編』を参照した。
- 9 秋田県教育委員会2005『尉川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告第383集
- 10 美郷町教育委員会2008『城方小屋遺跡 森崎II遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第6集
- 11 遺物は、秋田県教育委員会2010『秋田県重要遺跡調査報告書I』秋田県文化財調査報告書第434集に掲載
- 12 美郷町教育委員会2007『根子荒田I遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第4集
- 13 遺跡は払田柵跡外柵東門の東側に隣接する。第1図参照、註10文献
- 14 大仙市教育委員会により2009年に発掘調査が実施された。
- 15 なお鉄鉈は、八郎潟東岸の三種町（旧琴丘町）小林遺跡、米代川流域の大館市狼穴Ⅲ遺跡に各1点の出土例がある。両例とも10世紀代であろう。秋田県教育委員会2004『小林遺跡II 平安時代・中世編』秋田県文化財調査報告第376集／秋田県教育委員会2008『狼穴Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告第427集
- 16 下山信昭の集成によると、東北では59遺跡176点の土鉈が抽出されている（古墳時代～近世までの集計）。うち、山形県1例以外は、青森・岩手・宮城・福島県で占められている。
- 17 下山信昭1996『東北地方における土鉈集成』『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第1号
- 18 中鶴友文2008『古代の土鉈－青森県内の遺跡から出土した土鉈－』『青森県考古学』第16号
- 19 横手盆地以外の土製祭祀遺物出土遺跡は次のとおり。〔土製勾玉〕三種町小林遺跡、五城目町開防遺跡・中谷町遺跡。〔土玉〕三種町小林遺跡、大館市狼穴IV遺跡・积迦内中台I遺跡、鹿角市北の林II遺跡・柴内館跡、能代市鶴果I・II遺跡、北秋田市地蔵岱遺跡。なお、地蔵岱遺跡では角製玉・骨製玉が、鹿角市赤坂A遺跡では石製玉（凝灰岩・翡翠）が出土している。また、横手市釘貫遺跡S I 04から復元径4.4cmのリング状石製品も発見されている（第9図18、報告書では土製品と記載されている）。
- 20 秋田県教育委員会2003『開防遺跡・貝保遺跡』秋田県文化財調査報告書第361集／秋田県教育委員会2001『中谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第316集／秋田県教育委員会2005『狼穴IV遺跡』秋田県文化財調査報

- 告書第391集／秋田県教育委員会2008「駿迦内中台Ⅰ遺跡」秋田県文化財調査報告書第426集／秋田県教育委員会1982「北の林Ⅱ遺跡」『東北縱貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第90集／秋田県教育委員会2003「柴内館跡」秋田県文化財調査報告書第355集／秋田県教育委員会2007「鶴果館跡・鶴果Ⅰ遺跡・鶴果Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第422集／秋田県教育委員会2008「地藏岱遺跡」秋田県文化財調査報告書第431集／雄角市教育委員会1994「赤坂A遺跡」鹿角市文化財調査資料50
- 19 雄物川町教育委員会2004「八卦遺跡」雄物川町文化財調査報告書第5集
- 20 秋田県教育委員会2001「姥ヶ沢窯跡」秋田県文化財調査報告第327集
- 21 手田柵跡の南に位置する慈遺跡、八幡遺跡周辺にも8世紀代の手田柵先行集落が存在していた可能性は高い。これを裏付けるのは、八幡遺跡の東南東約5kmに位置する上中村古墳の存在も傍証になる。概期の集落と古墳群が接している事例は、盆地中央部の造山地区遺跡群（雄物川町造山・東里地区の集落跡、第8図⑦⑧⑨⑩⑪）と般夷塚古墳群（雄物川町造山、⑬）である。
- 22 許21でも取り上げた上中村古墳の構造が、北上市江釣子古墳群に類似することは、土鈴同様に陸奥側から盆地北部への人の動きを補強する材料となるはずである。今まで、上中村古墳自体は現存せず、蕨手刀一振のみが伝来していることから積極的な言及はできなかった事情がある。なお許16文献によれば、岩手県内で土鈴の出土が集中するのは、北上市及び奥州市江刺区（旧江刺市）であることも上記の裏付けとできよう。
- 23 高橋学2009「発掘された手田柵跡-35年間の調査成果と今後の課題-」「古代城柵と蝦夷」講演会資料
高橋学2009「古代から中世にいたる横手盆地の歴史的背景」「大鳥井山遺跡連報展」平成21年度雄物川郷土資料館第2回特別展公開講座資料
- 24 「続日本紀」によると天平宝字3年（759年）9月条には、桃生城、雄勝城を造るために郡司・軍銳・鎮兵・馬子あわせて8180人が動員されたり、坂東八国、越前、能登、越後等の浮浪人2000人を雄勝の柵戸とする記述が認められる。

【補註】カマド状遺構については、小稿のテーマから外れるため、詳述は避けるが、横手盆地でも検出されていることには注意しておく必要があろう。秋田県内でこの種の遺構が検出されているのは、大きく米代川流域、秋田平野へ八郎潟東岸部、横手盆地である。特に横手盆地北部の大仙市域（特に旧神岡町）に集中することはあまり知られていない。横手盆地内にカマド状遺構が検出・確認された遺跡は次のとおり。

大仙市諸又遺跡・四十二館跡・小沢遺跡（岳下遺跡）・茨野遺跡・薬師遺跡・沖田Ⅱ遺跡・北楯岡中野遺跡、横手市町屋敷遺跡。大仙市の遺跡のうち、諸又・四十二館は旧大曲市、他是旧神岡町に所在し、町屋敷は横手市雄物川町。四十二館では6基検出され、1基からは炭化飯（一握り位の御飯塊）が出土。小沢では6基確認されたが、出土遺物はなく時期不明。茨野では焼土遺構として掲載。この種の遺構の中には周間に柱穴が配され、上屋の存在が想起される事例も含まれる。薬師では11基が検出され遺物の出土はなかったが、2基の底面付近の炭化物を14C年代測定した結果では15世紀代と報告。沖田Ⅱでは9基確認され、出土遺物から少なくとも1基は近世の構築とされる。北楯岡中野は2009年に秋田県埋蔵文化財センターによる確認調査で4基確認。町屋敷では12基確認。遺構内容確認調査であり、遺構内精査は実施しておらず、時期等を含め詳細不明。

茅野嘉雄によると、秋田県内でカマド状遺構が検出された遺跡は次のとおり。秋田市下夕野遺跡、五城目町北遺跡、能代市竹生遺跡・童毛沢館跡、大館市鰐飼遺跡・塚の下遺跡、鹿角市乳牛平・妻の神Ⅲ遺跡・当麻館跡・石鳥谷館跡。茅野嘉雄2008「カマド状遺構の集成と今後の研究課題について」「青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要」第13号／大曲市教育委員会1984「四十二館跡発掘調査報告書」／小林克1995「岳下遺跡検出の痕跡について」「秋田県埋蔵文化財センター研究紀要」第10号／神岡町教育委員会2004「茨野遺跡」／秋田県教育委員会2005「薬師遺跡」秋田県文化財調査報告書第388集／秋田県教育委員会2009「沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第443集／秋田県教育委員会2010「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第456集／横手市教育委員会2010「町屋敷遺跡」横手市文化財調査報告第15集

【付記】脱稿後、秋田市河辺戸島〔旧河辺町〕の上野¹¹遺跡から土鈴が出土していることを確認した。遺構外出土であり、遺物についての記述は認められないが、報告書には実測図と写真が載せられている。遺跡は9世紀後半～10世紀初頭の集落跡で居住域の外周に材木塀による区画施設を伴う。土鈴の分布範囲が手田柵跡周辺に限定されるものではなくったが、上野遺跡が秋田平野南部に位置することは土鈴を伴う祭祀空間の広がりや伝播を考える上で示唆的である。秋田県教育委員会2000「上野遺跡」秋田県文化財調査報告書第295集

中国における文化遺産保護管理体系の紹介

楊 芳*1
(訳: 高村知恵子*2・王義軍*3)

秋田県埋蔵文化財センターでの研修期間中に、日本の文化財保護の種類や体系について多く学ぶことができました。秋田県と甘肃省との文化交流事業をさらに深いものとするために、ここで中国の文化遺産の保護管理と分類の体系について紹介したいと思います。文化財に携わる皆様のお役に立つことができれば光榮です。

1. 中国の文化遺産概念の変遷

「文物」という言葉は歴史の長い言葉である。最初に「文物」という言葉が使われたのは、「左伝」という史書の中である。時代とともにその言葉の示す意味は多岐にわたり、中華人民共和国が成立する前までは、古代から残る遺跡・遺物などは全て「文物」と総称されていた。しかし、中華人民共和国が成立してからは、「歴史的価値のある遺跡・遺物を「文物」と総称する。」という法律ができる、「文物」は人類が社会活動中に残した歴史的・芸術的・科学的価値を有する遺跡・遺物を指す言葉となった。

中国文化財保護事業が迅速に発展し、「文物」の示す内容・範囲を国際的基準に従わせたことにより、「文物」は少しずつ「文化遺産」と表現されるようになった。2005年12月「國務院文化遺産保護強化通知」が発表され、その中で初めて正式文書中で「文物」という言葉にかわり「文化遺産」という言葉が使われるようになった。以後、中国文化遺産保護が新しく発展する時代を迎えた。文化遺産概念は更に広がり、動産文化・文物保護拠点・伝統的建造物群保存地区・史跡・有形文化遺産・無形文化遺産及び将来、その価値が生じるだろう文化資源を包括するようになる。しかし、未だ「文物」と「文化遺産」という言葉は混用されている状況である^{註(1)}。

2 中国における文化遺産の分類（図）

a 有形文化遺産

有形文化遺産は形がある物質で、触ることができる・見ることができる・探測することができる等、あらかじめ形状のわかる文化遺産を示し、その中でも動産文化遺産・不動産文化遺産という二種類に分けられる^{註(2)}。

動産文化遺産とは、随意に場所を変えても情報・価値が変わらない遺産を指し、それらは歴史上各時代の貴重な芸術品、工芸美術品、各時代の重要な文献史料及び歴史・芸術・科学的に価値のある原稿と図書資料等を包括する。歴史上、代表的な各時代の民族社会制度、社会生産、社会生活のあり方を反映するものである。

国立の收藏機関では、動産文化遺産をその歴史・芸術・科学的価値に従って貴重文物と一般文物と分けられ、貴重文物はさらに一級・二級・三級に分けられる。一級文物の中も甲・乙に分けられ、一級甲文物は「国宝」と総称されている。

*1 甘肃省文物局弁公室 *2 埋蔵文化財センター総務班主任 *3 埋蔵文化財センター臨時職員

民間の収蔵文物とは、文物収蔵機関以外の公民・法人その他組織が、中国の法律法規に基づき正当な手段で取得した文物である。文物収蔵機関以外の公民・法人その他組織が収蔵した文物を、国立の収蔵機関に寄贈したり、あるいは文物収蔵機関の展覧会・研究に貸し出したりすることを国は奨励している。国立文物収蔵機関は寄贈した人の意志に従って、適切に文物を収蔵・管理し展示しなければならない。

不動産文化遺産とは、人力ではなく機械の力を借りないと移動できない文化財であり、あるいは元の環境でないと適合できないものである。主要なものとして歴史、芸術、科学的価値のある古代文化遺跡、古墓、古建造物、石窟寺院石彫刻、壁画がある。さらには、重大歴史的事件、革命運動あるいは著名な人物の重大な歴史的意義をもつ出来事、教育意義等において、歴史資料上、価値ある近現代の重要な史跡、代表的建築等である。それは世界文化遺産・文物保護拠点・伝統的な建造物群保存地区に分かれている。

文物保護拠点（文物保護単位）は、歴史・芸術・科学的価値の違いに基づいて、全国文物保護拠点・省級文物保護拠点・市町村文物保護拠点・未採択の文物保護拠点に分けられる。

保存されている文物がことのほか豊富で重大な歴史的価値があり、革命記念的な意義をもつ都市・街道・村落は、省・自治区・直轄人民政府によって、伝統的建造物群保存地区として採択・公布される。あわせて、國務院への届出もなされる。

b. 無形文化遺産

無形文化遺産とは各民族に伝統的に継承され、大衆生活に密接に関係しているいろいろな伝統文化的表現の諸形式（民俗活動・表現藝術・伝統知識と技能及びそれらに用いられる器具・手工芸品等）と文化的空間である。

無形文化遺産は2種類に分かれる。一つは伝統的文化表現の諸形式、例えば民族的活動・表現藝術・伝統知識と技能、二つめは文化空間、例えば定期的に伝統的な文化活動が行われ、伝統文化表現が集中的に目の前に現れる場所、そして空間性と時間性を備えるものである。

無形文化遺産には、口承伝統芸能、伝統表現藝術、民俗活動、礼儀、祭事、自然界と宇宙に関する大衆的な伝統知識及び実践、伝統手工芸技術技能とそれらに関係する表現形式、文化的空間も範囲に含まれる。

民間に伝わる伝統文化や文化的空間のなかで傑出しているもの、無形文化遺産の中でもとくに典型をなす歴史・芸術・民俗学・社会学・人類学・言語学及び文学方面など重要な価値を持つ無形文化遺産の代表作は、國務院が許可・公布し國家級無形文化財名録に登録される。

中国の社会的発展により文化財保護の管理体系は日に日に整いつつある。秋田県と甘肃省との文化交流事業がより深まり、お互いに理解しあえることを願う。

【訳註】

訳註1) 日本では一般的に、ここでいう「文物」・「文化遺産」を「文化財」としている。

訳註2) 動産文化財は土器や石器などの「遺物」が該当する。また、不動産文化財とは堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの「遺構」、それら遺構の集合体としての集落跡などの「遺跡」を指す。

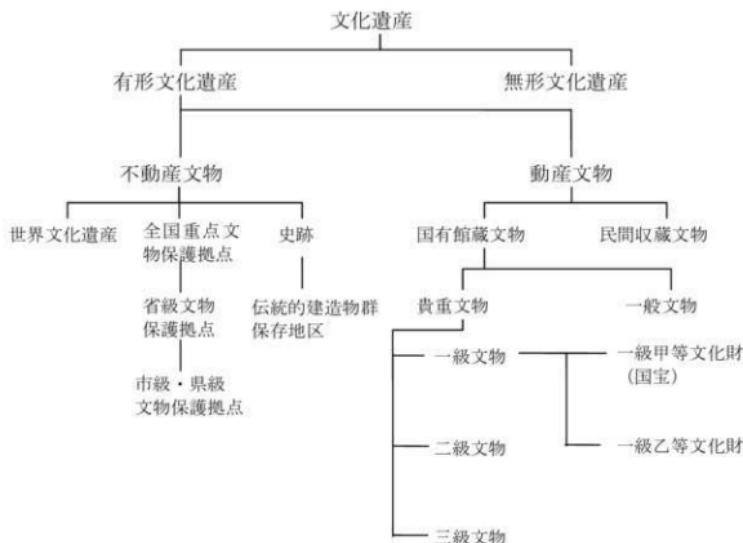


図 中国における文化財保護の体系

<補足>

本稿は、平成21年度秋田県・甘粛省文化交流事業により来秋された甘粛省文物局弁公室の楊芳女史に執筆いただいたものの訳文です。楊女史は平成21年8月16日～11月15日の約3か月間、交流員として当センターで埋蔵文化財業務の実際を研修し、また、学校交流にも積極的に参加していただき、秋田県と甘粛省の文化交流にご尽力されました。甘粛省文物局では文化財保護業務に携わっているため、今回、中国の文化財保護体系についての紹介を依頼しました。時間のない中での急なお願いにもかかわらず、ご快諾いただきましたことを感謝します。なお、翻訳については必ずしも適訳とはいえない箇所もあるかもしれませんご寛恕いただければ幸いです。

(埋蔵文化財センター資料管理活用班 文化財主任 吉川耕太郎)

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第24号

発行年月 平成22年3月

発行機関 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187)69-3331

FAX (0187)69-3330

URL <http://www.pref.akita.jp/gakusyu/>

maibun_hp/index2.htm

E-mail maibun@pref.akita.lg.jp

印 刷 株式会社 フロム・エー

